

---

# 俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？

K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と俺の嫁と召喚獣だど？  
エヴァ

### 【Nコード】

N4598Z

### 【作者名】

K

### 【あらすじ】

第0話の事前説明を良くお読みください

第19話アップいたしました！（13日）

第20話は14日、15日中にアップ予定です（13日）  
アップ予定変更がある場合は、早めにお知らせいたします

## 第0話〈事前説明〉

以下説明を全て読み、読んでもいいと思った方のみ本編をご覧ください。

『魔法先生ネギま！』の世界に転生し、原作を終えて、築いたハーレムの嫁達と楽しく暮らしていた！のだが、神が勝手に『バカとテストと召喚獣』の世界に飛ばしやがった！？しかも嫁の1人であるエヴァンジェリンと共に！？

主人公の名前は、ルルーシュ・T・ランペルージ？『コードギアス』のルルーシュの容姿を持つ主人公であるが、ギアスはもっていないからね？

無駄な能力達…死亡フラグのない世界じゃ、特になにも必要ないし！

そんな主人公と、エヴァンジェリンが織成す、まったりとした、文月学園での生活はどうなる・・・！？

### 更新不定期

誤字脱字の指摘や感想、質問等なんでもお待ちしております

魔法先生ネギま！の原作をご存知の方で、こんなエヴァ見てられない！という事がありましたら、お引取りお願いします

魔法先生ネギま！の原作をしっているほうが読みやすい部分があるかもしれません

コードギアスの原作等はしらなくても問題ありません、主人公の容姿、また、名前をお借りしているにすぎないので、知らない方は【コードギアス ルルーシュ】などで検索して、容姿だけ確認していただければ、読んで行かれる上で想像しやすくなるかと思えます

また、不適切な表現や、何か問題があるようなことがありましたら、ご報告ください。確認し次第対応させていただきます

また、個人的にこんな表現が嫌だとか、こんな話しの流れ嫌だというような嫌悪感、また見てられないと思うようなことがありましたら、速やかにお引取りください

作者は物語を書く者としてはまだまだ一般人レベルですので、表現力や、話の転開等しっくりこない部分も多々あると思います、どうぞ温かい目で見ただければと思います。アドバイス等は随時お待ちしております

## 第0話〜プロローグ（前書き）

K「はい、ということで、行ってきなさい」

？「え？何？何？」

本編開始

## 第0話〜プロローグ〜

はぁ・・・

今度はバカテスか・・・

俺は現在、文月学園近くのマンションの一室にいる

そして俺の目の前にある手紙にはこう記されている

『まいどご苦労ご苦労』

ワシじゃ、ワシ・・・そう！そうじゃ、生意気な貴様を毎度毎度

転生させていやっている、ワシじゃ』

ワシねえ…ワシさんなんて知り合いいたか？

鷲？

飼ってた記憶はないな

『いや、天界で会った神じゃ

前はフラグ乱立の世界、魔法先生ネギまじゃったの

今回はそういった余計なものは心配するでない  
いたって普通のバカとテストと召喚獣の世界じゃからの』

うん…神のおじさんね、あの電波オヤジね

そっぴや、ネギまの世界にいて、無事原作も終わらせて数十年ほど  
生活してたと思うんだけど・・・？

って待て、俺の嫁達はどうなった？

仮契約で、不老不死の効果がシンクロしてたはずだが

現在俺が、別の世界にいるってことは…

『ああ、嫁達のほうは幸せに暮らしておるよ

まあこの世界で100歳ぐらいまで生きて死んでくれたら、向こうに帰すからの

一応、こちらで長期の仕事という扱いで、当分帰れないことを伝えてあるし

まあ時間系列が異なるから、こっちでの100年が向こうでの一年ぐらいにしてあるわい』

ほう、なんというご都合主義具合だ

「それは、便利だな」

「うえ？」

気づかなかった、となりに座って手紙と一緒に覗く存在が居たことに

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

俺の嫁の1人だ

「エヴァ？」



「うん？なんだ？そんな驚いた顔をして  
その手紙に書いてあるだろう？」

ん？エヴァが指した先には、読んでいた手紙

続きに書いてあるのか

『とは言ってもものう…死んだわけじゃないから、能力調整がで  
きんのじゃよ

暴走などもしかねないし・・・ということじゃ、エヴァン  
ジエリン殿をお主のストッパー役として一緒にその世界に送っ  
ておいたからの

まあ半分休暇とでも思っ  
て楽しむがよい』

はあ……

でもよ…この原作って高校だよな？

見た目小学生のエヴァを送ってくるぐらいなら、あすにやんとかさ  
…あると思っ  
んよ……っ  
てもう言っ  
ても遅いな

『ということじゃ、能力制限がついてないからの、その世界での能力使用等は充分注意をはらってくれの…不老に関してじゃが、認識阻害で将来的には、違和感をなくして生活してくれの

ちなみにやつてもらうことは、特にないのじゃが

その世界の住人2人がたぶん他の神のミスで、魂情報ごと消えてしまったようでの、その埋め合わせなんじゃ

ということで頑張れ

B Y神のワシより』

「へえ」

「それで、よくわからないまま、変なオヤジに仕事の付き添いとして連れてこられたのだが、ここは別世界なのか？」

ああ、エヴァにも説明しなきゃいけないし

というかこの時点で俺の名前も俺の特徴もなにも出てきてない気がするし…

まあいいか

「とりあえず、この世界は、そうだな…簡単に言えば旧世界の表の世界のみしかないと考えてくれればわかると思う」

「ほう…魔法はないのか？」

「ないよ、麻帆良のように超人じみた中学生もいないし裏社会というなら、ヤクザ、マフィア、それから外国とかには暗殺を請け負うような本当に裏に準じている人もいるんじゃないかな」

「ほう……それではゆっくりルルと過ごせそうだな」

おお、エヴァ！俺の名をやっと呼んでくれたか

俺の名は、ルルーシュ・T・ランペルージ

あのギアスを使い祖国を潰そうとするあのお方の偽名を、一部だけいじっただけです

何故そんな名前か…簡単です、容姿があれなんですもん

一応身体能力は、全体的に高いと思いますね、ネギまの世界で死線をくぐりぬけてきましたから

その他能力ですが、空間把握能力EX、金運EX、恋愛S（EX）（詳細数値化不可）、脳波伝達速度SS以上、魔力はチートバグキヤラ並、気はラカンほどではないがそこそこある程度、動体視力SSもしくはEX判定、ご都合主義値測定不能、主人公補正測定不能

がそなわっております

そうですね、こんな平和な世界で使うことがあるかわかりませんが、  
武力的な面での説明を入れましょうか

得意魔法属性：全属性　一番適正があるのは闇、次に何故か治癒や  
結界などの補助魔法の適正が高い

技：カン力法取得済み、居合い拳も可能、京都神鳴流剣技使用可能

武器：特になし

特殊能力：ミリオンゴッド（金運値異常特性）、魔王様（眠い時、  
もしくは眠りを邪魔された時光臨）、ニコナデポ（微笑みながら撫  
でると発動）、ガッシュベルのティオの術が使用可能

とまあそんな感じですね、一応武器もありますが、銃刀法違反にな  
るのは嫌なので、影の倉庫に封印します

「エヴァ、これからどうしようか」

「さあな、神とやらのもう一枚の手紙に書いてないのか？」

もう一枚の手紙だと？

はっ！もう一枚あった…

『P s . お主等の戸籍は用意してあるし、特別に、元の世界の貯金から少し降ろして、こちらの世界の銀行に移してある  
それと、もちろん、わかっておるじゃろうが、文月学園にかよってもらうからの…でなければ話がすまん  
ということで、転入試験は今日じゃからの』

今日だと？

今何時だ…

「エヴァ、今何時だ？」

「神からの荷物に携帯が入っていたから、それで確認したらどうだ？」

神からの荷物だと？

ああ、目の前に普通にあったわ

手紙に気をとられすぎてて視界に入らなかった

中身をあさる

銀行のカード＋通帳（俺名義で一組）、健康保険証（エヴァと俺の）、スマートフォン（2台）、現金30万（茶封筒に、『手持ちないと不便じゃろうから、少しおろしておいたからの』と書いてある）

ほう…

「この携帯2台あるが、1台私が持つということか？」

「そうだろうな・・・魔法があるような世界じゃないから、自然魔力が多くないから、念波とかより携帯の方がいいだろう」

「そ、そうか…使い方覚えられるかな……」

そう、エヴァは重度の機械音痴である

原作のエヴァはどうか知らんが

ここにいるエヴァンジェリン・A・K・ランペルージはそうなのである

「まあ仕方ないさ、少しずつ覚えていけばいいだろう?。」

「そうだな、それで、時間を確認したかったんじゃないのか…?。」

「あ、ああ…」

ん……？流れるにさ、もう時間やばい！遅刻！

Fクラス入り確定！

とかかと思っただが……そんなことはないようだな

ということで時間があるので文月学園のことを一通りエヴァに教えたのだが

「ふんっ、ならばAクラスという最高の環境で、過ごそうじゃないか！」

「そうだねえ……ってエヴァ、勉強できるの？」



規模が違う、麻帆良での学生時代エヴァのテストの点数は100点満点中60〜75点前後かと思う

一方、こちらの文月学園は、時間内なら問題数無制限だ

「あれは、やる気がなかったし、何度も中学生をやらされていれば勉強なんぞしたくなるわ！だが今回は違っただろう？それなら、まっとうに学校にかよってやろう」

まあ確かに数百年も生きてきたからな、そこらへんのよりは頭いいだろう

「エヴァ、総合教科で3000点以上あれば、Aに入れると思うよ」

「そういうルルは・・・ってお前、頭いいんだっただな」

そう見たいですね、大元のルルーシュさんの頭脳でもうけついでなのでしょうかねえ

「じゃあ3000点以上でがんばろうか」

「そうだな、2人並んで授業を受けたいな／＼」

ええ、妻にしてから、エヴァはちよくちよくデレますね…かわいい・  
・  
・

## 第0話〜プロローグ〜（後書き）

K「さて、いかがでしょう、見切り発車過ぎる今回の作品！

ノクターンにあげている小説も更新が滞ってる中…アップしちゃった

ええ、前回バカ姫という二次作をあげたのですが、修正がつかなくなり、打ち切りとさせていただきまして、修正しようかと試みたのですが、なんか全然別物思いついちゃったから、アップしちゃう！ということで今回のバカテス二次作あげさせてもらっております」

ルル「それで、主人公の名前こんなんでもいいのか？」

K「たぶん？それにミドルネームTだし〜Tだし〜」

ルル「そんなことより、魔法先生ネギまの時の話しはアップしないの？」

K「え？ああ、ね……きつと……いつか……ね……」

ルル「いきなりですが、ご覧頂いた方に、お伺いしたいのです！」

K「したいのです！」

ルル「文月学園の点数の設定なのですが、何点〜何点が何クラスで〜とかいいますね、あれってどんな感じなのかいまいちゃわかってなくてデスネ…教えてください〜！それと、総合教科って、どの教科が含まれて計算されてるの？っていう疑問ですね…お答えいただ

ければと思います」

#### 質問回答募集

？何点〜何点が何クラスで〜という主な目安  
？総合教科に含まれている教科

第0 5話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……（前書き）

K「おはよん」

ルル「おはよう」

K「まさかの0 5話ww原作開始までいけなかった・・・」

ルル「ちよつとびつくりしたわw」

K「ではでは本編どうぞ」

本編開始

第05話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……

ひとまず、生活に最低限必要なものと、朝食を求め

エヴァとコンビニへ行き、家に戻ってきた

TVもないし、PCもないし……

エヴァは無言で俺の膝の上にのり、パンを食べている

ルーテストが終わったら、電化製品を買いにいった、あとは衣類か？

21

この家、寝室にキングサイズのベッドが一つ

リビングにテーブルとソファが二つ

それ以外のものがなにもないのだ

ん？制服くないか？

普通用意しといてくれたりするよね？神のワシさんよ？

『ワシはワシって名前じゃないわい！』

はっ！電波が飛んできた、やはり電波ジジイだったか

『いや、ワシ目の前にいるじゃん？』

ん・・・俺とエヴァのまったりとした朝食の時間を邪魔してきた、電波である

どうやら、エヴァには現在見えてないらしい

『まあよい、もうとうぶん出てこんわい  
制服はと数着の下着、衣類等を、今クローゼットの中に入れてき

たからの

それだけじゃい！もうワシはいく！頼まれても、電波呼ばわりするようなお主の元にはおりてこん！！そいじゃの』

言いたいことだけ言って、スッと消えてしまった神

言いたいことだ言い放っていくとは……まあいい、まあいい、もう電波を受け取ることも数十年はないだろうよ

エヴァと俺は制服に着替えも……エヴァのかわいさに雄叫びをあげたのは、悪くない！



とまあここまではいいんだけどさ、文月学園ってどこよ？

ああ、スマホのマップかなんかで見ればいいか

なんとかたどり着くことができ、職員室にお邪魔して転入試験の意を伝えると、ちゃんと話しがとおっていたようで、黒光りするとても大きい、カクカクした人型ロボットが対応してくれた

「今、クラス分け試験実施中で空き教室がなくてな、補習室で試験を受けてもらう

こっちだ、入れ」

なんか入るの嫌だね・・・補習室・・・

「そうだ、自己紹介が遅れたな、教育指導担当の西村だ」

「な、なんだと？ルル、人外かと思ったが、ちゃんとした人間のようだよ！」

ちょ、エヴァ、それ口に出しちゃダメだって………

ええと、軽く説教を喰らいました俺も…

ということで、転入試験を受けています

どのくらいあれば転入試験合格かしらないけど

Aクラス並なら問題ないでしょ

3500〜3800程度にしておけばいいかな

テストしていて思ったのだが、確か原作で姫路が回復試験を行っていた様子があったはずだが

体弱い女の子っていう設定だよな？

なんであんな速度で回答できるんだ？

「そこまで、2人ともお疲れ様  
まあはつきりとはいえないが、これだけの問題用紙を積んだよう  
だからな…転入は可能だろう  
後日、可否を連絡する」

ということは無事試験終わりました

エヴァも結構解けてたみたいだし、まあ大丈夫でしょう

「エヴァ」

「どうした？」

「とりあえず、家電買いに行つて、後日届けてもらつとしようか」

「そうだな…うーんそつちは任せるから、私は調理器具とか買いに  
いつてくる」

エヴァちゃん料理得意なんですよねえ

俺に美味しい料理を食べさせたいとか言つて…いや、俺だけに食べ  
てもらいたいと…懸命に料理の勉強してたなあ

「そうか、じゃあこれお金〆終わり次第連絡つてことで」

「うん、冷凍庫は、ちゃんとマグロー匹入るぐらいのにしてくれ」

ちよつと待て、マグロー匹入る冷凍庫なんて…一般家庭用が売つて  
るわけがなかるう？解体したあとのマグロを保管するための冷凍庫  
ならともかく

絶対エヴァのことだから、丸々一匹入るものをご所望だ…

「エヴァ？そんなサイズは、業務用ぐらいしかないと思うし…」

「ぬ、そうなのか？んー…じゃあ出来るだけおおきなのに…大きい  
と高いものがとれないじゃないか！」

「んー…まあ高いものは俺がとればいいし、気にすることないんじゃない？」

「そ、そつだよな！ルルがいるなら何も問題はないっ！  
よし、じゃあ大きいのを買ってきてくれ」

ということ、おじいさんは、家電量販店へ

おばあさんは、デパートへ…

ああ、ヤバイ、冗談でもおばあさんなんて言ったらエヴァにフルボッコされてしまうな

忘れよう

気を取り直して、家電量販店で買い物……

冷蔵庫、TV、HDD内臓BDレコーダー、炊飯器：これは、3、4個買って行ってエヴァが気にいったの使わせるべきだな

えとーあとは、エアコンはあるからいらないな、ああ、加湿器、空気清浄機、それからPCを二台買って

え、何？ここでネット回線の契約もできるの？え？パソコン安くなるの？おお、そうかそうか

後日配送の手続きを済ませいざ終了！

店から出て、エヴァに連絡を…ドン…「あ、すみません」

人にぶつかってしまいました

「ああん？てめえテキトーにごめんなさいして許されるとおもって  
んのか？」

はあ……やべえ、何この昔ながらのからみ方みたいな感じのことを  
してくる人www

ちょーうけつwww

じゃなかった、ちょーうけるーーはいはい、もういいよね

「すみませんでした。では、急いでのこの辺で…」

めんどくさいから下手下手にね



「ったくよぉ〜さっさとっせろ、ボケエ！」

と、酷い返答を喰らったが、まあ案外素直に帰してくれたな  
よかったよかった

エヴァと合流し、一度荷物を家に置きに行つて、夜ご飯は外で食べることにした

「ルル、美味しそうな匂いがする」

何を食べるか、相談しながらエヴァと町を歩いていると、エヴァ

が突然そんなことをいいだした

「ん……

っ……!!

このっ、匂いはっ!」

「なあッル、お前そんなわざとらしいリアクション取るような奴だっ  
たか?」

「コメディ―補正【弱】がかかっているせいだろうっ……気にしないで  
くれ」

「そ、そうか……ところでこの匂いは……」

「俺には感じないという事は、血か?」

町を歩いて血の匂いがするってなあ……飲食店で使われている肉  
類の血か?

「……ッル、たぶん厄介ごとじゃないか?」

「ん?」

きゃあっ!

「悲鳴かな？」

「そうみたいだが？ルル、助けにいくのか？」

「そうだねえ、そうしょうか」

く美春 Sideく

現在私は、お父さん……じゃなかった豚野郎に追われている最中です

いつものことなので、何故こうなったかなんて記憶にありません

「ミハルミハル……サア、パパトホウヨウヲ……………」

「気持ち悪い！くんな！豚野郎！！」

「ミーーハーールツ！！！！」

「私の名前を大声で呼ぶなです豚……きゃあっ！」

私としたことが、つまずいてしまいました

なんとか、体制を整え転ばないようにはしたのですが、バランスを取ろうとした

時に、手を地面に擦ってしまったようで、小さな擦り傷を作ってしまった

美春 Side END

悲鳴が聞こえた方へ向かうと、制服を着た少女がおっさんに追いかけられている

シーンだったわけだ……

「えうつ!？」

その少女を抱きかかえ、裏道を使いそこそスピードを出して走り抜ける

「ちょ、なんなんですか！豚野郎が美春に触れるなんて！」

なんか文句言われてるんだけど…あれ？助けてあげた側だよね？俺・  
・・

いや、まさか追いかけてられて襲われるみたいなプレイを楽しんでいたわけじゃないよね？

「あー助けなくてよかったのか？」

「え？ああ、た、助けてくれたのですか…で、でも、降ろしてください！」

男に触れられているなんて嫌悪感はありません！！」

そう言えばこのこみたこと…ああ、暴走縦ロールの清水美春がつていうことは、さっきのガラ・ペデイスの店長であるお父さんか？

「とりあえず、少し距離は離れたかな…」

美春を解放します

「二度と触れんな豚野郎！ともつと文句を言いたいところですが、一応助けてくれたことには感謝s「ミハルツーーーーー！！！！！！」したいところですが、逃げなくてはいけないようなので失礼するです」

はあ……そうやってどれだけの時間にげてるのかねえ……その時間を勉強に費やせばまだ有意義な時間だと思うんだけど

「キ、キ、キサマガ、ミハルニテヲダス、オロカモノカ……コ  
ロ、コ、コ、コロス、コロスコロスコロスコロス……」

「俺敵だと認知された？」

数百メートル離れた位置から全力疾走してくるおっさんが、明らかに俺に対する敵対心を向けてきた

それにしても声でかいな……

「そうですね、逃げた方がいいかと思います」

「エヴァー木刀か竹刀あるー？」

「？」

俺はエヴァに話しかけたのだが、横で美春は何言ってるのこの人？  
つという表情を浮かべている

「木刀でいいか？竹刀だと下手するとあれにはきかないかもしれないからな」

ふと俺の横に現れたエヴァに驚いたようで美春は、エヴァを数秒の間見ていた

木刀をエヴァから受け取り、構える

「ちょっと、何する気ですか？  
あんなの相手に出来る人間がいるわけじゃないです！  
さっさと逃げるべきです！！」

美春からの忠告は無視して、美春のお父さんと思われるおっさんに  
向かって走る

「京都神鳴流          斬岩剣ッ！」

斬岩剣    気を刀に纏わせ斬る技

「コロスコロスコロスッ!!」

木刀と拳がぶつかる

通常であれば、拳の骨が砕け散るところなのだろうが……

受け止められたってどういうことだ……コメディー補正キャラ強すぎだろ

拳と木刀のぶつかり合いが生じる

うーん……まさか魔法を使うわけにもいかないし

「ルル! そいつは明らかに対武器戦の戦闘に慣れている! 肉弾戦に切り替える!」



ほう、エヴァちゃんナイス助言

木刀をエヴァの方に投げ、一瞬で手をズボンのポケットに入れる

居合い拳である

居合い拳 手をズボンのポケットに入れて、そこから素早く居合いの要領で拳

を打ち出す技

距離を開きつつ、中距離でも扱える居合い拳を放ち続ける

何発かクリーンヒットしたようで、暴走化したおっさんは気を失い倒れた

「まったく、こんなめんどくさいのがいるとは…」

「ホントだな…こんなの普通の奴には倒せないぞ？殺気も一般人のそれを超えていたしな」

「さて、エヴァ、そろそろご飯食べに行こうか」

「そうだな」

何か忘れているような…

「あの豚野郎を、豚野郎が倒すなんて…  
あなた一体何者です？」

あ、美春のことすっかりわすれてた

まさか一般人に木刀とはいえ、斬岩剣を拳で止められるなんて思っ  
てなかったから熱くなってたわ……

「ルルーシュ・T・ランペルージ……まあ覚えなくていいよ  
あれの処理は任せるよ、君の知り合いみたいだし」

「ちよつ、待ちなs……」

何か言っているが、あのオヤジとできれば二度と会いたくないの  
で、これ以上

関わる事をやめ、さっさと逃げるようにその場をさる

第0 / 5話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……（後書き）

K「清水美春との出会い編でもありました」

ルル「人外美春パパはヤバイね……」

K「とまあ、ぶっちゃけかいてて、主人公の口調が元のルルーシュにあつてないのが気になるところですが……まあしかたないよね……?」

ルル「どうにか、読者の方には脳内変換していただいて……」

K「さて、話は変わりますが、第0話プロローグしかアップしていないにもかかわらず、お気に入り3件の登録をいただきました。ユニークアクセスは既に200と……想定外に伸びていたのびつくりですね

ありがとうございます。

作者といたしましては……贅沢を言っしまえばどんな些細なことでもいいので感想なんかいただけたりすると、嬉しかったです」

ルル「では、この辺で失礼します

ご覧いただきありがとうございます！」

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）…姓

K「ちゃっちゃー」

ルル「はい、こんばんわ」

K「キリが悪いかったり、話しの転開仕方が悪かったりするかもし  
れませんが、どうぞご覧ください」

本編開始

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）…姓

テストを受けて数日後、携帯に合格という連絡が入り

無事転入できることとなった

通学初日・・・文月学園新年度の初登校日

もうすでにこの世界での生活に慣れ、生活する上で不便はなくなつたところであつた

エヴァと共に制服に着替え、文月学園に登校……

学校に近づくにつれ、文月学園の制服をきた生徒が目立ってくる

「なあ、ルル。私達への視線が多くないか？」

いやーそれは仕方ない…エヴァが制服着て歩いてたら、そりゃ見るわ小学生と見間違うかも知れない容姿だし

それに美少女だし

金髪で外国人だと一目でわかるし

注目はエヴァに集中……し、してないだー！？

エヴァへの視線も多いが

何故俺への視線が……いや、少なからず、殺気まがいのものや妬みがまざった視線を飛ばしてくる者もいるな

「エヴァがカワイイからだと思うよ」

「そ、そうなのか？／／／

いや、でも、私にはルルがいるからどうでもいいな」

一瞬戸惑う表情を見せたが、すんなり普段の表情にもどったな…

むしろ、見てくる奴らを睨みつけているような……

数分後文月学園に無事到着

入口には、黒光りする大きなゴツゴツとした人型ロボットが…じやなくて、西村先生がどんと構えて立っていた

「お前達は確か、ランペルージ兄妹だったか？」

名前は覚えてたみたいだけど、勘違いしてるなあ

「違う！ルルと私は配偶者だ、つまり夫と妻だ！  
ちゃんと書類に書いてあっただろう？」

「え？そ、そうなのか、それはすまない…」

エヴァちゃん、兄妹に見られると怒るのね…っっていうか俺とエヴァ似てないってww

しかも俺なんて黒髪じゃん？

「エヴァ、まあ落ち着いて」

「うん……」

「ほら、クラスの振り分け結果だ、転入試験の成績が振り分け試験代わりとして代用されている」

名前が書かれた、二つの封筒が差し出された

そのうち一つが俺、もう一つがエヴァのだ

それを受け取り、開くと『Aクラス』と表記されていた

チラッとエヴァのほうを覗くところらも『Aクラス』



無事Aクラスになれたようだ

「よかったエヴァも俺もAだな」

「当たり前だ、このぐらい楽勝だ」

と堂々と胸を張るエヴァ

うん、カワイイねえ……

「ところで、ルルーシュの方だが、転入して初めから大変かも知れないが、頑張れよ」

「何がですか？」

何を言ってるんだ？

理解してない俺に気づいたのか、西村先生は俺の振り分け結果の書かれた紙を指差す

『Aクラス』

ん？何？これがどうか……

『Aクラス』のちょっと下の方に、小さくこう書かれていた

『次席』

「はあ？ちよつと待てよ……何故だ？」

「今回二年生で総合教科得点が4000点オーバーなのは、お前とAクラス代表だけだ」

4000点オーバーしたつもりないんだけど……まあいいか

「じゃあとりあえず、こんなところで長話もあれですからそろそろ失礼しますね」

「そうだな、まずは職員室に行つて、高橋先生のところへ行つてくれ  
お前達は転校生だから、担任の先生が案内してくれる」

「そうですか」

西村先生の指示の元、職員室を訪ねて高橋先生と合流する

「あなたが、ランペルージ君とランペルージさんね」

もう一度確認しよう

俺の名はルルーシュ・T・ランペルージ

エヴァはエヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）

実にややこしい

「自分の事はルルーシュで構いませんよ、呼びにくいでしょうし」

「私も名前で構わない」

「そうですか、では、改めてルルーシュ君、エヴァンジェリンさん、あなた達2年Aクラスを担当します高橋といいます

あとは学年主任も兼任しています

教室まで案内しますので付いてきて下さい」

高橋先生：キリツと真面目そうなメガネをかけたスレンダーな女性  
コンタクトにして、髪形を変えたら普通にモデルやグラドルなんか  
できそうだなあって思う  
美人さんである

一つの教室の前まで案内されると、少々待つように伝えられ、廊下  
で待機する

暫くすると入室を許可された

たぶん先に先生自身の自己紹介を終わらせたのであろう

教室に入ると、驚いた

勉強する場所とは思えない設備

わかってはいたのだが、実際目にとるとあまりにも無駄に設備費がかかっていることが見て取れるほど、環境が整えられており、驚愕してしまったのである

「自己紹介を……」

高橋女史に促がされる

「ルルーシュ・T・ランペルージ、何故か一応次席らしいが……この学校のこともよくわからない、皆フォローを頼む

それと、ルルーシュと呼んでくれると助かる」

「エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ、先に言っておく、ルルとは兄妹ではないから間違えるなよ？私はルルの妻だからな！」

うん、西村先生に間違えられた時から、自己紹介辺りで言うかと思っただけ、やっぱり先に宣言しておくんだね

エヴァの言葉にザワ付くなか、1人のメガネをかけた男子生徒が拳手してから立ち上がる

「久保利光という、質問いいだろうか？」

「はい？」

「日本での入籍は、男性満18歳、女性満16歳以上と定められている

僕達は高校二年生。エヴァンジェリンさんの方は、満16歳を超えているとしても、ルルーシュ君の方は、18にはなっていないはずなのだが、どういうことだろうか？」

そうこれだ、だが、日本国内ならの話しだったらだ

「まあ日本国内で入籍したわけじゃないからね

海外だよ、どこでという明確な場所は秘密にしておくが、例えばアメリカは州によって年齢制限が異なるし、スペインでは男女共満14歳、それに年齢制限がない国もあるらしいし」

「なるほど、そうか説明ありがとう」

納得したのかすんなり席に座る

他の生徒達もどうやら納得したようだ

「では、後ろの空いてる席に2人とも座ってください」

高橋先生の指示でエヴァと並んで、空いていた席に座る

「では、皆さん自己紹介を……」

自己紹介長いな……趣味とかさ、好きな物、嫌いな物とか聞いても、覚え切れないだろ普通……

改めて俺の番

って、また自己紹介するの？

「えと、じゃあ改めて、ルルーシュ・T・ランペルージ

とりあえず、そうだなあ…エヴァに危害を加えたり、嫌悪するよ  
うな発言をしたら、死ぬと思え……」

いや、俺がやるわけじゃなくて

エヴァにサクッと殺られると思うから、そついう意味での忠告ね・  
・

それから少しして、またエヴァの自己紹介

「なんだ？またするのか？

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ

あーそうだ、一つ忠告しておく…ルルの眠りの邪魔だけはするな

……頼むから………」

え？なんでそんな切実な思いを込めて言ってるの？エヴァちゃん…？

1人を除く全員の自己紹介が終わった



最後の1人は、主席である彼女だ

容姿端麗成績優秀

運動神経もなかなか…というか下手すると暗殺業とか、拷問による尋問官とかになれそうなほど

な、大和撫子ということばがぴったりな

黒色ロングストレートのキレイな髪をなびかせる

大人しい少女

霧島翔子である

「…霧島翔子、クラス代表……私だけではできない事もたくさんある、皆その時は協力してくれると助かる」

と一礼

自己紹介が終わり休憩時間

エヴァは、今夜のディナーを何にしようか考えているようだ

さて、俺は…ゲームだな！

N Sでポケンを……

そう言えばジム戦前でセーブしたんだっけ

と本来持ち込み禁止であるゲーム機を取り出しプレイしはじめる

「ルルーシュ・T・ランペルージ…ゲーム機は持ってきちゃいけ

ないモノ」

いつの間にかスツと俺の目の前に立つ、霧島さん

いやー凄いね…足音一つないなんて

「ゲームのBGMや効果音はOFFにしているし、ボタンのプッシュ音も立てないように押しているし、今は授業中ではない迷惑かけているならまだしも、特に問題はないと思うが……テストの成績が悪いわけでもないしな」

「…ルールはルール…守らなきゃダメ」

「そうか、なら君が隠し持っている、スタンガンもよろしくないのではないかな」

確かに護身用と言えば、霧島グループのご令嬢だし、仕方ないと言えば仕方ないし

今の世の中何が起るかわからないからな

でも、出力が護身用にしては大きいものだと思うのだが、違うかな？」

というか、スタンガンだけじゃなくて、他にも色々持ってるだろ……

一瞬表情が揺らいたが、少し考えたあと、霧島さんはこう言った

「…わかった、私が言える立場じゃないかも知れない  
先生に注意されたら、大人しくやめて」

「わかったよ」

大人しく引き下がったねえ

「ところで、霧島さん」

「…なに？」

「眠いんだけど、寝ていいかな？」

「…それは困る、この後授業ある」

「そうか…じゃあ保健室行って寝てるね  
先生には、体調が優れないので保健室に行きましたって伝えとい  
てね」

「……………」

注意したいのだが、エヴァの『ルルの眠りだけは邪魔するな』とい  
う言葉で迷っているのか

それとも何か別のことを考えているのか

黙ってこちらを見ている

「ルルーシュ君、代表をあまり困らせちゃダメだよ」

1人の少女が新たに近づいてきた

「工藤さんか、カワイイ子を見ると、ついからかいたくなっちゃうんだよね」

「あははっ、ボクもそれ少しわかるかも」

彼女は工藤愛子：保健体育の点数が高い

ボクっ娘である

「ぐはっ！！」

おいおい、なんだよ？

すぐそばで、男子生徒の声が聞こえた

いくつかのソファ―とテーブルを巻き込んで、吹っ飛ばされた形跡がある

エヴァちゃん、力加減し…したけどまだ強かったのね

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストレートをかわすこともできず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！！二度と私に話しかけるな、下衆が！」

エヴァちゃん…だから忠告しておいたのに

「こ、こんなもやしが俺の一万倍の強さだと？

ふざけるなよ！」

ああ、モブががんばるねえ

って俺に向かってくるのね

よくわからんが

シュパン！

と顎に軽くアッパーを入れる

一般人にどれだけの力を入れて良いものか…

コメディー補正がかかって、限界があるかなあ？

どうなんだろうか……

コメディー補正って強ければ強いほど

ボロボロになっても、次のコマではピンピンしてたりするよね

うーん、どのぐらい力を込めようか

よし、少しずつ出力をあげていけばいいか

ん？

気が付いたら、男の顔はボコボコ…口と鼻から血を流していた

考えながら、軽くあしらってるつもりが、それでもダメージになったのね……



「ひゃんで・・・きょんひゃ、ひゃひゅひ・・・！」

口元とか頬とかはれて、何言ってるかわからないとか・・・ギヤグ漫画で見た以来だなあ

「君から向かってきたから、正当防衛だよ？」

まあエヴァは先に手を出しちゃったかもしれないけどさ

それは許してあげてよ、俺が忠告したのに聞いてなかった自業自得としてさ」

男子生徒は、数十秒硬直すると、突然教室の外へと走っていった

「エヴァ、っていうか、あれ誰？」

「さあな、このクラスの奴ではないと思うぞ、自己紹介の時にいなかったようだしな」

「ありや、いなかったの。それなら忠告もなにもしないわな」

横転したテーブルやソファを元にもどしていく

まったく…いきなりめんどくさいこと…エヴァがカワイイのはわかるけどさ

エヴァの沸点コトによってはかなり低いんだから、やめてくれよな

……

その後、何事もなく一日目終了……

と聞いたかったのだが、FクラスがDクラスに宣戦布告

つまり試験召喚獣クラス間戦争を仕掛けたのである……！

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）…姓

ルル「いやー、やっと原作キャラ出始めたね」

K「といっても、翔子と愛子と高橋女史が少しずつだけどね」

ルル「優子はまだでなかったね」

K「次回辺りに」

ルル「モブキャラを出させた意味は？」

K「エヴァちゃんが、ルルを愛していることをわかっていただくために？」

ルル「はあ……俺がゲームをやりだしたのは？」

K「裏設定によるものですね、今回プロフィールのアップは今のところ予定しておりませんが、エヴァがゲーム好きだから、それに付られて、ルルもゲームにはまっているという設定でして……」

ルル「なるほどね」

K「ということで、今回もご覧いただきましてありがとうございます

又、お気に入り件数、PVアクセス、ユニークアクセス共に順調に伸びていること大変嬉しく思います

今後ともよろしく願います」

第1・5話／第1話のちょっとした裏側（前書き）

K「こんばんばんわ」

Eヴァ「ん？なんだ？この空間は？」

K「前書き枠と後書き枠の世界へようこそ」

Eヴァ「『ようこそ』なんてもてなすぐらいなら、お茶ぐらいだせ」

K「お茶こぼして、データ消失すると困るので無理です」

Eヴァ「……まあいい、それで何故私がこんなところに呼ばれたのだ？」

K「作者の気分です」

Eヴァ「ルル……誘拐されちゃった……助けて……」

K「いやいやいやいやいや！……そんなことしてません！とにかくカンペ通り本編にふってください……」

Eヴァ「ふんっ！仕方ない……本編どうぞ」

第1・5話〜第1話のちょっとした裏側〜

〜エヴァ Side〜

文月学園の転入初日、ルルと共に登校したのだが

テストを受けたとき対応した、一見人外と思える男が学校の入口に立っていた

その男は、腹立たしいことにルルと私のことを兄妹だと間違えた

見た目が違うだろう？見た目が！

バカか、この男は…

教師がこれほどなら、生徒も間違える奴もいるかもしれないな

ルルの後について職員室に行き、担任だという高橋女史に連れられ  
教室へ向かった

教室の設備の感想は……なんだこの無駄な設備投資は！

という一言に限るな

だがしかし、これほどの設備だからこそ、勉学に励みAクラスに入  
ろうとする奴もいるのだろう

自己紹介で、ルルとは結婚していることをしっかりと伝えたいし、問題は無いだろう

何故が無駄に二回目の自己紹介では、ルルに関する忠告をしたし

これで静かに暮らせそうだ

休憩時間、夜ご飯のメニューを考えていたら何人かの男子が、声をかけてきた

適当に会話しつつ、メニューに悩む



適当にあしらわれているのにわかったのか、少し会話して満足したのか

1人を除いて立ち去っていった

「っていうか、あんなのどこがいいわけ？

もやし男じゃんww

君みたいなの、か弱い子あんなのじゃ守れないでしょ？

あれとは別れてさ、他の人と付き合えば？俺とかさ？」

最後までしつこく残っていた男は、そう軽く言ったのだ

だがそれは、ルルへの侮辱だ…それに私が、か弱いだと？貴様のよ  
うな男より遥かに強いわ！！

咄嗟に拳を突き出した

もちろん、ルルから充分力の加減については聞いていたし抑えたの  
だが

抑え方が足りなかったらしい、反応もできず男に拳が当たり

軽くふつとんでしまった

まあいい、ここできつく言っておけば、バカなことと言わなくなるだろう

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストレートをかわすこともできず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！！二度と私に話しかけるな、下衆が！」

そう言い放つと、男は明らかにルルに敵意を向けた

そして、そのままルルに殴りかかっていく

案の定、男はボコボコにされた

ルルは軽くあしらっていたつもりだろうが…

結構ダメージになってるからな……… かわいそうに

数日ダメージが体内に蓄積されているだろう

でかいの一発で済めば、意外と表面上のダメージだけだったかもし  
れないのになあ

くエヴァ Side ENDく

第1・5話〜第1話のちょっとした裏側〜（後書き）

エヴァ「短かったな」

K「ええ、それに第1話のちょっとしたエヴァ視点だったので1・5話にしたんです」

エヴァ「まあいい、それで私はもう帰っていいのだな？」

K「最後にそのカンペを読んでいただいてから、帰ってくださいね」

エヴァ「えーと…ご覧頂いた方がありがとうございます。第2話は本日月曜日中にアップ致します！」

## 第2話「夜ご飯のメニューに悩む少女」(前書き)

K「1・5話のアップから以外に早く2話の区切りつけたわ」

ルル「いや、その前に挨拶しろよw」

K「あ、こんばんは」

ルル「こんばんは」

K「8割型2話にかけてた状態で1・5話あげたから、早く2話目あげたよ」

ルル「よかったねえ」

K「うん、いいところで区切りつけたからね」

ルル「では、本編どうぞ」

## 第2話　夜ご飯のメニューに悩む少女

新年度初日から、試召戦争の戦線布告が、FクラスからDクラスになされた

下位クラスからの戦線布告は、拒否できない決まりがあるらしい

学園側もこれを許可

他のクラスは自習となった

試験召喚戦争か……

Dクラスが今日落とされ

明日明後日でBクラスがFクラスの手によって落とされる

明後日には、Fクラスの余計な策のせいで、Cクラスとの試召戦争があるんだっただか？

「…ルルーシュ・T・ランペルージ、ちょっといい？」

霧島さんが話しかけてくるのだが…

フルネームを一々呼ばれている気がする…ファーストネームで呼ぶのは失礼だと思っていて、尚且つファミリネームで呼ぶとエヴァともかぶるから、フルネームなのだろうか…？

「フルネームじゃなくて、ルルーシュでいいよ」

「…そう、じゃあルルーシュ」

「はい、なんでしょうが、霧島さん？」

「…FクラスとDクラスの試召戦争について…私達Aクラスはどうしたらいい？」

へ…？どうしたら？って…？

んー、確か原作でもFクラスとの対談の時、対応してたのは木下優子だったな

戦略立てたり、駆け引きしたりとか苦手なのか？

「何故、俺にそんなことを聞くの？」

「…次席だから、相談しやすいかなって……」

なるほどね……

「…一応、優子とも相談したんだけど、男子の意見も聞きたい」

「優子？」

「私よ、ルルーシュ君」



木下優子：Fクラスにそっくりな弟を持つ、美少女である

成績はいわずもがな優秀

だが、B L趣味を持ち、家ではかなりズボラで、学校ではネコかぶりな少女

「木下さんか：まあどう考えても、Dクラスを攻めた以上、上まで狙ってくると思うよ」

「なんでそういいきれなのよ？それよりもまず、FクラスがDクラスに勝てるわけじゃないじゃない」

「単に設備向上のみを狙うなら、Eクラスでしょ  
今の召喚獣に適応される点数は振り分け試験のもの、順当に考えて、初日に二つ上のDクラスに仕掛けるなんて、点数差でどうがんばっても負ける

聞いた話によると、単教科高得点者で450～500点代：点差で考えるなら5人で囲めば充分倒せると思うし、そんな逸材Fクラスにそこまで転がってるとも思えない

操作性が高い人がいても、点数低ければ、こちらもうまく対処すれば問題なし

ほら、Dクラスに攻め入る手札が足りないでしょ…」

「そうね、普通に考えて成績もあがるようなこともない、初日からFクラスがDクラスに攻めるなんてありえないわね

何故Dクラスに攻めて、何故ルルーシュ君は上まで狙ってくるなんていいきれるの？

その説明で、FクラスがDクラスに勝てると思えないんだけど…」

「Dクラスに攻めた理由、単純明快だよ…圧倒的な点数を持つダークホースがいるか、Fクラスの代表は、それなりに頭がきれる策士か、Dクラスの代表が策士として底レベルすぎると判断できる為かそこら辺かな？俺は、去年からいるわけじゃないから、他の生徒の事は詳しくないけど、去年上位にいたのに今年は見ない子とかいかな？」

普通に考えて、一年の時次席クラスの成績を持つ姫路の存在がいないことぐらい、Aクラスの連中ならわかるだろ

「…姫路瑞希」

「ああ！そういえば、見てないわね…」

「心当たりがあるのかな？」

「ええ、学年次席もしくは三位程度の成績を持つ、姫路さんっていう子がいるのだけど、彼女なんていうのかしら、か弱いというか病弱というか、すぐ体調を崩してしまうらしいの」

「本当に、Fにいるかは別として、難なく倒してくるんじゃないか

な？それと何故Fクラスが上、つまりAクラスまで来るか…

調子に乗って、Aクラスまで倒せるんじゃないかと言う考えにいたる人間、いるんじゃないかな？Dクラスを倒した時点で、二つも上のクラスを倒せたという自信に繋がり、士気のアップにも繋がるそして、この文月学園のシステム上、単教科高得点者が何名かいる可能性はあるし、ダークホースの存在の可能性もある

それに観察処分者という者もいると聞く、そこへ策士がいるのであれば、Aまで来るよ…戦争は純粋な力（点数）だけじゃないからね」

「観察処分者という言葉がでたのがびっくりだけど、それは何故？」

Aクラスって、勉強できても全然頭はきれない連中なのかな…？

「観察処分者、フィードバック…つまり、召喚獣との感覚リンク率が高い仕様がっている

召喚獣がダメージを受ければ、本体つまり肉体がダメージを受ける

それなら、ダメージを受けないように、操作性をあげるしかないだろう？

教師の雑用もされていると聞く、練習は充分施されてるんじゃないかな？」

「「なるほど」「」「…なるほど」

気づいたら、久保君と工藤さんも一緒に話を聞いていたようだ

「それじゃあ、Dクラス戦終了後、Fクラスが攻めてくるというのかい？」

「いや、Fクラスじゃあどうがんばっても、Aクラスには勝てないよ……」

久保君…君はいきなり参加してきて、いきなり質問を飛ばすのかい？  
まあいいか……

「「「え？」「」「…？」」

「霧島さん」

「…なに？」

「君にとっての弱点や、それになりそうなこととかあるんじゃないかな？」

それをFクラスの代表が、親しい者が知っている…それなら落とせる可能性があるかと踏むんじゃないかな？」

「……。」

何かを考えているのか、霧島さんは無言である

助け舟を出すかのように、工藤さんが声をあげる

「でもでも、弱点を知っているからなんなの？」

「一騎打ちに持ち込んだらどうする？」

「それで、代表の弱点をつくっていうの？」

「そうだね」

「そんなの飲まなければいいじゃない？」

確かに、このままなら飲まなくてもいいんだが

「そのために飲ませるように布石を打つ…」

「『『布石？』『』』」

「例えばだ…戦争でもしFクラスに負けて、設備入れ替えとなった…だが『設備は入れ替えなくていい、そのかわりにちよつとしたお願いを聞いてくれないか？』そう言われたら、どうする？」

「お願いにもよるけど…たぶん受けるわね」

「それで『Aクラスに試召戦争の意思があると思わせてほしい』も

しくは、『合図を出したらAクラスに宣戦布告し、試召戦争を仕掛けて欲しい』そういわれたら？」

「負けても、設備はワンランクダウンになるのね…それなら受けるとこだけど、Fクラスに負けているのなら、3ヶ月は宣戦布告できないはずよ？」

「表向きには、和平交渉による終戦ならば、問題ないんじゃないかな？設備入れ替えはしないわけだし」

「それで？」

「例えば、Dクラスと…そうだなCクラスかBクラスかなその2クラスと、そう言った取引を行う…そして、Aクラスとの交渉対談にて、それをちらつかせ、一騎打ちに持ち込もうとする

それならどうする？Aクラス、決して文武両道のような人選が揃っているわけでもない、体力的問題もある…

他のクラスとの連戦後、Fクラスに攻め込まれたら？確実に勝てる保証は？」

「なるほどね…理解できたわ」

「…説明ありがとう、ルルーシュ」

まったく、長々と無駄な話を・・・いつその事適当に流しておけばよかったか？

数時間後、Fクラス対Dクラスの試召戦争は、Fクラスに姫路さんが居て、Fクラスが勝利したものの、和平交渉にて終戦という話しが流れ始めた

「…ルルーシュの言ったとおりになった」

ツ・・・!!

ホント、気配もなく、足音もなく急に出てくるのやめてほしいわ…

俺でもびっくりするわ

「そうだね」

「…それで、Aクラスはどうしたらいいと思う？」

「んー、エヴァはどうしたらいいと思う？」

隣の席に座るエヴァに話しかける

先ほどはまったく話につっこんでこなかったので、声をかけてみた

「そんなことはどうでもいいんだ

今夜のメニューが決まらないんだが、ルルはハンバーグとトンカツどっちがいい？」

どうでもいいのねww

まだ夜ご飯のメニューに悩んでたんかいっ！

「そうだなー、トンカツかなあートンカツ、キャベツ、味噌汁、ご飯！これでいいでしょー」

「ん…そうか、わかった」

「……」



ジーツと無言で俺とエヴァの方を見ながら会話を聞いている霧島さんである

「ああ、ごめんごめん

そうだね、別に何かしたいなら案はあるけど、別に何もしなくてもFクラスに負ける事はないよ？現状ではFクラスに出来る事は限界があるからね

それにFクラスに負けた後の、少なからず弱体化したクラスに攻め入られるとしても、大した問題はないよ…まあフォローできるときはするから、ドンと構えてればいいよ」

「…わかった」

その日は、その後何事もなく終える事ができた

しいて言うなら、エヴァの作ったトンカツが最高だったことぐらいだろうか

サクサクうまぁ～ですね

翌日

午前中は穏やかに過ごすことができたのだが

午後からFクラスがBクラスに試召戦争をしかけるといっ…

「ルル、また今日も自習なのか？」

「FクラスがBクラスに試召戦争しかけたんだって」

「そうなのか、夜ご飯のメニューだが…今日は、蕎麦とうどん迷っているんだが、どっちがいい？」

また夜ご飯のメニューかww

「そつだなあ…天ざる蕎麦が俺が一番好きだよ」

「そうか！じゃあそれにしようっ」

うちのエヴァ、朝から夜ご飯のメニューばかり考えているんだけど…何故？ww

一番時間に余裕あつて、凝ったものが作れるからか？

さて、Fクラス対Bクラス戦は翌日に持ち越しとなった

Bクラス代表の小物君じゃなかった、根元君は卑怯やイカサマは手段のひとつという小悪党の鏡！

何かやらかしているようだが…

干渉はやめておこうか

その日はエヴァが張り切って、蕎麦を打つところからはじめて、夜ご飯の食べる時間が遅くなった程度しか特筆するようなことはないな

そつだな・・・他にあげるとするならば

俺はキスの天ぷらが好きだ！

キスっていう白身のお魚ね

天ぷらにすると美味いんだなあ〜これが

ああ、こんな会話をエヴァとしたぞ

「それで、ルル…試召戦争だったか？どうするんだ？何かやるのか？」

「そうだねえ…Aクラス…Bクラス…Cクラス…Fクラス…どうしたもののかね」

「まあ私もあの設備から低くなるのは嫌だからな……」

「そうか……まあなるようになるさ」

「そつだな……」

朝日が昇れば、騒がしい二日間が始まるであろつ……

Cクラス戦…Fクラス戦…

## 第2話「夜ご飯のメニューに悩む少女」(後書き)

PVアクセス約3500 ユニークアクセス約750 お気に入り  
10件突破！

K「ありがとうございます！どんどん、お気に入り登録してやって  
ください！

評価や感想もお待ちしております」

ルル「ありがたいね」

K「ホントホント…欲を言うなら……ランキングに乗りたいた  
って思ったり」

ルル「ランキングね、一気に見てくれる人増えそうだもんね」

K「うんうん…ということで、どんどん見て、どんどん評価して、  
どんどん感想ください！お待ちしております!!」

末筆で申し訳在りませんが、ご覧いただきありがとうございます  
次回も早めにアップしたいと思います

第3話「TはT e aなんですよ、そう紅茶…」（前書き）

K「こんばんばん」

Eヴァ「こんばん・・・って何故また私がここに呼ばれた？」

K「今回出番ほぼないから」

Eヴァ「なんだと？」

K「にらまれても...ふえないの！今回はルル、優子、友香回なの！」

Eヴァ「そ、そうか...まあルルが活躍しているなら・・・いいか・・・」

K「ということで本編どうぞ」

第3話「TはT e aなんですよ、そう紅茶…」

Fクラス対Bクラスの試召戦争二日目

教室につくと真っ先に、霧島さんの元へ向かう

「おはよう」

「…おはよう」

霧島さん今日も綺麗だねえ

ってそんなことを思ってる時じゃないな…

「ちょっと木下さん借りて、Cクラスに行っても良いかな？」



「…どうして私に聞くの？」

「試召戦争の火種になる可能性があるから、一応ね」

「……………気をつけて」

いつもより長い沈黙の後霧島さんは承諾してくれた

「ルル、私もついていくか？」

「いや、まったり座ってていいよ」

「そうか」

エヴァは俺の言葉に頷き、自分の席に座る

俺はそのまま木下さんの元へ

「おはよう木下さん」

「おはよう、ルルーシュ君

どうしたの？わざわざ挨拶しに近づいてくるなんて？」

少し驚いた表情をしている

「ちょっと俺につきあってくれないかな？」

「え？エヴァンジェリンさんも教室にいるのよ！？何考えてるのよ？／／／」

いや、お前が何を考えてるんだww

「Fクラスとの試召戦争に関わることだよ」

「え？ああ、そう。わかったわ」

木下さんを連れて、Cクラスに向かう

確か朝だったよな、Fクラスの秀吉女装作戦は……

Cクラス前まで来たが、今のところ気配は近くにないな

コンコンと軽くドアをノックして扉を開ける

「すみません」

「はい？」

1人の女生徒が反応し、こちらを向く

「Aクラスのルルーシュ・T・ランペルージといいます。Cクラスの代表さんに話があって来たのですが……」

「代表は私よ？」

対応してくれた人が代表だそうだ

「Cクラス代表の小山よ、それでAクラスの人がなんの用？」

「ただのご挨拶です、Aクラスの次席になつたのですが、今年転入してきました…一応顔ぐらい知っておいた方がよいかと思ひまして、こちらのクラスメイトである木下優子さんに案内していただいたのです」

「ああ、そう。」

「Aクラスの木下優子よ、よろしく。」

「ええ、小山友香よ、よろしく。」

ふむ、とりあえず何事もなく挨拶ができたね

「いやあ、うちの代表はキレイですが、小山さんはカワイイですね…」

「そう？お世辞ならいらないわよ」

「ああ、普通に可愛いと思いますよ、嫌いな人には嫌いって言うち

やうタイプなんで、お世辞とか言えないですね…例えば、Bクラス代表のド3流策士の小物とか……」

「あら、そのド3流策士の小物が、一応私の彼なのだけれど？」

小山さんがそう言った瞬間横にいる木下さんの表情が、こわばる…

「そうでしたか…知らずとはいえ、彼女さんに彼氏さんを蔑む言い方をしてしまいましたね…すみません。まあ本人が居ても直接言ってしまうでしょうから、大して意味はなさない謝罪ですけど、自分も大切な人を悪く言う奴がいたら怒っているでしょうからね……喧嘩をしにきたわけじゃないので、怒っていらっしやるなら、どうかそれを収めて欲しいのですが…」

「ま、まあ、別にいいわよ……あなた次席っていったわよね？」

よかった…案外彼氏の事に関しては、カツと怒るような人じゃないのかな？

「ええ。たまたま、『間違えているだろうけど！』と思った問題達が当たってたようで…本来ならAクラス上位程度で収まるはずだったんですけどね。それに姫路さんが、実力通りAクラスに居れば、次席なんて場所に納まってませんよ…ふふっ」

「たまたまでも凄いわね…」

「そうだ、小山さん…演技って興味ありますか？」

「演技？ええ、そうね…んー自分がやるのは得意ではないわよ…見  
てるほうが好きね

映画でもドラマでも舞台でも」

「見るのは好きですか、どうですか？今度は非、彼氏さんに内緒  
で舞台か映画でも…」

「嫌よ…なんで初対面のあなたとそんな約束しなきゃいけないのよ  
…」

「あはははっ、ですよー…ああ、そういえば、木下さんの弟さん  
って演劇部で優秀だとか？」

「え？ええ、そうみたいよ。なんか声真似？ができるみたいだし」

「へえ…声真似でもすごい人は声帯模写といってカンペキに声を似  
せることができるらしいですね……」

「それは凄いわね…そんな弟君は、何クラスなの？」

「さあ…演劇バカだからFクラスだったと思うわよ？」

「そう……」

「弟君って木下さんにそっくりなんでしたっけ？」

「ええ、そうね…」

「それなら、女性用の制服着て声真似なんかしたら、喋っていても気づかないかな……木下さん、ホントにお姉さんの方ですか!？」

「え? 当たり前でしょ!？」

若干、木下さんの怒りのボルテージがあがったようだ

「そ、そんなこと言つて、出会つて間もない自分なら、からかえると思つて入れ替わっているんじゃない?？」

「違うわよ!」

「じゃあ…そうですね…小山さん、木下さんがホントに弟さんの女装姿でないか、確認してもらえませんか? からかわれるのとか嫌なんですよ……まさかホントにお姉さんのほうだったら自分が確認するわけにいきなりですし……」

「え? はあ…私はいいけど」

「ルルーシュ君、一体さつきからなんなのよ…まったく……まあいいわ

小山さんちよつと…」

木下さんは小山さんを隅へ連れて行き、制服の胸元を少し開いて、

胸があることを確認させたようだ

「ちゃんと女性だったわよ…まったく」

「私はちゃんとしたAクラスの木下優子よ…まったく」

女子2人から『まったく』と呆れ顔で見られてしまった

「あはははっ・・・いやーだって木下さんとは今日で会っの三回目ですし、弟君の方は会ったことないですし・・・そんなに似てるなら、見分けつけられないですよ……」

そうだ！合言葉決めましょうしたら、わかるでしょう？」

「はあ…そうね…もうなんでもいいわ」

「ねえ、木下さん、このルルーシュ君ってこんな自由な子なの？」

「え？んー結構自由かもしれないわね」

え？そう思われてたの？？



「じゃあ、そうですね、小山さんにも特別に自分のミドルネームのTがどういう言葉のTか教えますねそれを知っているのは、ほんの一握りの人間しかいませんから、合言葉になりますから」

「ええ、それでいいわよ」

「そうね…確かにTの意味が気になっていたけど…」

木下さんはミドルネームのTの意味を気になってくれていたようだ

「紅茶の英語表記のT e aのTですよ、飲み物の中で紅茶が好きです」

「え？そんな理由でそのミドルネームなのっ!？」

「というより、ミドルネームもフル表記しても、発音はティーのままなんだ…クスクスッ」

上が木下さん、下が小山さんのリアクションである

「はい、あ、結構長いしちゃいましたね、そろそろ失礼しましょう。木下さん」

「そうね。」

「では、小山さんまたお話ししょう」

「ええ。くだらない話しもあつたけど、たまにはいいわよ」

俺は、立ち去る前に、小山さんにこつそり声をかける

「もし、木下さんと思われる人が今日中にきたら、相手の話に乗ったふりをしてください。そして、Aクラスの自分のところへ報告にきてください。できれば構いません」

「お願いします。」

それだけ言い残して、その場をさる

俺と木下さんは、小山さんと接触することができたし

弟の話もした

そして、念のための確認するための合言葉も伝えた

もし最後の言葉どおりに動いてくれなくとも、女装した秀吉がきて確認をとれば、Aにはせめてこないだろう

Aクラスに戻り、霧島さんに、あとはFとCの出方次第とだけ伝え席に戻る

「ルル、大丈夫だったか？」

「転ぶ方向は二択、Cクラス代表が、Fクラスに怒りを覚えるか…  
Cクラス代表がこちらに敵意がない状態でここにくるか…まあこち

らに敵意を持ってきた場合は、ああ残念っていうだけだろう」

暫くすると、Cクラス代表の小山さんが数名をつれて、Aクラスに乗り込んできた

「Cクラス代表の小山よ！木下優子を今すぐ呼びなさい！！」

怒鳴ってるねえ……

Aクラス内が騒然となるなか、木下さんとそれに続くように霧島さんが向かう

「何かしら？」

「さつきはよくも散々な事を言ってくれたわね！…とりたいところだけど、ルルーシュ君も呼んでくれるかしら？」

ほう……乗せられているふりをして、ここまで来たか

「さつきぶりですね、小山さん」

「ええ、あなたが最後に残していった言葉の意味、それからやけに意図的に何かを伝えようとしていた会話から、あのクズクラスの奴が来ても気づくことができたわ

まあ、一応言われた通り、乗せられたふりはしたけど…？」

「え？なんなの？」

「一応確認なのだけどあなた、木下優子さんでいいのよね？」

「え？ええ。」

「そう、あなた紅茶は好き？」

小山さんの質問に朝のやり取りが一瞬あたまをよぎったのか、ほんの少し間が空いてから木下さんは答えた

「そうね、T e a はよく飲むわよ」

数秒小山さんと木下さんの目が会う

「本物ね…さつきFクラスのあなたの弟が、あなたのふりをしてCクラスに乗り込んできて、散々罵倒して行ってくれたわよ」

「なっ！そうだったの？愚弟がひどい事を言っでごめんなさい…」

「いいえ、別にいいのよ

ルルーシュ君の働きがなければ、Aクラスの木下さんに言われたと勘違いして、何も考えずにAクラスに試召戦争をしかけることになりそうだったから…」

「え？もしかして、今朝ルルーシュ君とCクラスに行ったのってまさか……？」

小山さんと木下さんの視線がこちらに移り、それと同時に周囲の視線も移る

すごく注目浴びてるんですけど…

「初めから小山さんがCクラス代表なのは知っていたし、わざわざ木下さんを連れて行って、脈絡もない自由な話したのは、これの為だよ…まあ小山さんがうまく俺の言ったとおりになってくれたからこそ、穏便に話しを進められるんだけどね」

「それで、この通り乗せられたフリして、ここまで来たけど、どうしたらいいのかしら？」

「霧島さん、試召戦争に関わるコトです  
代表としてあなたも挨拶してください」

「…Aクラス代表霧島翔子」

「あなたが…私はCクラス代表の小山友香よ」

ひとまず、対談の場を儲け席につく

「さて、先に俺の目的から話しましょうか…

簡単ですよ、Fクラス代表の思い通りに学年全体が引つ掻き回されるのが気に喰わないだけです。だからこちらに飛んでくる火種を、意図的に潰したかったにすぎません。

本来であれば、たぶん今頃Aクラス対Cクラスの試召戦争で互いのクラスが準備を行っている頃でしょうから」

「それで、Cクラスに何を求めるの？」

「単純明快、Fクラスの思惑に乗ったと見せかけて、Aクラスに戦線布告していただきます」

「「え？」」「…？」

話を聞いていたAクラス連中がザワつく

「そして、Aクラスの召喚獣の操作スキルをあげる為の練習台になつていただきたい」

「練習台？」

「ええ、そして、最終的にはCクラスの負けという形で終わっていただきます」



「ちょっと待ちなさいよ、それじゃあCクラスの設備が下がってしまっただけじゃない？」

「和平交渉で終わらせるんですよ、Cクラスの設備を下げたところでメリットはない」

だが、しかし、勝敗が決まりそうにないから和平交渉にしたんだろっ？と思われて、Aクラスに攻めるバカ連中が増えても困りますなので、一度最終的に小山さんには討ち取られていただき、和平交渉でその他リスクは失くすと……」

「口約束で、そんなこと受け入れられないわ」

「そうですね、では…仕方ない、帰っていただいても構いませんよ」

「な……どうゆうことよ!？」

「いえ、だから、何事もなく教室へおかえりいただいて結構ですあくまで今回Cクラスとの接触は、戦争回避か友好関係を築いた上での召喚獣の練習相手、どちらかになれば問題はないのですから…小山さん自身、冷静に考えれば、今の新学年始まったばかりでの試召戦争でAクラスに勝てる手段がないことぐらい、理解できてるはずです」

友好関係が築けなくても、無駄に宣戦布告するなんて愚の骨頂なまねしないでしょっから」

「確かにそうね……わかったわ、あなたを信じましょう  
実際事前に種をまいて置いてくれたおかげで、無駄に戦争を起こして設備を下げる結果に至ってないのだから」

「はい、ではそれでいきましょう。ただCクラスにメリットがないですね」

「いえ、事前に情報を与えてくれたおかげで、こちらが散々な目にあってないことでも充分だわ。それにFクラスの手のひらで踊らされるような真似には、なっていないわけだし」

Cクラスの皆にはつたえておくわ、それに私達としても召喚獣の操作性をあげるために実戦は必要だもの」

「そう、じゃあそれでいいかな？霧島さん？」

「…私は構わない」

「じゃあ交渉成立ね、ではCクラスはAクラスに試召戦争の宣戦布告をするわ」

交渉成立かに思えたとき、Aクラスの生徒から声があがる

「ちよつと待てよ、何故わざわざ試召戦争をする必要があるんだ？」

明らかに不満を意する、口調であつた

「あーそうだな、Aクラスの人の中には、こう思っている人もいるのではないか？『点数高いから大丈夫』『俺達はAクラスだぜ？』『どのクラスに攻められても点数高いから負けるわけがない』」

甘いよ、布石を積み、策があり、操作性が高ければ、点数が低く

ても

Aクラスは討ち取れる

いいか、テストの問題の正解は一択とは限らない……それと同じで、試召戦争も点数一択で勝ち取れるとは限らないんだよ  
頭がいいと自負するなら、そのぐらいわかってくれ  
その点数の自信だけでは、足元をすくわれるぞ」

そう俺は言い放ち、Aクラス連中を見渡す

「何かいいたいことがある奴はいなさそうだな……  
では、改めて、小山さん……」

「ええ、CクラスはAクラスに宣戦布告します」

「……わかった」

こうして、Aクラス対Cクラスの試召戦争の舞台が整ったのである

第3話「TはTeaなんですよ、そう紅茶…」（後書き）

K「はい、ということでしたでしょうか、第3話  
ご都合主義全開の交渉回となりました」

エヴァ「うー何故私を、交渉の席に呼ばないんだ!」

K「いや、エヴァって、交渉ごとで下手に出るようなキャラじゃないじゃん」

エヴァ「く……そのくらい設定を変えろ!変えるんだ!」

K「そのメタ発言はやバイと思うよ……w」

エヴァ「まあ仕方ない、もっと私の出番を増やせ!いいか、ルルと私の絡みをもっとだ!」

K「機会があればね…とまあエヴァの相手はこのへんで終わりにして…」

PVアクセス5600突破 ユニークアクセス1000突破 お気に入り件数13件 文章・ストーリー評価0件 感想等0件

ありがとうございます!

評価と感想がないのは痛いのですが…

まあ評価は始まったばかりでつけられないとか…わかるのですが

感想が一切こないのは何故なんだあああああ！?!?!?!

という疑問を抱いております

よかったら、感想等お待ちしております！

ご覧頂きありがとうございます

第3・5話とある少年は観察処分者（前書き）

K「こんばんわん」

ルル「こんば…って今回俺出てないのに呼んだの？」

K「はい…他に呼ぶ人いなかった」

ルル「ぼっちなんですね作者さんww」

K「ええ、ぼっちですとも!」

ルル「胸をはって言うことじゃないから!」

本編どうぞ

### 第3・5話とある少年は観察処分者

とある少年は、振り分け試験の時に

熱で倒れてしまった、姫路瑞希というピンク髪のきよきよきよ  
巨乳少女を、保健室に連れて行くために

途中退室してしまう

ここ文月学園は、いかなる理由があろうとも

試験での途中退室は、0点扱いになる

そう彼は0点になってしまったのである

勿論、熱を出して保健室に行った少女も同じく

少女は学年で次席クラスの高点数を叩きだせるほど頭がいい

だが、文月学園は、本番で出せない力は認められない

とても残念であるが、これもまた仕方がないこと

少年はそんなルールに激しく対抗した

だが、一生徒にそのルールを覆すことが出来る

策も、力も、閃きも

なかったのである



少年は、試験を受けようが受けまいが、最下位クラスへ入るのは必然だったであろう

ランダムで回答し、たまたま当たりが多ければ

最下位よりワンランク上のクラスに行けるであろう程度

彼が試験を放り出し、倒れた少女を、保健室に連れて行くこと

彼の性格的に必然で起きたコトである

新年度、少年は

見慣れた顔が並ぶ教室へと踏み込んだ

一部腐っていると思われる畳

ヒビが入った壁

一部が割れた窓ガラス

簡単に壊れてしまうような卓袱台

綿が消失したただの布同然になった座布団

最下位クラスとはとてもひどい環境であった

だが、文月学園でのルールでは仕方がないこと

その最下位クラス、つまりFクラス代表はゴリラではなく

長身でそこそこ体格も大きい

そして赤髪のツンツンヘアー

過去に神童と呼ばれ、中学時代は不良達の間で有名であつたらしい

坂本雄二

一年生の時からの知り合いだった

他には、カメラを片手に持つムツツリーニと呼ばれる

土屋康太

彼は保健体育の点数が、教師レベルであると評価されているが、他の教科は・・・

Fクラスにいるのだから、壊滅的だと判断するのは簡単である

ポニーテールが特徴で、スレンダーな美少女

島田美波

ドイツからの帰国子女で日本にきてまだ一年ほど…

そのため漢字の読み書きが苦手である

上記の理由から、問題文を読み取ることができず

試験での点数は伸びていない

計算するだけの問題がある、数学はBクラス程度の成績を収めている

一見クラスを見渡すと、もう1人美少女がいるように見えるが

生物学上しっかりと男性とされている

木下秀吉

Aクラスに木下優子という女生徒がいるが、彼女の双子の弟がこの秀吉である

演劇一筋の演劇バカで、勉強の方は壊滅的

そしてそんな中現れたのは、姫路瑞希

文月学園のルールに乗っ取り、本来Aクラスにいるであろう彼女は

Fクラス入りを果たしてしまった

さて、この少年…彼女の姿を見て思う

『姫路さんみたいな、体の弱い女の子が勉強するような環境じゃない』

その少年は、坂本雄二に相談する

「雄二、試召戦争をやってみない？」

相談を受けた坂本雄二は答える

「俺もそう思っていたところだ」

坂本雄二にうまく乗せられた、Fクラスの生徒達は

まずDクラスに宣戦布告し、勝利を収める

そして、次のターゲットはBクラスに

Bクラス代表、根元恭司

彼は目的のために手段を選ばない男であり

Fクラス戦でもそうであった

Fクラスとの交渉の席を設ける間に、Fクラスの教室を荒らした

Fクラスは、根元の策にひっかかり、教室荒らしを許してしまった

その後、CクラスがFクラスを狙っていると思われる情報により

根元の策にひっかかってしまう

翌日：Cクラスの使用を危険視した、坂本雄二はAクラスの木下優子にそっくりな、木下秀吉を使い

Cクラスの予先を、Aクラスに向ける打開策を打つ

既に、Aクラスの手が回った後とも知らずに

秀吉に優子の演技をさせ、Cクラスに乗り込ませる

「豚臭いわ！話しかけないでちょうだいっ」



あまりに酷い罵倒である

ただ一つ、Cクラス代表が発した意味不明な一言が、少しばかり気になった坂本雄二…

「木下優子！紅茶の美味しさも知らないような味覚馬鹿には、二度とそんなこと言わせないようにしてあげるわ！！」

ただ単に相手を怒らせたかったから言った言葉だろうか……

まあ気にするようなことでもないかと、坂本は作戦が成功したと捉え、対Bクラス戦へ思考を向ける

Bクラス戦二日目がついに始まった

Fクラスのそのとある少年は、姫路の動きがおかしいことに気づく

その視線の先には、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、ラブレターを手に持つ根元であった

そのラブレターに少年は、見覚えがあった

『姫路さんが書いてたものだ…』

たまたま書いているところに出くわしてしまっていたので、少年はそれが姫路が書いていたラブレターだと気が付いた

どうやら姫路さんを脅して、動きづらくしているようだ

少年は姫路さんに体調が優れないようだから、さがるように伝え

Fクラスの策士である、坂本雄二の下へ走る

「雄二、お願いがあるんだ  
根元君の制服がほしい」

それと姫路さんを前線から外して欲しい」

馬鹿発言を交えつつ、坂本に頼む

「姫路がやる予定だった仕事をやれ」

「どうやって？」

「自分で考えろ、お前にしか出来ないやり方もあるだろうっ？」

坂本の言葉に少年はひらめいた

少年は、吉井明久

肩書きがある

観察処分者

バカの代名詞である

観察処分者の召喚獣は、物に触れることができる

普通は出来ないのだが、教師の雑用などもやらされるためだ…

そして、召喚獣は普通の人間よりも力がある

吉井はそのバカとしか言いようがない頭で考えある事を思いつく

やるべき事は、根元の周りにいる近衛部隊をひきつけること

吉井は覚悟を決め、何故かBクラスの隣の空き教室で偽りの模擬戦を開始する

目標は、壁をブチ破り、Bクラスに突入し近衛部隊をひきつけること

召喚獣の拳が壁に突き刺さるたびに、吉井の拳に痛みが走る

観察処分者のデメリット…フィードバック

召喚獣が受けたダメージが、吉井本人にも伝わるといふモノ

手から血が流れようと止める事はしない

何よりも、根元が許せなかった

何よりも、根元だけには負けられない

その信念の元……壁を殴って殴って殴り続けた

坂本の合図と共に、渾身の一撃が壁に……

吉井の作戦は成功、壁をブチ破り、近衛部隊をこちらに引き寄せる

空いて居た窓から、土屋と担当の先生が舞い降り

根元を討ち取る

FクラスがBクラスに勝利した瞬間であった



### 第3・5話とある少年は観察処分者（後書き）

PVアクセス7900突破 ユニークアクセス1300突破 お気に入り登録17件 感想1件

大変ありがとうございます！

初の感想いただきました！！

更新頑張ってくださいと応援いただきました（\*、\*）

ゼロ様また是非、感想等いただければと思います

K「ということで、今回の3・5話なのですが、軽くFクラス側にも触れておこうと書いたのですが、後半眠い中書いていてかなり雑になっている可能性が・・・すみません」

ルル「」での発言が少なくてびっくりしたかも」

K「ええ、一応原作を知っていらっしゃる方が、頭の中でBクラス戦終了までの回想を頭に流した後に、第4話に入っていたかどうかと思ひましてね」

ル「なるほどね…ホント原作知らない人には優しくないよねww」

K「まあ、それは偉大なる原作を買っていただいて、お読みくださ  
いという宣伝効果を！」

ル「いや、絶対深く考えないで書いてただろ？ww」

K「あはははははは………」

「ご覧いただきありがとうございました！」

第4話（前編）〜一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

K「ばんばんばんばんこんばんばん  
」

ルル「やけにテンション高いな」

K「P V 9 4 0 0 突破！ユニーク1400突破！お気に入り登録2  
1件！だよ？

お気に入り件数もつと伸びてくれると嬉しいなあって思ったり

」

ルル「そうだね…それより今回の話しは？」

K「ああ、そうでした。ちょっとg d g d感が否めないのですが、  
温かい目でご覧ください！」

第4話（前編）〜一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

Fクラス対Bクラス戦二日目が行われた裏で、Fクラスの策略により

Aクラス対Cクラス戦が行われた

Fクラス代表の坂本雄二はそう思っていた

だが、ルルーシュの働きと、Cクラス代表小山がした選択により

一見Aクラス対Cクラス戦が行われているに見えるその戦場は、とても落ち着いた状態であった

FクラスやBクラスは自分達の争い事で、こちらを気にしている暇はない

そうこの俺ルルーシュ・T・ランペルージにとって必要だったのは、  
AクラスがCクラスと試召戦争を行ったという事実だけだ

中身に熱がなくても問題はない

1対1の戦いがいたるところで行われている

中には、1対3や

逆に3対1での戦闘を想定して、練習が行われている

一応試召戦争であることから、想像以上のダメージで0点になってしまう生徒も数名居たものの

AクラスとCクラスの空気間は至って良好そのもの

暫くの戦闘で、少しは操作性を覚られたのではないかと思う

開始から2、3時間がたったころ、Cクラス代表が近づいてくる

「そろそろいいかしら？」

「そうだね、木下さん小山さんの召喚獣を…」

「ええ、ではごめんなさい。小山さん」

木下さんの召喚獣の手により、小山さんは敗北

代表が討ち取られたことにより、Aクラスの勝利がきまった

その後、手筈どおりに和平交渉にて終戦となった

ちゃんと回復試験を受けつつ行ったので、最後に討ち取られた小山さん以外は、実質的な点数ダメージは低い

その日の放課後まで話は飛ぶ

俺はエヴァと共に、家路についていた

「ルル」

「どうした？エヴァ」

「召喚獣というのは凄いな…確かに私達をイメージして作られていた」

「そうだね」

召喚者の趣向や素顔を映し出すがよかったのか…エヴァは特にエヴァ！って感じがしたな

「腕輪の効果は確認してないがよかったのか？」

「俺は確認したよ？」

「え？なんだと？そんなこと聞いてないぞ？」

だって、言っていないもの…ww

「一部教科だけね」

「総合教科は？」

「試してないね…というより、当初の予定では4000点以上にするつもりなかったし  
いないよ」



「そうだな」

翌日

遅刻した

ちょっとだけね？ちょっとだけ

教室に着くと、何やら騒がしい

「FクラスはAクラスに代表者による一騎打ちを申し込む」

どうやらFクラスが対談をしに来ているようだ

俺とエヴァは無視して席につく

「ちょっと待ちなさい、私だけじゃ判断できないわ」

この声は木下さんが、霧島さんじゃなくて木下さんが対応してるのね

「ルルーシュ君！遅かったじゃない！！こっち来て」

登校してきた俺を発見した木下さんが、大声で名前を呼ぶ

ふむ…Fクラス交渉か

「はいはい、お呼びでしょうかお姫様」

とおふざけで、方膝を付いて、手を胸にあて木下さんに言ってみる

「お、お姫様…じゃない、Fクラスが試召戦争の交渉にきてるのよ」

「ほー、そして俺にどうしろと?」

「いや、こつゆつの得意そうじゃない?」

やれやれと言った表情を、全面的に俺は木下さんにぶつけて、対談の場へ足を踏み入れる

偉そうにFクラス代表の坂本雄二が座っているのが目に入る

その対面にある席に俺はドカツと座る

「それで、このAクラスじゃない見ない奴らがFクラスなの？」

「Fクラス代表坂本雄二だ」

あー野生風味溢れる感じだね

「ルルーシュ・T・ランペルージ…代表じゃないけど、一応Aクラス所属だよ

それで、何の用かな？」

「Fクラスは試召戦争の宣戦布告をAクラスにしたいのだが、勉強などで忙しいだろう？Fクラスのバカ連中のように体力ありあまるような人たちでもないだろうしなAクラスの連中は…

だから代表の一騎打ちを申し込みたい」

「一騎打ちね、条件次第で受けてもいいよ」

「ッ！」

いや、あんたが驚くなよ…自分で持ちかけたんじゃない

「ちょ、ちょっと！ルルーシュ君？一騎打ちなんてそんな…」

「そんなことを提案してくるぐらいだから、何か策があるのではないかとでも思っているのか木下さん」

「え、ええそうね…実際DクラスBクラスと倒してきたのは事実だし」

確かに、圧倒的な点差を埋められるほどの策を練れる男

何か対Aクラス用のコトを用意していてもおかしくない

「と一騎打ちでもいいのだけど、それじゃあ盛り上がらないじゃないか  
いか

ということ、試召戦争の結果は代表同士の勝負に委ねるとして  
その前哨戦ということで、数名代表をだして手合わせしないかい？  
昨日Cクラスの人たちと戦ったのだけど、操作のコツがイマイチ  
つかめなくてね…経験つめるならしたいのだよ」

「ん？その前哨戦とやらの勝敗は、クラス間の勝敗には関係ないって  
いうことか？」

「そうそう、クラス間の試召戦争の勝敗は、完全に代表同士の戦い  
一戦にのみ適応だな」

「まあ、全く関係がないのなら、俺は構わないが…」

「そうか、でもただ、前哨戦でなんにもなく戦うんじゃないな  
負けた方が勝った方の言う事をひとつ聞いてもらうっていうのを  
つけたら、代表戦前も盛り上がるんじゃないかな？」

「いいだろう、何人出せばいい？」

「そうだな…代表戦とは別に5人でどうだい？代表戦のカードは霧  
島さん対坂本君で」

「それでいい…対戦科目の決定権はもらっていいか？」

「前哨戦のうち三つはもらうよ？」

「ああ。」

「では確認だ、前哨戦…つまりクラス同士の勝敗に関係する戦いで  
はなく、互いの代表を応援するという意味での戦いを5戦した後、  
霧島さん対坂本君の代表戦を行う

そして、負けた方は勝った方のいう事を一つ聞く…もちろん出来  
る範囲でのことだけに限る

科目選択の決定権は、Aクラスに前哨戦3試合分、Fクラスに前  
哨戦2試合分と代表戦の1試合分

これでいいかな？」

「大丈夫だ」

Fクラスとの交渉が終わり、一時Fクラスは撤退

クラス全員を連れて、後ほど来るといふ

「……ルルーシュ、どうして私と雄二の代表戦のみ、クラス間の勝敗に左右するなんてしたの？」

「霧島さんと坂本君は、幼馴染だね？」

「……（コクッ）」

霧島さんは頷く

「そうだな、彼は君の弱点……もしくは確実に間違える問題を知っているのではないかな」

科目選択の決定権の代表戦の分を彼にあげたのは、あえてその策を行わせるため」

「…それだと、私が負けるんじゃない？」

「いや、君は勝つよ」

そんなんで負けるなら…君を信じた俺がバカであつたというだけだ  
俺達は君が勝つことを信じ、前哨戦で勝利というエールを君に送る  
ただそれだけの話し、君は全力で坂本雄二を倒せばいい」

「…わかった」

後半へ続く……



第4話（前編）～一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

K「ご覧頂きありがとうございます！」

ルル「なんか無駄に前哨戦なんてつけたのね」

K「そうそう、それで今だから言えるのだけど

バカテスの原作1巻と2巻友達に貸したままで、うる覚えって  
いうね…ww」

ルル「あうとおおおおおお！すぐに返してもらうのだ！」

K「いや、それがさ…一年以上返ってこないんだよ…借りパクされ  
たば……」

ルル「それは残念ですね……」

K「とまあここで次回予告！」

描写が省かれすぎて、存在する意味がわからなくなった前哨戦  
ルルとエヴァの召喚獣は一体どんなものに！？

次回、俺と俺の嫁と召喚獣<sup>エヴァ</sup>だと？（仮タイトル）

第4話（後編）～霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラ  
グ建設！??

本日22:00にアップ予定

第4話（後編）〜霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！？〜

K「はい、ということで始めての予約投稿？」

ルル「うまく投稿できるといいね」

K「では、ついに始まりますAクラス対Fクラス戦！」

本編どうぞ

第4話（後編）　霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！？

Fクラス対Aクラスの舞台が整えられた

「ではこれよりAクラス対Fクラスの試召戦争代表戦を行います  
まず前哨戦ということで、一騎打ちの5連戦を行います  
これはクラス間の勝敗には影響が出ません

では、まず一戦目、両クラス出場者は前に」

司会進行判定は、学年主任の高橋女史である

「Fクラスからは、木下秀吉をだす！」

坂本君の言葉により、秀吉が前に出てくる

「Aクラスからは、木下優子」

何故、俺が代表みたいな役割をしなければならないんだ！！

前哨戦 一回戦

木下優子 対 木下秀吉

「教科は好きなモノを選んでいいわよ、秀吉」

「日本史でいいかの？」

「ああ、その前に、秀吉ちょっといいかしら？」

木下さんは秀吉を腕を掴み廊下に引きずり出す

Cクラスへの罵倒の件の制裁を行っ たらしい

前哨戦 一回戦 日本史

WIN 木下優子 対 木下秀吉 南無阿弥陀仏

画面の表記がおかしいことになっているが、気にしてられない

「では、前哨戦二回戦、両クラス出場者前へ」

Fクラスからは島田美波が出るようだ

「エヴァ、行つて来い」

「私がいくのか!？」

「エヴァちゃんの活躍するカワイイ姿みたいんだけど?」

「む…ルルがそう言うなら… / / /」

エヴァちゃんがちょっと嫌々ながらも人前に出て行く

「教科はくれてやる!」

「そつ、なら数学を」

前哨戦 二回戦 数学

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

「では、初めてください！」

「「サモン！」」

島田美波を小さくし、何やら西洋の軍人のお偉いさんが着ているような正装に身を包み

サーベルを片手にもつ召喚獣が現れた

頭の上には202という数字が浮かんでいた

髪型は召喚者と同じくポニーテールにしっかりなっており

ぬいぐるみのようである



一方エヴァの召喚獣だが、召喚魔法陣の上に黒い霧というか煙りのようなものが、数秒現れた後……一向に姿が見えない

「え？どうゆうことよ？あなたの召喚獣出てないじゃない？」

島田さんは完全に油断をしていた

エヴァがニヤッと口元を緩めると

島田さんの召喚獣の影から、ぬつと腕が出てきた

その腕の先には、ビームサーベルのような武器

背後から島田さんの召喚獣は、首を狩られて戦死した

「え？な、何が起きたの！？」

「すまないな、召喚してすぐに腕輪の能力を発動させてもらった  
まあ想定外な能力に驚いたが、楽に狩らせてもらったよ」

「腕輪持ち!？」

前哨戦 二回戦

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

数学 530点 対 0点

島田さんの召喚獣が消えると、エヴァの召喚獣がやっと姿を現した

エヴァを小さくした姿ではあるのだが、召喚者事態が小さかったか  
らか

他の召喚獣よりも一回り小さい気がする

服装は、文月学園の制服と至って普通なのだが…片手にビームサーベルのように手から剣の形をした微発光物質が出ている

ネギまの原作がわかる方は、断罪の剣を想像していただければたやすいであろう

「腕輪の能力で、発動と同時にお前の召喚獣の影の中に潜伏させてもらったよ」

エヴァの数学の腕輪の能力、影の中に入れる…というのは能力で出来る一部にすぎない

正確には影操作能力である

エヴァは召喚と同時に腕輪を発動した、すると黒い霧のようなものが発生

影をどう操るか、エヴァ自信の中で決めて居なかったため、周囲の影がエヴァの召喚獣を包んだだけとなった

それを一目見て能力を判断したエヴァはすぐさま、影から影に移る

影転移を使用し島田さんの召喚獣の影に潜んだ

そして油断しているところを断罪の剣でしとめたのである

前哨戦 三回戦

Fクラスは吉井明久を投入

彼は観察処分者である

観察処分者の詳しい説明は、勝手ながら省かせてもらう

「Aクラスからは、久保利光！」

Fクラスの生徒は、去年の成績的に姫路さんがFクラスにいる今、学年次席は久保君だと思っている

そのためか、辺りが少々ザワつく

前哨戦 三回戦 総合教科

久保利光 対 吉井明久

3998点 768点

観察処分者の吉井明久は、数倍の点差などものともせずにはひっくり返すほどの

召喚獣の操作スキルが高い

がしかし、負けてしまうものは仕方がない

前哨戦 三回戦 総合教科

久保利光 対 吉井明久

2698点 0点

充分善戦をしたと思われるが、久保君の攻撃を懸命に回避するもの

の、度々被弾し  
吉井君のダメージが低い攻撃の連打では、点数をひっくり返すのに  
限界があり

泥仕合化した為、描写には触れないでおく

前哨戦 四回戦

「……俺が出る」

ムツツリーニと呼ばれる少年

本名土屋康太

保健体育の点数だけ異常に高い

「じゃあ、ボクが」

前哨戦 四回戦 保健体育

工藤愛子 対 土屋康太

445点

589点

工藤さんが腕輪の能力である、加速を発動し勝ったかに見えたが

土屋君も腕輪持ちで、工藤さんと同じ加速の能力であった

工藤さんの腕輪持ちであるという自信から、油断が生まれ

土屋君に一刀両断されてしまう



前哨戦 五回戦

「私が行きます」

そう言って出てきたのは、姫路瑞希

「ならば、俺が出よう」

前哨戦 五回戦

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

「仕方がない、特別に俺が決めるはずの教科選択を、君に選ばせてあげよう」

「いいんですか？」

「ああ。」

「では、総合教科をお願いします」

「それでは、はじめてください！」

「「サモン！」」

姫路さんを小さくした見た目の召喚獣が現れる

がっしりと鎧に包まれ、手にはランスだろうか？リーチが長めの武器が見える

そして召喚獣の左手には腕輪が

頭の上には4418の数字が浮かぶ

4418点か……

そして俺の召喚獣は、同じく自分を小さくした見た目で

服装は文月学園の制服である

武器は刀が2本腰に手に木刀一本である

「昨日Cクラス戦の時に回復試験を受けてね…」

前哨戦 五回戦 総合教科

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

5720点

4418点

「結構がんばっちゃったよ」

その言葉と同時に、俺は切り込む

姫路さんはそれをランスで受け止める

かなりランスが硬いと見受けられる

それに身を包む甲冑

装備の差が酷い気がするな

木刀を姫路さんに向けて投げる

その後を追う様に、姫路さんへ突撃する

刀の一本を掴む

姫路さんは投げられた木刀を、ランスで切り払うように防ぐ

## 居合い斬岩剣

居合いの要領で斬岩剣を姫路さんに浴びせる

俺の召喚獣は、何故か気と良く似た効果を生じることができるらしい

追撃するかのごとく、姫路さんへ斬空閃を連発する

斬空閃 気を斬撃に乗せて放つ技

斬空閃を出しすぎたせいで、爆煙が上がり

姫路さんを見失ってしまった

突然ランスを向けて煙りの中から飛び出してきた姫路さんの攻撃により、抜いていた刀が吹っ飛ばされてしまう

さて、無双のお時間だぜ？

姫路さんの周囲を飛び回りながら、居合い拳を放ち続ける

高い威力で吹っ飛ばされることもなく、倒れそうになるとも四方八方からの居合い拳によりそれは許されない

ランスを振り回すものの、居合い拳の方が射程距離は長い

とどめに居合い拳を喉へあて、姫路さんは吹っ飛ぶ

前哨戦 五回戦 総合教科

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希  
5673点 0点

前哨戦

WIN 木下優子 対 木下秀吉

WIN エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

WIN 久保利光 対 吉井明久

工藤愛子 対 土屋康太 WIN

WIN ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

前哨戦は4勝とAクラス圧倒的に勝った

Fクラスからは負のオーラが漂う

前哨戦とはいえ、4敗してしまったのだ

何か策があつたとしても、それが本当に通じるのかと心配になってしまうであろう

「では、前哨戦終了ということで、代表同士による、一騎打ちを始めたと思います」

「教科選択は事前の交渉どおり、俺がもらっぜ  
日本史小学生レベルの問題で上限100点満点の筆記試験を頼みたい」



坂本君の言葉により、問題が用意され代表2人は別室に

残された、生徒達には、どんな問題が出題されているか、モニターでみれるようになっていた

それをFクラス連中は注目しており、突然歓喜の声をあげた

大化の改新は何年に起きたかという問題か…

原作を見て居る方はわかると思う

それは、間違えた答えを小さい時に、坂本君が霧島さんに教えたことだ

それを霧島さんは大事にして、本当の答えがわかっていても間違え

を書く

そう坂本君は踏んでいた

「やった！これで俺達がシステムデスクだ！」

霧島翔子 100点 坂本雄二 53点

だが、現実はきびしかった…

霧島さんがノーマスというのにもちよつと、驚いたが

坂本君53点って……使われていない知識が数年たつても頭に残っているなんて、甘いよ……復習も何もしなかったのだらう

戻ってきた坂本君は、Fクラスのメンバーに縛りあげられて文句を言われていた

「……ルルーシュ」

「はい？」

またか……またその隠密性を駆使して、俺に話しかけて

俺を驚かせるなんて真似を……

「…信じてくれて、ありがとう」

「いえいえ、万が一坂本君が、復習をしていたら、危険な可能性があつたからね

霧島さんが大切な思い出に縛られないで居てくれたことに感謝するよ」

と俺は、微笑みながら頭を撫でる

この子普通にしていれば細かい仕草とかも、カワイイよなあ……………

ニコナデポ 発動中（ルル本人は無自覚です）

「さて、それでは、戦後交渉といきましようか」

何故かその言葉とともに、土屋君がカメラを構え始めたのだが……

「まずは、クラス間試召戦争の勝敗についてだが、Fクラスは三ヶ月間の試召戦争の禁止を条件に、設備のダウンはなしつまり今回は和平交渉により引き分けとすることを提案する」

「設備を下げなくていいのか？」

「いいよ別に、むしろ一段回あげてあげたいくらいだよ、俺個人としてはね」

女の子もいるんだし、あの環境は酷すぎる

さて、どうする受けるかい？」

「仕方ない…受けるしかないが、他のクラスから宣戦布告された場合はどうしたらいい？」

「それは既に西村先生を通じて、学園長に話は通してある」

「そうか、それなら受けるしかないな  
だが、そんなんでいいのか？むしろ普通に負けたときより、設備  
が下がらなくなったとなるだけで俺達にメリットしかないじゃない  
か」

「お前達のデメリットは、そうだな…三ヶ月後から更に三ヶ月、A  
クラスに宣戦布告することを禁ずる

これでどうだ？」

「それでかまわない」

やったね！これで半年間静かに過ごせそうだ！

「さて後は、一騎打ちに負けた者には勝った方という事を一つ聞いて  
もらうというのだが」

スツと久保君が前に出た

「僕からいいかな、吉井君」

あれ…久保君に対して吉井君をあてたのは失敗だったか！？

BL臭がすごいする！

「僕にできることなら言つてよ、久保君」

「今度の休み、買い物に付き合ってもらえるかい？」

「ん？そんなことでいいの？」

吉井君……アディオス……君が純潔でなくなることに、黙祷……

「さて、次は、木下さん……は弟だから勝手にやってくれ」

「ええ。」

「土屋君から工藤さんへのお願いは？」

「…………写体になってもらう」

「ムッツリー二君、ボクのナニを撮りたいのかな？」

工藤さんはそういつつ、挑発するようにスカートをススツとあげていく

土屋君が何かを想像して、鼻血を噴いたのは言うまでもない

まったく…FクラスだけじゃなくてAクラス連中も充分騒がしいよ……

「さて、次にエヴァ？」

「ん？ああ、私は頼むような事はないな…私の権利はルルにやる」

あら、そうなの……

「っていうことで、島田さんにも俺のいう事聞いてもらおうかね」



島田さんと姫路さんね……

「あ、姫路さんには、Fクラスの男子全員に、御菓子でいいから作  
つてきてあげること」

「そんなのでいいんですか？」

姫路さんと島田さんはキョトンとしている

姫路さんの料理の危険さを知る者は、恐怖に顔をゆがめ

そんなことを知らない男達は、嬉しさに舞い上がり騒がしくなる

「島田さんはそうだな……」

「何よ……？」

「君の事は詳しくないからなあ……とりあえず思いついたら言っから、  
連絡先教えてもらっていいかな？」

島田さんの件は保留そして最後…

「最後に霧島さんだね」

「…（コクッ）」

スツと坂本君の前に歩いていく

「…雄二、小学生の時からずっと好きだった」

「それか…もう諦めろ」

「…話しは最後まで聞いて」

もう聞きたくないというような態度をとる坂本君に、真剣な目で霧島さんが言った

「…今も好きそれは変わらない、だけど別に気になる人もいる」

「ッ……！」

想定外の発言に坂本君は目を見開く

「……雄二が好きな自分に縛られてたのかもしれない

……友達もいなかった私に、話しかけてくれた雄二の優しさに甘えていただけなのかも知れない

……雄二のことは気になる、それが幼馴染としての気持ちなのか、好きだからなのか、わからなくなった……

……それでもやっぱり雄二の事が好きなんだって思えたら、またそれを伝えるから

……今は昔みたいに、友人として仲良くしてほしい」

なんか、凄い原作と変わってるんだけど、何がおきた？

ここで、雄二の事が好き、付き合ってたって言うはずじゃ？

どうなってんだ……？

お前がニコナデボ発動したせいだボケエ！BY作者



第4話（後編）～霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！～

K「さてさて、なんか淒くやらかした気がする」

翔子「…？」

K「つてあれ！？なんでルルじゃなくて霧島さんに変化してらっしゃるの？」

翔子「…ルルーシュならエヴァンジェリンさんと帰った」

K「ありや・・・じゃあ自分も失礼して……」

翔子「…？」

作者逃走のためナレーションがお送りします

ご覧頂きありがとうございます

感想等いつでもお待ちしております

また評価やお気に入り登録してくださると作者が、シャチホコの真似をするように体をのけぞらせて喜びますので、是非ともお願いいたします

第5話、彼は一体何者なのか？B Y霧島翔子…霧島さんって鍛えれば暗殺業がで

K「おはようございます」

ルル「おはよう」

K「今回はなんと、（たぶん）1/5話分の（たぶん）大増量版！  
初の翔子視点から、Fクラス戦後の翔子の行動まで！」

ルル「ほうほう」

K「翔子の心情というか、葛藤というか、そういうものが、イマイ  
チ表現できてない気がします…温かい目でご覧ください」

本編どうぞ

第5話　彼は一体何者なのか？B.V.霧島翔子…霧島さんって鍛えれば暗殺業がで

　　翔子　Side

私は霧島翔子

今は文月学園2年Aクラス代表になった一学生

まだ小さい時の話し…私は、お父さんの仕事の関係で、とある小学校に転校した

人と接するのが得意ではない私

最初はクラスの子も話しかけてくれたけど、暫くすると私は一人ぼっちになった

それでも彼だけは、私とおしゃべりしてくれた

坂本雄二だけは

私は雄二を好きになった  
それはこの先も変わらない

その好きが、友人としての好きなのか、異性としての好きなのかは  
わからない

時は進み、文月学園2年生での初日

ルルーシュという男とその妻だというエヴァンジェリンさんが、転  
校してきた

ルルーシュという人は、人をからかうのが好きみたい

ルルーシュという人は、何を考えているかわからないけど、言動の  
裏には何か理由があるみたい

2学年開始早々、FクラスがDクラスに試召戦争を仕掛けた

Fクラスの代表は雄二…



悔れない…仲良くなれた優子に一応相談してみたけど

次席だというルルーシュにも相談してみた

彼はFクラスの使用をしっかりと視野に入れていた

『Fクラスだから何も考えずに挑んだだけでしょ？』なんていう発言も他の人からはあったけど、ルルーシュはちよつと違った

FクラスはそのままDクラス、Bクラスをたおしてしまった

そして、私達Aクラスに雄二達が乗り込んできた

優子が対応してくれてたけど

ルルーシュ君が来た途端、彼を交渉の席に呼んだ

ルルーシュの発言は意味のわからないことばかりだった

代表同士の一騎打ちを認める

だけど前哨戦をしたい

一体何が目的なんだろう？

交渉が終わったあと尋ねた

なんでクラスの勝敗を私と雄二の勝負にかけたのか

優子が言ってたように、雄二が何か策を練ってきている可能性が高い

彼は私の質問は気になけず、確認をとってきた

私と雄二が幼馴染か？と

私は頷く

彼は、雄二が練っている策を、あえて使わせると言った

意味がわからない、私が負けたらFクラスと設備は入れ替えになる  
頑張つてAクラスに入った人たちもいるのに、酷い環境で過ごす事  
になつてしまふかもしれない

彼はサラリとこう言った

「いや、君は勝つよ

そんなんで負けるなら…君を信じた俺がバカであつたというだけだ  
俺達は君が勝つことを信じ、前哨戦で勝利というエールを君に送る  
ただそれだけの話し、君は全力で坂本雄二を倒せばいい」

私を信じてくれる

雄二に何か策があつても、私が勝つと信じてくれる

雄二の策にも負けず、私が勝つと信じてくれる

うつん…信じてくれる云々というよりも、何かを見透かしているよ  
うな目が

勝てると断言してくれるような力強さを感じさせてくれた

何を考え、私にその言葉をいったのか

何を私に求めているのか

Fクラスとの試召戦争が始まる

Aクラスの皆は、全力で戦っている

彼、ルルーシュは観察処分者で雄二の友達の、吉井明久にも手を振  
かなかった

学年3位の久保君に相手をさせていた

そして、ルルーシュも、前哨戦最後

召喚された召喚獣の点数は私を遥かに上回っていた

それでも彼は、私と雄二との一騎打ちを認めてくれた

私を信じてくれた

Aクラスの皆が応援してくれている

雄二、私にとって大切な思い出なのは変わらない

だけど、皆が応援してくれている

私はそれに全力で向かわないといけない

ルルーシュが言った、雄二に策があっても私が勝つと

ルルーシュが言った、私が勝つと信じていると

ルルーシュが言った、信じている…だから全力で雄二を倒せばいいと

ルルーシュが言った、エールとして前哨戦で勝利を届けると

皆が送ってくれた、勝利を、応援の言葉を

雄二を侮れない…

私は全力で雄二を倒す

霧島翔子 対 坂本雄二

100点

53点

「ルル―シュ」

「はい？」

…？いつも話しかけると、ほんの少しだけビクツと体が動くルル―シュは、ポーカ―フェイスで対応してくれる

…面白い

でも今は何より…

「…信じてくれて、ありがとう」

そう伝えたかった

「いえいえ、万が一坂本君が、復習をしていたら、危険な可能性があったからね

霧島さんが大切な思い出に縛られないで居てくれたことに感謝するよ」

…ルルーシュは、どれだけのコトを知っているのだろうか？

雄二のことは何も話してない

大切な思い出、それも知っているわけがない

それなら何故、そんな言葉が？

突然ルルーシュに頭を撫でられた

頑張ったねーと動物を撫でる感覚なのかな？

微笑む顔は、温かく感じる

彼は一体何者なんだろう？

彼の言葉が何故、こんなにも心に響いてくるのだろうか？

ルルーシュが気になる？

気になる

じゃあルルーシュが好き？

違う、私は雄二が好き

本当にそれは異性としての愛？

うん

雄二に甘えているだけ？

甘えて…？



雄二が好きな恋する自分に縛られているだけ？

それは違う！私は縛られてなんかいない

それじゃあ何故雄二にこだわるの？

雄二は優しい…雄二は…

それじゃあルルーシュの事が気になるのは何故？

ルルーシュは、不思議な人…だから気になる

その気になるは恋愛感情に至らないと言い切れるの？

それは…だって、私は雄二が好きだから

雄二が好きっていう好きは、友人や幼馴染としての好きだからじゃないの？

違う

なんでそう言い切れるの？

……

私は雄二が好き

でもルルーシュが気になる

じゃあ雄二への好きは、本当に異性としての好きなの？

何故か、断言できない

今までなら雄二が好き、夫にしたいほど好きって断言できたのに

雄二……

ルルーシュのことをよく知れば、ルルーシュが気になるのが好きで気になるからなのか、不思議な感じがするから気になるのか、わかるかな？

＼翔子 Side END＼

Fクラス戦終了後：帰ろうとしていると、エヴァが霧島さんに呼び出されていた…

＼エヴァ Side＼

Aクラス対Fクラス戦の後

何故か霧島という女に呼び出されたのだが…

「それで、私になんのようだ？」

「…さつき雄二に話してた事聞いてた？」

ん？ああ、あのなんか他に気になるやつがいるだとか

本当にあのゴリラの事が好きだと思えたなら、それを伝えにいくねとか一方的に言いたいこと言ってたあれか

「それがどうした？」

「…私もどうしたらいいのかわからない」

は？何を言っているんだコイツは？

「…好きかどうかわからない、けどルルーシュが気になる」

それを私に言うのか…変な奴だな

「それで私にどうしろと？」

「…ルルーシュの事を知りたい

…雄二が好きなのか、ルルーシュが好きなのか…もっとよく知ればわかるかも知れない」

はあ…なるほどな

「それで、もしルルのことが好きだったらどうするんだ？  
私の夫だぞ？」

「…奪う」

こ…この女、サラツと私の前で凄いこと言ったぞ？

「はあ…まあいい、教えられる範囲で教えてやるが、ルルはお前1  
人が独占できるような、小さい人間じゃないぞ？」

「…？」

「表向きには言うなよ？ルルには何人かの嫁がいる  
私はたまたま、ルルに着いてきてこうやって一緒に学生なんかや  
つてはいるが

元の家に戻れば、数人の嫁の中の1人にすぎん  
独占は無理だ、それに嫁同士の仲も悪くないしな」

「…それでも、好きならそばに居たいと思う…少しでも多く私を見  
てもらおうそれだけ」

ほっ…まあそうか……

「それじゃあ、他言無用を条件に、教えられる事は教えてやる  
ルルに近づきたければ好きにしたらいい」

「…（コクッ）」

さてと、私は帰って夜ご飯を作らなくてはいけないのだ！

～エヴァ Side END～

エヴァと霧島さんが戻ってきたと思うと、エヴァは先に帰っていると  
いい残し教室を出て行った

先に帰ってるって…俺ももう帰るんですけど？

「ルルーシュ」

「はい？」

また、隠密性が…

この子一步間違えたら絶対暗殺業できる気がするよ

「…お嫁さん何人いるの？」

………なんやて！？

「ごめん、もう一回いいかな、聞き間違えたかもしれない」

「…お嫁さん何人いるの？」

聞き間違いじゃない！！

「どつゆう意味かな？」

「…エヴァンジェリンさんが何人もお嫁さん居るって言ってた」

エヴァからの情報だと!?

それじゃあ誤魔化せないじゃないか…

「何人でしょうねえ…まあそこそこ居ますよ…ええ…」

「…浮気じゃないの?」

「うーん…浮気は気の迷いだから違うかな?

何人もいる嫁は、全員それぞれを愛しているし、嫁は嫁同士で助け合っているし

なんだろう、それぞれの個性を尊重しているというか

うまくまとまっているつもりだよ?

俺としては、もし俺が好きになった子がいても、その形態を理解できる人じゃない限り新たに嫁をとる気はないし

うまく言えてないなあ………」

「…他のお嫁さんは、一緒にいないって聞いた

…放っておいていいの?」

「いや、よくない!むしろ俺も帰りたい!だけどねえ、色々あるのよ」

神による突然無茶ぶりの仕事とかとかとか



「…お嫁さん達は怒らないの？」

「いや、たぶん怒ってらっしゃると思うけど、ある程度怒りが覚めれば理解してくれるよ

事情の面でね…」

「…そう」

「さて、そろそろ帰るとするよ」

「…また、色々聞かせて」

「ん？うん、いいよ

じゃあね霧島さん」

「…（コクッ）」

第5話　彼は一体何者なのか？　B・V霧島翔子…霧島さんって鍛えれば暗殺業がで

K「ご覧いただきありがとうございます！

今回はいかがでしたでしょうか？」

ルル「うん、翔子ちゃんはきっと暗殺業が出来るね

あとは拷問を行う尋問官とかね」

K「まあルルの感想はいいでしょう

読者様からの感想の件です

前にゼロ様からいただいたことを後書きで書かせていただいたのですが、それから3件新たにいただきました

七夜和様から2件、霜柱三寸様から1件…まことにありがとうございます！」

ルル「ありがとうございます！」

K「『ルルの腕輪が楽しみ』『翔子が正式ヒロインになることを期待してます』というお言葉を頂戴いたしております」

ルル「俺の腕輪ですか…出る機会が近いうちにあればいいのですけどね」

K「ええ、そうですね

では、様々な感想等お待ちしております

また同時にアンケートということで、この作品の正式タイトルの候補を募集しております。よろしく願います

PVアクセス12600突破 ユニークアクセス1750突破  
お気に入り登録25件 ということで、こちらに關してもあり難  
く思っております！」

ルル「そして、最後に評価について！」

K「はい、お2人の方から評価をいただけたようです

文章評価 平均：4 pt 合計：8 pt

ストーリー評価 平均：5 pt 合計：5 pt

ということで、ストーリーの流れに關しては、高評価をいただ  
いているのかな？文章は…ドンマイ…みたいな感じなのでしょうが  
ね…

文字で背景やものの動きを表現し、読者の方に伝えると…まだ  
まだそれが甘いんでしょうね……経験を積んで少しずつ頑張ってい  
きたいと思います！

評価いただけたことだけでも、今はとにかく嬉しいです！ありが  
とうございます！」

今後よろしくお願いします（\*・・・）ゞ

第6話／暴走少女に二度目の遭遇（前書き）

PV16600突破 ユニーク21000突破 お気に入り登録32件

ありがとうございます！

K「ということで、やって参りました、美春回」

ルル「あの暴走少女が…」

K「逝って来いルル」

ルル「はいはい」

本編どうぞ

## 第6話　暴走少女に二度目の遭遇

Fクラス戦終了後、霧島と少しお話しした俺は、やっと家路につくことができた

家に着く少し手前の公園に、何故か体を大きく揺らしながら息切れを起こしている暴走少女が居た

そう清水美春である

これはスルーしかないな！

「ちょっと、その豚野郎、待ちなさい！」

見つかった…っていうかそっちから話しかけてきておいて、豚野郎  
呼ばわりか…

想像以上に凄いなこの子

「はい？」

「やっぱり、この間の豚野郎でしたか」

いや、だからその偉そうに豚野郎呼ばわりするのは、どうかと思うんだ？

「それで、何かようでも？」

「美春が話しかけてあげているのに、その態度はなんなのですか！ まったくこれだから豚野郎は……」

と呆れ顔を交えて、再度豚野郎と俺を罵る暴走少女

いや、『その態度はなんなのですか！』って俺が言いたいセリフなのだけど？

心の中で苦笑してしまった

「これはこれは、お嬢様失礼致しました。  
そんな豚野郎に何か御用でございましょうか？」

執事風対応のおふざけで返してみる

「ええ、豚野郎、まず名前を名乗りなさい」

先ほどより偉そうにそう言い放つ暴走少女…

やべー…余計調子にのりやがった!?

「ルルーシュ・T・ランペルージと申します」

「そう…その制服、豚野郎も文月学園の生徒なのですか」

「ええ、お嬢様も文月学園の生徒とお見受けられますが？」

暴走少女は、制服を着用していた

「2年Dクラス、清水美春ですわ

そんな豚野郎は、何年のどこのクラスです？」

「2年Aクラスですね」

「なっ…Aクラスにこんな豚野郎が!？」

ちょっと待て、その驚き方はおかしいだろ？  
男全員を豚野郎扱いしているなら、そりゃーいるに決まっているだろ…

「で、帰ってもよろしいですか？」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！この間のあの美春を追ってくる豚野郎を、もう一度倒しなさい！」

「また追われてるの？」

「ええ、そうですわ！あの豚野郎…帰宅そうそう美春に襲い掛かってきたから、逃げていた途中なの…」

パパさんもしつこいですね、娘が大事なのはわかるけど…高校生にもなって抱きつかれたら普通嫌だろ？

ファザコンでもない限り……

「俺、疲れたから帰る

いつもの事なんだろ？自分でどうにかしろ」

「美春が頼んでいるにも関わらず、この豚野郎は……」

プルプルと全身を震わせている



いや、ワナワナと…の方が正しいか？

表情がとても恐ろしいね

「人に頼みごとをするならそれなりの頼み方があるだろう？

俺と清水さんは友達でもなければ、ある程度顔をあわせた知り合いでもない

たまたま、遭遇して、また今回たまたま遭遇しただけの話し

緊急に助けが必要なら別だが、今は一旦逃げ切った後とかならう？」

「豚野郎は頭が固いですね…」

「まずその豚野郎を止めてくれ…そんな呼び方をされるような酷い事を清水さんにした覚えはないんだが？」

「豚…ぶ…豚…ランペ、ルージ……」

苦痛の表情を浮かべて、名前を呼んだ清水さん

って、名前呼ぶだけでそこまで嫌悪する！？

いや、この子重症だわ

「ルルーシュでいいよ」

「ル、ルル、ルルルルルーシュ…」

いや、ルはそんなに多くないよ？

「それで？」

「…美春を追ってくる豚野郎を、倒しなさい！」

「倒してくださいでしょ？」

「クッ……倒してください！」

いつの間にか清水さんの顔真っ赤だね…

「頼まれたから、軽く相手にしてもいいけど、その対象がいらないから今回は無理だね  
諦めなさい」

「や、約束が違つです！」

「約束はしてないのだけでも…」

「この豚野郎、やっぱり豚野郎ですわ！」

臨戦態勢に入る清水さん

ところで、どこにフォークやナイフを隠しもってるわけ？

暗器術ですかね？

まあとにかく、ここでの一手は逃げに限る！！

逃走をはかる俺に罵倒と凶器が飛んでくるが、後ろを振り返ることなく一気に家路を走り抜ける！！

これが、清水美春との二度目の遭遇であった

第6話　暴走少女に二度目の遭遇（後書き）

K「ご覧いただきありがとうございます」

ルル「よかった、暴走少女との絡みが短くて」

K「そのうち増えるさ」

ルル「怖いこと言わんといてっ!？」

K「はいはい、とまあこの辺でルルにもう一度美春を絡ませて起きたかったっていうだけなのですがね」

ルル「はあ……」

K「こんなくだらない後書きなんかいいんだよ…」

問題は今朝のユニークの伸び方が今までにないような状態だったことよ

ルル「どんな？」

K「90・80・50・30・30・20・40……みたいな感じ」

ルル「今までは？」

K「50・30・20……」

ルル「ああ、おかしいねwwバグなのか…まさかランキングに？」

K「いや、評価が少ないから、ランキングはないと思うけど…」

ル「なんでだろうね…」

K「ホントびっくりしてます！ありがたいの一言に限るんですけどね」

ル「まあ確かに」

K「皆様今後もよろしくお願いします！」

アンケート募集中

この作品の正式タイトルの候補を募集しております  
よろしければお願いいたします

第7話くクッキーは好物だけど、これはクッキーじゃない…兵器だー」（前書き）

K「さあ、アップラッシュ中ですよー」

ルル「いつまでつづきますかねえ、この勢い」

K「俺の頭に話し流れが浮かんでくるまで」

ルル「そうですか・・・」

K「さて、今回は…ちょっとしたお話しの間となっております」

ルル「ほほう…」

K「では本編ドウゾ！」

第7話くクッキーは好物だけど、これはクッキーじゃない…兵器だーく

うん、対Fクラス戦が終わってやっと静かに学園生活を送れると思  
っていたルルーシュだよ

げんじっ

は甘かった

「…ルルーシュ、好きな物は？」  
「…ルルーシュ、嫌いな物は？」  
「…ルルーシュ、休みの日はどう過ごしているの？」  
「…ルルーシュ、趣味を教えて欲しい」

霧島さんからの質問ラッシュに遭遇し

「見つけましたわ!」

「豚野郎!昨日は美春を放置して帰ってくれやがりましたね!」  
「待ちなさい!どこいくです!」

暴走少女!清水さんとの遭遇

よしっ 早退しよう!

と思ったのだが、エヴァが今日は家庭科の料理実習があると  
目を輝かせていたので、帰るに帰れなかった

「料理実習なんて最悪...」

とポツリとつぶやいていた木下さんに遭遇



「料理苦手なのか？」

「ッ！ルルーシュ君か…びつくりさせないでよ」

「それは、ごめんね…木下さん料理と歌はダメだからなあ」

「なっ！なんでそれを知ってるのよ！？」

「いや、だってそんな雰囲気か？」

慌てる木下さんをからかってみた

「どんな雰囲気よ！」

「そんな？」

「そんなってどんなよ？…ホント、他の人には余計なコトいわないよね？」

「はい、畏まりました。」

ではお嬢様、お次のカップリングはいかが致しましょう？  
明久受けのルル×明に致しますか？

ルル受けの久保×ルルに致しますか？」

「そうねえ…久保君に攻められるルルーシュ君かあ…結構いいわね  
………」

いや、木下さん？自爆してらっしゃいますよ？

「はっ！な、なんでそれを！？」

今リアクション取るんかい！

この子も結構バカな部分あると思うんだ、きつと……

「気にしないでいいんじゃないかな？

もっと自分らしくいきなよ、木下さんカワイイんだからさ」

「そ、そう…？／／」

「うんうん…「見つけましたわ！」ということでも失礼するね！」

清水さんに見つかってしまった

廊下でおいかけっこである

廊下を走るのは危ないから、良い子はまねしないでね

逃走劇の末、『天井にへばりつく』という技を覚えた

ちよつと指を天井にめりこませなきゃいけないけど……修理する業者さんホントすみませんね

なんとか、料理実習を行う教室まで逃げてこれた

何やら、パスタを作るらしい

ってちよつと待て、パスタを作るって料理じゃなくて麵の精製なの！？

というか精製機があるってどうゆうことよ？

料理じゃねえじゃん

結論、Fクラスだけではなく文月学園事態がちょっとおかしかった

作ったパスタは、おうちに持ち帰りそれぞれ美味しくいただきました

何事もなく、まったりとした学園生活を送っていた

そう、昼休みに入る前までは……

お昼休み開始のチャイムになる

すると、1人の少女がAクラスに訪ねてきた

「あの、ランペルージ君を呼んでいただけますか？」

その少女を対応した少女が、俺を呼ぶ

そこへ行くと立っていたのは姫路さんであった

「えっと、何かな？」

「あのこれ、先日の前哨戦で負けた時に、Fクラスの人たちに御菓子を作れと言われたので、作って持ってきたんですけど…」

皆、お腹いっぱいになって寝ちゃったみたいで、余っちゃったので食べてくれませんか？」

ほう…こうなるとはね。

いいかい姫路さん、それはお腹いっぱいになって寝たんじゃなくて

生死をさまよっているだけなのだよ？

寝ているというより、倒れたという表現の方が正しいと俺は思う

って言いたいけど、Aクラスの人達の目もある中で言うのはかわいそうだな

「そ、そう？じゃあ貰っておくよ」

「あ、ありがとうございます！」

袋を一つ俺の手に乗せて、さっっていく姫路さん

なんだろう、何故か悪魔に見えるよ……

手に乗った袋の中身は、俺の好物のクッキー

く、く、クッキーを愚弄するなんて！！あのデカ乳女ア！！

と怒鳴ってやりたいが、俺が蒔いた種だ

今回は許してやろう

「ルルの好物のクッキーかよかつたな」

姫路の料理の危険度を知らないエヴァは、笑顔でそう言う

「エヴァ、これはね…兵器なんだよ」

「兵器？」

「そう…コメディー補正が強い人間を除く、普通の人間が食べたら死んでしまうモノなんだよ」

「う、嘘だろう？」

エヴァ…そんな疑うなんて…ひどいよ……ホントなんだよ！このへいk……

くエヴァ Sideく

ルルが、変な巨乳女に御菓子を買っていた

中身を覗くとクッキーであった

「ルルの好物のクッキーかよかったな」

ここでは至って普通の会話だったのだが、ルルの表情がどうみてもおかしい

「エヴァ、これはね…兵器なんだよ」

何を言っているんだ？

「兵器？」



「そう…コメディ―補正が強い人間を除く、普通の人間が食べたら死んでしまうモノなんだよ」

表情は、本気だ…

だが、食べ物だろう？腐っている様子は見受けられないし

どんなにマズイといっても、クッキーなら焼き加減をミスったとか、塩の分量間違えたとか

その程度であろう？兵器なんて大げさな

「う、嘘だろう？」

ジーとルルと共にそのクッキーを見つめる

試しに一枚手に取り…ルルの口へ放り込む

た

た

倒れたあ！？

ルルがクッキー一枚で倒れるだ！？ホントに兵器だったのか・・・  
・？

「ルル？る、ルル？おい、起きろ！」

声をかけても返事がなく、小刻みに震えているだけである

かなりヤバイんじゃないのか？

数十秒後、激しく体が震えたと思ったらルルが目を覚ました

「一体何が、どうなって……」

「ルル、ごめん、私が間違っていた!」

「もしかして、クッキー口に放り込んだの?」

「う、うん……」

「まあ知らなかったんだから仕方がない! 次はこんなことしちゃダメだよ?」

そう言つて優しく頭を撫でてくれるルル

「ところで、ルル…何が入っているんだ?」

「化学薬品だね」

「は……?」

あの女、そんなものをルルに食べさせよう?

いや、その前に料理を愚弄しているな?

よし、次そんなモノをルルに食べさせようとしたら死刑だ! 死刑に処す!

そう心に決めたエヴァであった

くエヴァ Side ENDく

第7話くクッキーは好物だけど、これはクッキーじゃない…兵器だー」（後書き

K「ご覧いただきありがとうございます！」

ルル「胃が痛い…」

K「よくあることですね！」

では、例のコーナーいきましょう！

ルル「流されたのはむかつくけど…例のコーナーってなんだ？」

K「PVアクセス19800突破 ユニークアクセス2300突破

お気に入り登録41件！

ありがとうございます！というか、今日は昨日の倍ほどの方に見ていただいております…何がおきているんだろうと、ガクブルしております！」

ルル「ガクブルしております！ってテンション高く言うのはどうかと思うぞ」

K「それからですね、評価のほうもいただきました！」

現在、文章・ストーリーともに平均が5pt

合計値ですと、文章が23pt ストーリーが25pt

と、意外と好評価をいただいております」

ルル「いや、まあ文章はイマイチなんだろうよ、現実見るww」

K「ルル酷い！酷いよ！嬉しくて舞い上がって何が悪い！」

ルル「はいはい」

K「それで、この小説あげはじめてそろそろ一週間かな？総合評価で130ptもいただいております！やったね」

ルル「嬉しいのはわかったから落ち着け」

K「うれしくてさー寝る前ぐらいにあげようと思っていた第7話、いますぐアップしよう！となったわけですよ」

ルル「そうなのですか」

K「ハイテンションいえええええええい！！！！」

ルル「はぁ・・・（この作者ホント、危ないって…これでホントにシラフかよ？）」

K「シラフだよ！酒なんて飲んでないよ！」

ルル「感情文にツッコミいれてんじゃねえええええええ！」

また次回お楽しみに

アンケート募集中

この作品の正式タイトルの候補を募集しております  
感想などお待ちしております！

## 特別番外編／日刊ランキング58位記念／

K「やっぱいやっぱいやっぱい…やっぱやっっぱやっっぱ…ヤバ  
スばすやばすばすばすあああああ」

ルル「ちょ、落ち着け！」

K「落ち着いてられない…」

ルル「何があつたか説明してくれ、夜中にたたき起こされて機嫌は  
底辺なんだ」

なんと・・・

2011年12月23日午前0時すぎ頃に、ふと日刊ランキング（  
にじファン）をみたのです

！！

そしたらですよ？

58位（64pt）に乗ってたあああああああああ！！  
！！！！

追記：同日午前5時ごろ確認したら50位になってたああああ  
!!!!!!

ルル「だからテンション高いのね

っていうか、お前、「使って発言しろ…」

K「あ、ごめんごめん

びっくりしちゃってさ……」

ルル「これで、アクセス数とかお気に入り件数とか伸びてくれると嬉しいね」

K「おうよ！って伸びてくれたから、ランキングにのっているんだけども…」

ルル「ああ、そうか…」

K「一週間でここまでたくさんの方に、見てもらえて評価してもらえて、お気に入り登録してただけで

最高のクリスマスプレゼントだよ！

ぼっちの俺は誰からももらえないからね！」

ルル「最後に悲しい発言入れんなやww」



K「それで、話は変わりますが…特別編ということでは…」

ルル「ことで？」

K「ルルーシュ in Magister Negi Magi 編の  
一部をですね…」

ルル「え？恥ずかしいから止めない？」

K「ぶーぶー」

ルル「ブーイングされてもねえ…」

K「だって感想送ってくれた人の中にも、ネギまの世界にいる嫁は  
どうしているかとか、誰が嫁なのか気になるって発言もあつたんだ  
よ！」

ルル「ああ、そう…」

K「ということで嫁達のお話ではないのですが……よければご覧く  
ださい！」

特別番外版】

俺は…何度転生をしたのだろうか……

電波神のワシというジジイに、半ば無理やり…

『いや、ワシ、ワシっていう名前じゃないからの!?!』

ほら、また…

『本当にこの小童は人のいう事を聞かんのう…』

それで、次はどこなんだ?いつまでこの空間に縛りつける?

『わかっておるわい!次は魔法先生ネギま!という世界じゃ』

あーネギを栽培し、ネギ料理を駆使して生活しつつ  
その裏では魔法を使い女の子達を辱めるエロゲーだっけ？

『ち、違う！小童！お主そんなことを言っておったら、命狙われて  
しまっぞい！？』

あー確かに…ファンの方に叩かれ、捻られ、引きちぎられ、焼かれ  
て、食べられそうな気がする

『はあ…お主とお話しているとワシは身がもたん』

じゃあさっさと話し進めろよ

『能力は…前回一部引継ぎと、これでええの  
仕事内容は、修学旅行の時、近衛木乃香に魔法がバレるのを阻止  
することじゃ

あのタイミングは、ワシ的にあまり好まんのじゃ…じゃなかった、  
よくないのじゃ！』

思いつきり個人的感情が表に出すぎてるよ…

このクソ電波神のワシさんよぉゝ

そんなんだから、妻に愛想つかさr……

俺の意識はブラックアウトした

さて、ここは番外編…細かい話しはすっ飛ばそう！

現在の俺、紅き翼所属…ゼクトに魔法の師をしてもらっていたら、  
いつの間にかメンバー扱いされていた

現在の俺、紅き翼と共に、青山詠春の家に…　アリカさんの死刑で起きた事のあとですね

現在の俺、京都で数年のんびり…　木乃香がやけになつてきた

現在の俺、麻帆良を無断で散策…　エヴァと遭遇

「お、家発見！」

これは、もう突入するしかないよな～お腹すいたし…

コンコン

「誰だ？」

「突撃！ご飯を出してくれないと、餓死して死んでしまうので、早急にご飯をめぐんでください！という個人的企画であちこち家を回っております」

「帰れ！」

ドアを開けることなく、拒否ですか…

「ついでに泊まる場所もお願いしますね」

「ちょっと、待て、お前なんで勝手に家に入ってきている？」

「ああ、お邪魔します！お世話になります！」

すみませんね、勝手にお邪魔して  
礼儀が大切ですね…

「いや、勝手に話しを進めるな！というより出て行け！」

「まあ待て、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「私の事を知って、家に侵入してくるとは、いい度胸だな？」

「いい度胸だと？」

俺はエヴァを睨む

「…なんだ？」

「いや、聞き取れなかったんだ」

ズテツと派手にこけるエヴァ

いや、エヴァちゃんよし とのコメント参加できると思っつゝ、うん

「紅茶をください」

「嫌だ」

「クッキーをください」

「嫌だ」

「ご飯をください」

「嫌だ」

「血を飲みますか？」

「嫌だ…って待て、血を飲みますか？だと？ああ、飲ませてもらおう  
お前が干からびるまで飲んでやろう」

「じゃあ代わりに紅茶ちょうだい」

「くっ……一杯だけだぞ」

最近飲んでなかったのかな？血……

血と引き換えに紅茶をもらった！

「それでさ、いつまで血を飲んでいるつもり？」

「知らん！」

ちゅーちゅーと首筋に噛み付いたまま離れないエヴァである

「それより、何故これだけ吸っているのに、平気な顔をしているんだ！？」

あ、そう言えば？不死だからかなあ？

「不老不死だからじゃないかな？」

「ほづ…お前もか」

「エヴァちゃん、とりあえずご飯ちょうだい」

「ちゃん付けで呼ぶな！まったく…まあお腹いっぱい血を飲ませてもらったからな、まあいい…カップラーメンでいいな？」

それ、コンビニで普通に買えるじゃん



「手料理がいいかな？」

「は？私がそんなことできるわけないだろう？」

いや、できるわけないだろうって自信持って言われてもね

「えーエヴァの手料理じゃなきゃ意味ないじゃん」

「というより、お前親しそうにエヴァなんて人を呼ぶな！第一お前の名前すら知らないんだぞ？」

「ルルーシュ・T・ランペルージ」

俺は、この生より、この名前にした  
見た目があのルルーシュさんになっちゃったからね

「……ッ！お前があのだサウザンドマスターと一緒に戦っていた紅き翼の1人なのか！？」

「そうだね」

「こんな奴が…おい、お前、あのナギがかけた呪いを、変わりに解け！」

3年の約束だったのに、もう5年だぞ？  
ずっとこの麻帆良の地に縛りつけられている！」

「報酬は？だって、ナギとは確かに戦友ではあるけど、あいつがやったことの尻拭いなんてやだよ……」

「ほう…ならば、何を対価に求める？」

対価・・・対価・・・

うーん…

「じゃあ俺に魔法の師をしてくれよ」

「は？私は悪の魔法使いだぞ？英雄がそれに師を乞うというのか？」

「どうでもいいよ、そうゆうの…俺は、やるべきことがある、それ以外は俺のやりたいようにやる」

それが、あのジジイの都合に合わせて転生なんてさせられてる、俺への報酬だ

「そうか…まあいいだろう、教えられる事は教えてやる」

「そんなことより、ご飯…」

ドテツとまたこけたエヴァであつた

そうエヴァとの出会いは、散歩中に俺のお腹の機嫌で起きたことであった…

【END】

K「あい、いかがでしたでしょうか？」

ルル「エヴァとの出会い編って感じたよな？」

K「そうそう」

ルル「よかったと思うよ…うん」

K「また機会があればね、他のことも書けたらいいなって思ってます」

ルル「そうだね」

K「では、今後もこの小説をよろしく願います！

よければ、お気に入り登録していただいて

よければ、評価などしていただいて

よければ、感想等をしていただければと思います！

見ていただけるだけでも、充分嬉しいし、あり難い話なので  
すけどね

どうぞ、よろしくお願いいたします！」

ルル「では、また次回をお楽しみに！」

K「といたいところですが…」

ルル「どうした？」

K「この作品はあくまで、バカテスのお話ですから、記念回が、ネギまというのは…と思ひまして！バカテスの番外編です、どうぞ！」

【超特別番外編〜美春が大好きなんだよByルル〜シュ〜】

君と出会えたことに、本当は凄く感謝してる

本当は凄く嬉しかった、本当は凄く君を見ていた

美春・・・

初めての出会い、それは突然で君のことは無関心だったけど・・・

二度目の出会い、夕日でカラフルな遊具たちもオレンジに染まった公園に

君を見つけた

さっきまで走っていたのか、荒い息を深呼吸して抑える君

そんな君に見つかった俺は…照れ隠しで、冷たくしちゃうかもしれ  
ないけど…

でも実は君を優しく抱きしめたいんだよ

学校で、俺を追いかける君

君が俺を追いかけて、走る姿はとても活き活きとしている気がする

その姿が美しく見えるんだよ

君が向ける笑顔は、俺じゃなく

『お姉さま』だけど…

その笑顔は、俺に自然な笑みを浮かべさせてくれる

その笑顔が……君が笑顔でいることが、俺の幸せなんだよ？

そう

笑って

はしゃいでる

美春が…



「大好きなんだよ」

「ってこれはなんですか！？気持ち悪いです！やめなさい！  
いますぐ破棄しなさい！！そんな目で美春を見ていたですか？豚  
野郎！」

「おい、土屋…誰だこんな俺の声を合成した奴は？」

AクラスやFクラスの面々、それから何故かDクラスの清水美春が  
集結している

「……工藤」

そうか、愛子が犯人か

「ええ？ちよつとムツツリーニ君？ボクは声の素材を録音しただけで、合成したのはムツツリーニ君でしょ！？」

ん？共同作か？

「……わかった、認めよう俺が合成したが、台本を書いたのは、雄二だ」

よし、ゴリラコロス

「ちよ、ちよつと待て！俺はこんなに細かく書いてはいない！それに誰の声でやるとは聞いてなかったんだ！ただ面白そうだから、台本を書いただけで……」

まあいい、とりあえずコロス

「ボクだけじゃなくて、優子も録音協力してくれたよね？」

「ちょ、愛子！？それは言わない約束じゃ…」

「それにエヴァちゃんも」

エヴァもだと・・・終わった

俺に味方はいないのか

「ねえ、僕こんなことしてるなんて知らなかったのに、なんでここに呼ばれたの？」

「明久、それは全ての罪をお前にかぶせるつもりだったからだ」

坂本、ホントに吉井には鬼だな

「どうせ作るなら、お姉さまの声で作ってください！」

「嫌よ!?!」

「そんなこと言わずにいゝお姉さまあゝ」

相変わらずだな、この2人は

「ルル、とりあえず帰るか…これ以上ここに居たら余計なことに巻き込まれかねない」

「そうだな…」

俺とエヴァは、そそくさとその場から逃走し無事家路につくのであった

【END】

K「いかかでしたか？」

ルル「凄く嫌なはずらしくるねえ…」

K「俺、美春大好きなの」

ルル「あ、そう……まあ確かにカワイイよね」

K「さて、これにて本当に特別編終了です！

ご覧いただいた方ありがとうございました！

今後もよろしく願います（ノ、\*）  
「

特別番外編「日刊ランキング58位記念」(後書き)

PVアクセス：22652

ユニークアクセス：2590

お気に入り登録件数：46

文章評価 平均：5 pt 合計：23 pt

ストーリー評価 平均：5 pt 合計：25 pt

12月23日午前2：20時点でのデータです

大変多くの皆様に、ご愛読いただき  
お気に入り登録などしていただき…

ありがとうございます

今後も自分が書いた作品を、読んでいただけるよう頑張っていく  
と思います  
よろしく願いいたします

特別番外編、日刊ランキング50位&その他諸々感謝記念、（前書き）

K「にゃ ああああああああああああああ……！！！！！」

ルル「うっさい！！寝てるんだから静かにしろ！！」

K「無理です無理です」

ルル「今度は何があった？」

K「58位から50位にあがってた……」

ル  
ル  
「  
（  
。  
。  
）  
・  
＊  
・  
・  
・  
ブ  
ツ  
」

K「昨日一日だけでPVアクセス1万越えてた……」

ル  
ル  
「  
（  
。  
。  
）  
・  
＊  
・  
・  
・  
ブ  
ツ  
」

K「本日の0時台だけで、100のユニークアクセスだった。」

ル  
ル  
「  
（  
。  
。  
）  
・  
＊  
；  
、  
ブ  
ッ  
」

K「トータルのPVアクセス2万5千 ユニークアクセス3千 目  
前まできてるし…お気に入り件数も47件になってるし…感想いた  
だけたし…」

ルル「なんか、想定外の事だらけだね」

K「テンションあがりすぎて寝れない」

ルル「子供かつ！」

K「どうしようか…」

ルル「どうしようって…この皆さんに対する感謝をまたぶつけられ  
ばいいんじゃないの？」

K「ありがとうございます！！ありがとう！ホント！！なんか嬉し  
すぎて眠れんやろがい！！この野郎！」

ルル「いや……テンションあがりすぎて、うざキャラになるのやめ  
てくれ」

K「ゴメンヨ……」

ルル「それで今回はどうするんだい？」

K「そうですね…バカテスト番外編を」



ルル「おっ！」

「K」といって、ぶつづい「覽くさい」

特別番外編／日刊ランキング50位&その他諸々感謝記念／

「愛子……」

「なに？ルルーシュ君？」

ルルーシュと愛子は、学校の屋上で2人並んで座っていた

ルルーシュは方膝を立てて空を見上げている

愛子は、そんなルルーシュを見つめている

「俺さ…この学校に来て、ずっと思ってたことがあるんだ」

「なにになに？」

「愛子のことなんだけどさ…」

「ん？ボク？」

ルルーシュが愛子という名前とともに、愛子を見つめる

その表情は、どこか柔らかく温かいモノである

愛子そんなルルーシュに、少しばかりドキっとしつつ、平然を装い聞いた

「そう、愛子だ…」

「ボクの事で何か気になることでもあった？」

「俺の気分が落ちているときも、支えがほしい時も、凄く愛子には助けられた…」

それを今ひしひしと実感してさ…思い返すと、愛子の一言一言、愛子の笑顔…

愛子のことばかり浮かんでくる

そして、いつの間にか、愛子を気にかけている自分がいてさ

愛子の支えになりたい自分が居てさ

愛子をぎゅっと抱きしめたい自分が居るんだ」

「へ…？う、うん？ん？」

ルルーシュの想定外の言葉に、うまく対応できない愛子の頬は、少しばかり紅く染まっている

「愛子…お前の事が好きなんだ、お前を抱きしめたい、抱きしめていたい！

愛子とずっと笑って過ごしたい…もっと近い距離で…もっと愛子を感じていたい

俺と付き合ってくれないかな？」

普通のルルーシュとは思えない真剣な本気の告白……愛子は動揺しまくりに、言葉を失っていた

驚いた、それもあつただろうが、それよりも、嬉しさの方が勝っていた

愛子は惚れていた……ルルーシュが見せる様々な一面に、興味を抱き、気になり……

思えば、何かとルルーシュを考えていた

ルルーシュが見せる笑顔を、もっと私に向けて欲しい  
いつからかそう思うようになっていた

「ルルーシュ君……あ、あのね……ボクでよかったら、付き合ってほしい……」

ルルーシュは不思議に思う、こちらから付き合ってくれと言ったのに  
付き合っただけだと返されるなんて……

でも、そんな愛子が可愛く、いとおしく思えた

気づけばルル―シユは愛子を抱きしめていた

「愛子、大好きだ」

「ボクも、大好きだよ…／＼」

抱きしめあった、ただ抱きしめあった…夕日によって辺りが暖かい、オレンジ色に染まるまで…

「っていう、台本でどうかしら？」

優子がそう皆に趣旨を伝える  
ここはFクラスの一角である

「……映像合成は時間がかかるが、頑張る」

康太はやる気マンマンのようだ

「ちょっと待って！ルルーシュ君をからかう為だけに、こんな映像作品を作る気なの？」

愛子が半分呆れつつ聞く

「大丈夫だ、今度はヒロイン役として、工藤本人が協力してくれたら、もっと上手く行く」

雄二は、かなり真剣な表情で愛子に大丈夫だと言った

「…ルルーシュ役は？」

翔子が問う

「秀吉なんかいいんじゃないかな？声を別に用意するんじゃないで、秀吉に演技してもらえば」

明久が、珍しくまともなことを言った

「そうじゃの…それでワシの位置にルルーシュの映像を合成させれば、カンペキだと思うの」

秀吉は頭で何か想像しつつ、頷きながら納得した

「あー、機材とかはどうするんですか？」

瑞希がそう言うのと二人が反応した

「……俺に用意できるものは用意する」

「……必要な物があれば言って」

康太と翔子である

この2人がいるなら、そういった機材を用意できるであろう

「それじゃあ決定だ、今度こそアイツを、とことんからかう為のモノを作るんだ！」

木下姉、台本はまかせたぞ」

雄二はそう力強く宣言する

「おい、お前達、大声で会議してるのはいいがその本人が居ることにいい加減気づけ」

言葉が発信された方を一斉に皆が振り向く

呆れた表情のルルーシュが立っていた

「い、いや、これはだな…そん…すみませんでしたっ!!」

最初言い訳をしようとした雄二であったが

ルルーシュの表情が呆れ顔から、完全な満面の作り笑顔に変わって  
いたため、咄嗟に謝るという判断がくだされたのである

続けて全員謝ったが…

その日、ルルーシュの奇妙なまでの、作られた満面の笑みは消える  
ことがなかった



特別番外編／日刊ランキング50位&その他諸々感謝記念／（後書き）

K「いかがでしたでしょうか!？」

ルル「短編!」

K「感想がそれかい……」

ルル「っていうか、朝だよ?もう寝ようよ……」

K「そう言えば、徐々に眠くなってきた」

ルル「夜型人間なのね」

K「そうかもね」

ルル「では、この辺でいいかな?」

K「うん。ではでは、改めて……この作品を読んでくださっている方、評価してくださっている方、諸々の感謝の意を捧げます!ありがとうございます。」

第8話〜清涼祭編スタート！活躍するのはきっとそう！（笑）（前書き）

K「こんばんわん」

ルル「こんばんは」

K「さて、ランキングに入り、より多くの方に見ていただけております」

ルル「そうだね」

K「毎時30人以上のユニークアクセスだよ？」

ルル「すごいなあ」

K「びつくりだよねえ…ってあまり前書きを長くしちゃうと読んでもくれる人減りそうだから本編いきましよう」

では、清涼祭編スタートです！

本編どうぞ

第8話〜清涼祭編スタート！活躍するのはきっとそう！（笑）

Aクラス対Fクラスの試召戦争終了から、四季が流れた

そしてまた、新学年が始まる…

ちよつと、行きすぎ行きすぎ！  
巻き戻しお願いしまーす！

改めて、学園生活になれ初め、クラスメイト達とも徐々に仲良くなりつつある

互いが名前を呼び捨てにする程度には、一部のメンバーとは俺もエヴァも仲良くなっている

そんな時である、高橋女史が朝のホームルームで、爆弾を落としてくれた

「……………では、清涼祭の実行委員を決め、クラスでの出し物を決めてください」

清涼祭…の存在わすれつえつあああああああああ！！！！

よし、今すぐ入院しよう

祭り事は、参加することなく

遠くから傍観している

それが俺の祭りの楽しみ方だ！

準備もしたくない！参加もしたくない！

見てるだけがいい！

「…実行委員をやってくれる人居る？」

最初は翔子が仕切ってくれるようだ

俺は、抜け出そうとしたところを、翔子に見つかり捕獲された  
とても残念だ…

「誰もいないのか…じゃあ俺がやるよ」

モブが頑張ってくれるらしい

ああ、モブ扱いは可愛そうだな、彼の名前は吉都きつと 瀧そつ

凄く珍しい名前だなあ

吉都という苗字の方が実際居るかはしりません…BY作者

なんか不確定要素たつぷりのお名前だよな

きつとそう！

漢字表記だと結構カッコいいよね吉都瀧

彼はAクラスでも下から成績を見たほうが早い部類ではあるが

至って真面目で、飛びぬけた才能があるとするなら

飲食業の才だろう

彼がバイトしているレストランに、エヴァとたまたま寄ったことがあるのだが

ホスピタリティを持って仕事をこなしている彼は、とても素晴らしい

ホールが基本だが時にはキッチン業務もこなすそうだ

そんな吉都瀧君が清涼祭の実行委員をやってくれたことになった

「じゃあ、クラスでやる出し物は何がいいか、候補をいくつか挙げてくれ」

吉都君の言葉に、次々と候補が挙がる

メイド喫茶

執事喫茶

普通の喫茶店

って待て、何故喫茶店しかあがない？

確かに、食事をしたい人は食事ができるし

少し休憩したい人は、ティータイムを取れるし

手堅く稼げるような気もするんだが

「じゃあ、三つの中で、どれがいいか多数決を取ろう」



結果：普通の喫茶店、執事喫茶、0票  
メイド喫茶全票

それはそうだと思う

Aクラスって学年的にみて、カワイイ子多いし  
そうなりますよね

ということで、メイド喫茶に決まったAクラス

メイド服は霧島さん経由で、借りてこられるから問題はないそうだ

内装は、Aクラスの教室なら特に問題はないな

必然的に女子は基本的にホールとなる

男子はキッチンか…

「ちょっと待て！何故私までホールなんだ！キッチンに入るぞ！」

エヴァか・・・言うと思ったよ、人前でメイド服着て働くなら、料理のほうがいいわな…

「えー、エヴァちゃんカワイイんだからさ、ボクと一緒にホールでようよ」

「嫌だ」

愛子が声をかけるも、即否定

「エヴァ…うちのキッチンじゃないんだから、高さの問題もあるし

…あれだぞ？」

「う……」

「それに俺はエヴァのメイド服姿、みたいなーって」

「そ、それなら仕方がない…って騙されないぞルル！お前家でも私に色々着せているだろう？わざわざここで着る必要があるか！」

後一押ししてところで気づかれたか…

「ルルーシユの説得でもダメなのね…それじゃあ仕方ないわ、エヴァちゃんはキッチンに入ってもらいましょう。料理も得意みたいだし」

優子がそうエヴァに助け舟を出したことで、エヴァはホールに出ないで済んだ

これにより女子も数名キッチンに入ることになった

やはりどうしても着るのが嫌だという子は何人かいるものだな

「料理が全く出来ない男子は、どうしたらいいと思う？」

ちよつとまで、優子

何故、吉都君じゃなく俺に聞く？

「んーフォロースタッフでいいんじゃないか？」

「フォロースタッフ？」

「メイド喫茶だから、出来ればホールスタッフに男は居ないほうがいいけど…」

テーブルバッシング、セッティングぐらいなら構わないだろう…それとキッチンフォローとの行き来で、キッチンへの食材搬入とかも出てくるだろうから

それと、全統括責任者として男子を1人、ホール統括は女子に1人、キッチンの責任者も1人…入れ替えの時間ごとに居たほうがいいな」

「なるほどね」

吉都君が俺の話を聞いて、うんうんと頷いていた

「どうだろうか？バッシング&セッティングを男性スタッフがやっていたても、メインである女性スタッフの接客がその分多くなされていると思えば、そのぐらいなら大丈夫だと思うのだが？」

「そうね…ただ、メイドに対し並んでいておかしくない格好じゃな

い大変かもね」

「執事服とかってことか？」

「そうそう」

「…それもあるなら用意する」

翔子さんや…なんでも用意するって好き勝手言ってて、親に怒られないのか？

「まあ、そうね…あとはシフトの調整次第でっていうことね」

確かに

「吉都君、責任者関連はどうしようか？」

俺が吉都君に問う

「そうだね…2人ぐらいがいいよね？午前、午後分けるとかで」

「そうだな」

「それじゃあ、吉都君とルルーシュがやってくればいいじゃない？  
全統括責任者は」

「はあ… キッチンの方は、エヴァと利光でいいか？」

「僕は構わないよ」

「私も別にいいが…」

「ホールは翔子と優子でいいなそれと一応各代理責任者として、佐藤さんと愛子で」

これを元にシフトが組まれていく

当日になれば多少の誤差は生まれるだろうが

客足の問題とかもあるしな

メニュー内容やその他細かい部分も、着々と決まり準備が着々と進んでいく

誰が決めたか知らないが

メイド喫茶 ご主人様とお呼びっ！

に店名が決まっていた

ホント、これ名づけたの誰だよ？

第8話〜清涼祭編スタート！活躍するのはきっとそう！（笑）（後書き）

K「ご覧いただきありがとうございます！」

ルル「二つ質問いいか？」

K「なんでしょうか？」

ルル「いつもと比べて短い理由とちよつと荒々しい理由」

K「短いのは…長くなりすぎた話を、分割しちゃったせいです

荒々しいのは…ホントすみません…前にも話したとおり原作1、2巻を借りパクされた状態でして、記憶が曖昧で…」

ルル「なるほどね…」

K「許してクダサイ……ホントに……清涼祭編が荒い出来上がりになつてしまうのは、ご了承ください……」

ルル「さてと、そして報告することは？」

K「そうですね…先ほど見たらランキング57位だったかな？とりあえず維持できてるみたいです！それとお気に入り登録件数が65件に伸びているということですかね」

ルル「65人もこの作品に注目してるのは確かなんだね」

K「ええ、読み続けてもいいと思ってくれた方は是非、お気に入り登録してくださればいいなあって思います！よろしくです（。・w・



。)  
「」

#### アンケート募集中

この作品は現在仮タイトルですが、年内に正式タイトルを定めたい  
と思っております

そこで、正式タイトルの候補を募集しております  
よろしく願います！

その他感想等もお待ちしております

注意：茶番成分が少々含まれます

妹？「お兄様！これを今すぐ買うのです！！」

ルル「何を？」

妹？「『バカとテストと召喚獣につ』のDVDですわ！」

ルル「この間も買わなかったか？」

妹？「甘いですわ！一ヶ月に一本程度のペースで新作が販売なんて当たり前なのです！」

ルル「そんなにこれ、面白いのか？」

妹？「ええ、吉井明久という豚野郎が、お姉様をたぶらかそうとするシーンは許せませんけど、基本的に面白いのです！」

ルル「えっと、妹の美春の口から、豚野郎なんて単語が出てくるなんて、何かの聞き間違えだと思うけど…そんなに面白いのか！帰ったら俺にも見せてくれよ」

妹？（美春）「嫌です！見たかったら自分で買いなさい、一本でも多く売り上げに貢献するのです！」

ルル「はあ……？」

妹？（美春）「いいですか？とにかく、原作小説、コミック、D V D、グッズなんでもかんでも買うのです！買わないような豚野郎は、美春が直々に制裁を加えて差し上げますわ！！」

ルル「俺と俺の嫁エヴァと召喚獣だと？（仮タイトル）クリスマス特別版！俺と文字とゲストだと？」

始まります！」

ルル「はい、ということでクリスマスということですね…Kは『ぼっちな俺は拗ねて不貞寝してやる!』と言って消えたので、今回はルルーシュ・T・ランペルージが進行を務めさせていただきます。

ご覧いただいて居る方、いらっしやいませー

まず一人目のゲストは、最初の茶番に挑んでくれた、清水美春さんです」

美春「別に、この豚野郎に呼ばれたから、というわけでもなく…  
低クオリティの文章でしか作品をかけない豚野郎に呼ばれた、  
というわけでもなく…

今、画面の前にいる、全世界のお姉様達に、美春を愛しても  
らうために来ただけです。

茶番は……ムツリーニ商会から、お姉様の写真がもらえる  
からやっただけに過ぎませんわ」

ルル「ええ…何よりも、何故この企画の事をこの人に話したか、作者の気が知れませんか」

むしろ早く家に帰って、人外パパさんとクリスマスの街中を  
追いかけてくでもしててください、って感じですね。」

美春「そ、それはもう既に、済ませてありますわ…」

ルル「ああ、やったあとなのねww

ところで清水さん…こうしてこの作品が始まって一週間となりますが、何か思うことなどはありますか？」

美春「そうですね…言いたかった事がありますの」

ルル「ほう？」

美春「美春とお姉様の絡みが出てきた記憶がないのですが？」

ルル「えーっと…そうでしたかね？」

美春「ええ、もし仮にあつたとしても……足りませんわ！！1%もお姉様に対する愛を表現できていませんわね」

ルル「ああ、そうですねか…えっと他には？」

美春「美春の出番が思っていたよりも少ないですわ！原作キャラとして初登場だったのに…いっぱい出させてもらえと思っていたのですが……」

ルル「そういえば、確かに清水さんは、『第0・5話』の時点出てますよね…でも二度目の登場の際には、俺との単独回でしたし…かなり優遇されていると思うのですが。」

美春「そう言えばそうですね…」

ルル「ええ、こうして何の意図があつてか、作者に番外編でも真っ先に呼ばれていますし…今後登場回数増えるんじゃないかな？って俺は思いますよ？」

美春「そ、それなら美春としては嬉しいかもしれませんね…お姉様とイチヤイチヤできることもあるかもしれませんし……」

ルル「まあ、そうゆう事で、今後活躍できる可能性は充分ある！という事で、コーナーの方にいきましようか

まずは最初のコーナーは、皆様からいただいた、お手紙、ハガキ、メールのコーナーです」

『美春、ルルーシュ、こんばんは』

ルル「はい、こんばんわー」

美春「こんばんは」

『さむい日が続きますね』

ルル「そうですね、とても寒いです。女の子がスカート穿いているのを見て、こっちが余計に寒く感じてしまいます」

美春「ホント、寒いですわね…こんな時は、お姉様とベットのの中で暖めあえたら、とても温かいのですが…」

『ルルーシュがスベるという意味でのさむいです』

ルル「ちょっと待て、なんだその俺がスベるから寒いみたいな…その前に俺はスベる以前に普段からボケをかましているつもりもなければ、笑いを誘うように意図的な喋り方をしているつもりもないのだが……？」

美春「豚野郎の存在そのものがボケで、いつでもスベっていますわね…ということは年中辺りを凍えさせているということ…迷惑な男ですわね」

ルル「存在そのものがボケは言いすぎだ……結構まともなキャラだろうが!？」

美春「はいはい、さっさと続きを読みなさい豚野郎」

『ウチは今日、妹へのプレゼントを買いに行ってきました  
ちなみに買ったのは、抱き枕変わりにできそうな、ぬいぐるみで  
す』

ルル「ぬいぐるみですか、1人で寝るには寒いでもんね〜ぬいぐ  
るみがあつたら暖かそうだ」

美春「そうですね…あなたのような豚野郎が、ぬいぐるみを抱き  
しめながら寝ていたら気持ち悪いの一言に尽きますけど」

ルル「そ、そうかもね……」

『2人は、誰かにクリスマスプレゼントを買いましたか？』

ルル「俺はエヴァに、ゴスロリ系の洋服を何着か買いましたけど…  
清水さんは？」

美春「私は特に何も…お姉様には美春自信を、美春の全てをプレゼ  
ントとして捧げますわ！」

ルル「いや、言うと思ったけど……それは聞いてねえよww」

『PN・趣味は吉井明久を殴るコト』

ルル「…さんから頂きました」



美春「そ、それは、お姉様ですわよね？きつとそうですわ！」

ルル「うん、それしかないだろうな…それより次のコーナー行くよ

続いてのコーナーは……」

【超特別番外編〜ルルーシュと美春とデート！クリスマスVer〜】

12月24日：クリスマスイブ

カップル達が町中を埋め尽くし

ホテルは満室で埋め尽くされ

オシャレなバーやレストランは、予約でほぼ席が埋まる日

家では家族団欒

子供達がツリーに飾り付けをし、ケーキを食べて笑みをこぼす

そんな楽しそうな子供達の表情を見て、父は…母は…笑みをこぼす

家族が居る人は、家族っていいもんだなって再確認して、なんだか心が温かくなる日

友人と飲みに行つて、バカ騒ぎ

友人と遊びはしゃいで、バカ騒ぎ

友人と来年は彼氏、彼女作ろうかなんて言つて、互いに励ましあう日

人それぞれ、どんな日になっているかわからないが…

ここにデートを約束した、2人の少年少女が居た

少年は、待ち合わせ場所に向かって歩いていった

その少年は、ジーンズにブーツ、上にはYシャツとネクタイ、ジャケット…そして伊達メガネをかけていた  
どんなデザインのを身に着けているか…それぞれで想像していただきたい

彼には、似合っているのでは？と思われるが、どこかズレている…  
足の下から上まで真っ黒なのだ…

シャツまで黒とは……

に、似合っていると言えば…まあそうだろうが、クリスマスデートで横に居るのが全身真っ黒の男性って女性的にはどうなのだろうか？

彼は髪も黒だからな、本当に真っ黒である

せめてもの救いは、彼が整った顔立ちであることだろうか

少女は、待ち合わせ時間より、数十分早く来てしまっていた

長々と仕度に時間をかけたが、仕度をし始めたのが早かった…おかげで、余裕すぎるほど時間が余ってしまった

少女はショートパンツを穿き、上には至って普通のＴシャツにジーンズ生地ジャケット…結構薄着だと思われる

というか絶対寒い！

ニーソックスに、足元はフワフワとしたファーの付いたブーツ

そしてこれまた、伊達メガネ…

少女が待つコト２０分程度…少年が現れる

「ん？もう来てたのか？まだ１０分前だぞ？」

「ルル…来るのが遅いです！」

理不尽な怒りであることは確かだ、待ち合わせ時間より少し早く来るその程度なら常識の範囲内というものだろう

だから彼も１０分前ぐらいにつけるように来たのである  
まさか自分が到着する２０分前に来ているとは思わない

「え？そんな早く来てたの？ならもっと早く来たらよかったな…寒かっただろ？」

ルルと呼ばれた少年、つまりルルーシュ・Ｔ・ランペルージは、少女の怒りをなだめるように一声添えて、頭を撫でた

「そ、そんなことじゃあ、美春は許しませんわ…！」

勝手に待ち合わせ時刻の３０分前に来た少女、美春よ…それは理不尽である

ルルは待ち合わせ時刻の１０分前には着たのだから、非はないだろう

「そうか…ならとりあえず、どこか温かい場所へ行こうか、美春が風邪ひいたら…あ、困らないな」

ルルは寒い中自分を待っていてくれた美春に、温かい場所への移動を促がすも

何故か変なことを言う

「なつ、美春が風邪ひいて寝込んでもいいって言うですか!？」

もちろん、美春はその発言に、驚きと怒りをあらわにするもののルルは至って真面目な表情で言い返す

「だって、それなら看病するのに、学校なんか休んでずっとそばに居れるじゃん？」

美春はこのバカ発言に、呆れつつもあり、ルルなりの愛情表現に口元を緩めていた

「ほら、でも、さっさと行くよ…本当に風邪ひかれたら嫌だからね」

ルルがこう言ったのには理由がある…

何より熱で苦しむ彼女をわざわざ見たくはないのだ、どうせ看病でそばにいれるとするなら、俺が風邪をひく方がいいと…

そんなことはどうでもいい、ルルは冷えた美春の手を取り歩きはじめる

ルルの横をならんで歩く美春

その2人は寒さから非難するように、近場の喫茶店に入る

無論、美春のパパさんが経営している「ラ・ペデイス」なんていう喫茶店ではない

そんなところへ、ルルが美春の手を繋いで入店したら  
喫茶店のマスターから、人外な美春のパパさんに早変わりし、ルルへ襲い掛かってくることは間違いないだろう

2人は温かい紅茶を口にしつつ、くだらないことや、なんでもないようなコトを

長々と話し始める

2人とも学生…しかも同じ学校に通う、クラスは違うが試召戦争システムなどの影響で、他クラスとの交流も時折ある  
話しは必然、学校の事や友人の話などが多くなるのではないだろうか？

ある程度、見せの暖房と、温かい紅茶のお陰で温まると2人は別の

場所へ向かった

ルルがオススメだと言うレストラン

オシャレと言うわけでもなく、至って普通のレストラン

予約しちゃったんだよねえと、ルルが言うので美春もそれに応じて付いていく

入店すると、1人の少年のウェイターが対応してくれた

「いらっしやいませ…ってルルーシュ君か  
そう言えば予約にランペルージってあったね、君だったのか」

「ああ。今日はゆっくりさせてもらおうよ」

ルルは何か彼にアイコンタクトを送っている

それに美春は気づかない…

美春はそんなことよりも、目の前に立つウェイターの少年を見ていた



デートの最中に、その相手ではない別の異性を見るなんて、デート相手に失礼極まりないが…  
どこかで見たことあるような気がする…どこだったかな？と思考してしまっていた

そんなまじまじと彼を見る美春に気づいたルルは、ちょっとしたイタズラをする

耳元まで顔を近づけて、ささやくように言ったのである

「美春が俺以外の男を意識するなんてあるんだね」

「ふえっ！？え、いや、ち、違います！そんなこと絶対ありえませんわ！美春にはルルが居ればいいんですっ」

まじまじと見ていたコトを自覚している美春は、慌てながらも店内で自爆する

「あ……………う……………」

美春にとって男は、豚扱いである  
ただ1人、ルルを除いて…最初はルルも豚野郎などと罵られていたが、今では特別な存在になっているのである

「美春、冗談だよ」

彼は同じクラスの吉都君」

「吉都君ですか…珍しい名前ですわね」

彼のことをルルが紹介すると、純粹に思ったことを口に出してしま  
う美春

吉都はそれに対し、苦笑いをしながら答える

「あーそうだね、よく言われるよ…」

入口で長々と雑談なんかしていたら、吉都君が店長らしき人物に軽  
い注意を受けていたのは余談である

その後食事を済ませた2人であつたが

「ああ、ルルーシュ君に是非食べてもらいたいデザートがあつてね、  
そちらの彼女にも持ってくるから待っててよ」

と吉都君はキッチンの方へ入って行った

「ルルはここによく来るですか？」

「たまにかなー？」

「そうなんですか」

たいしたことない、普通の会話がいくつかされた後、吉都君がキツチンから出てきた

ケーキが乗った皿がひとつルルの前に置かれる

そして小さな細長い包みが美春の前に置かれる

「これはなんです？」

美春は不思議そうにキョロキョロしている

ルルの前にだけ、ケーキ  
美春の前には、包み

どう見てもおかしい

その包みを手に取ると、明らかにプレゼント用に包装されたものだとわかる

「ハッピーメリークリスマス…ルルーシュ君からあなたへのデザートのプレゼントです」

吉都君がそう伝えると、美春はきょとんとルルを見つめる

「びっくりした？」

笑顔でそんなことを問うルルが、美春の目の前にいた

ルルは数日前に予約するついでに、これを頼んでいたのである

普通ならこういうサプライズ的なことをするなら、誕生日のときと何かの記念日だろうけど…  
ちよっとズれているコトがあるのがルルの良さなのかな？と美春は  
ぱつと軽く噴く

「び、びっくりしたですよ…」

派手なサプライズは、個室でもない限り、注目をあびてしまうのが、  
恥ずかしいが

この程度の軽いものであれば、全く気にする事はない

楽しく店員も混ぜてお話している程度に、一定の離れた席の人からは見えるだろう

ルルは、支払いを済ませ、吉都君にお礼を言い店を後にする

数十分後、ある日たまたま遭遇した公園の、ベンチに座る二人の姿があった

「あ、ありがと…一応、受け取っておきますわ…／＼／」

始めてルルからもらったプレゼントであった

包みを開けることなく、両手に持っている

「ああ、あんまり遅くなると、美春のパパが探す為に町中を暴走し兼ねないから……そろそろ帰るか」

「その前に、美春が特別にぶ、プレゼントをあげますっ」

こうゆうことは慣れていないのか、何故か少し声を裏返しつつ言った

そして、持っていた鞆の中から一つの包みを取り出した

その包みはそこそ大きい四角い箱のようであった

「お、用意してたんだ」

ルルはちよつと以外だったのか、そんなことをいいつつその包みを受け取る

「空けていいよね？返事は聞いてない」

と行ってルルは丁寧に包装紙をはがし始める

そんな美春はただ、無駄に包装紙を綺麗に剥がしていくなーと思いつつ、その様子を見ていた

中から出てきたのは、四角い結構重みがある箱である

それをあけると出てきたのは、懐中時計というもの

「懐中時計？」

「あ、その…気に入らなかったですか？」

少々不安そうな表情を浮かべ、美春はルルに問う

「うっん、懐中時計ね欲しかったんだよね  
携帯で時間確認するのがめんどくさくてさ、時計欲しかったんだ  
けど

腕時計するのがなんか嫌でさ…だからちょうど懐中時計ほしいな

って思ってたよね

誰にも懐中時計がほしいなんて言っていないのによくわかったね？」

と笑顔でルルが言った

「ただ、その…持っても似合いそうだなって思ったただけですわ」

「そうか、スゴク嬉しいよっ

たぶん貰ってなかったら、次の空いてる日に自分で買いに行ってたと思うしね！」

ルルがそう笑顔で言いつつ、美春の頭を撫でる

美春は喜んでくれているルルに、自分も喜びを感じていた

「美春もあけていいですか？」

「うん、いいよ」

美春ももらった時から中身が気になっていた

ルルほど綺麗に包装紙を開けることが出来なかったが…まあルルが無駄なまでに変なところで、几帳面だったということだ



箱を開けると、ネックレスが入っていた

そのネックレスには、リングが三つ通してあった  
たぶん高校生、いや…並みの収入では買えないような価格がつくと思われる

細工と宝石が施されており、美春は純粹に驚いていた

「こ、こんなの…本当にもらっていいんです？」

「いいのいいの…ただのネックレスじゃないから」

ルルが言ったただのネックレスじゃないという言葉

どうゆう意味だろうか？

美春がその疑問をぶつけようとする前に、ルルが説明してくれた

「その三つのリングのうち一つは、エンゲージリング…つまり婚約指輪である

まあ今の美春には、今だ判断できるかわからないけども……一応もらっておいて」

こ、こ、こここ、こ、婚約指輪！？

美春、心の中で叫ぶ

「そして、あとの二つは、一応マリッジ…結婚指輪ね  
 と言っても、結婚指輪としても扱えるようペアリングってだけなの  
 だけ」

それに俺持つてると指輪とか、壊すか失くしそудし勝手に二つともそれに、つけてるだけだけどね」

けこ、け、けっ、結婚指輪……！？

美春、またも心の中で叫ぶ

当然嬉しい

だが、今まで何かあってもプレゼントなんてしてこなかったのにも関わらず……

いきなりこんなプレゼントなんて、驚きのほうが大きい

「は、う、け、っこん？み、美春にはそ、そんな早すぎますわ！？えっと、その…あう…？／／／／／」

普段決して見るこのできない、処理落ちする美春である

「まあ気楽に持つといてよ、俺からの気持ちっただけだからさ」

「は、はい…あの、ルル…」

「どうした？」

「ありがとうございます……」

すっごく嬉しいですっ、そしてルルを愛していますわ!」

満面の笑みで、今までにないくらい素直に、美春は気持ちを伝えたのであった

そして美春からルルを襲うようにキスをしたのであった

数年後

あの公園を、手を繋いで歩く二人がいた

美春のネックレスには、エンゲージリングだけが通され首に付けられており

結婚指輪は…もちろんそれぞれの指に……

【END】

ルル「超特別編いかがでしたでしょうか？」

美春「こ、こんなを書いた男に、日の光りを拝めないようにしてきますっ」

ルル「やめい！」

美春「…お姉様、美春は、汚されてしまいましたわ……」

ルル「はぁ・・・そうですねっ！」

ということで、一部ガツタガツタな部分がある荒々しいものでしたが、作者のコメントを代弁させていただきます

『ホント、特別編とかいいつつ、荒い内容で、美春が上手く安定せず…本当にすみません!!』

とのことですが…そりゃー急に当日書き始めたならそうなりますよねえ」

美春「年内に見直しを要求します!!」

ルル「はぁ…では、この辺で…俺と文字とゲストだと？終了です！ありがとうございます」

ゲストは清水美春さんでした〜また次回もお楽しみに」



本日は、非常に空気が冷えておりますね

こんな日はコタツでぬくぬくしてたいです

そういえば今のところ日刊ランキングの50位台を上がり下がりしております

評価してくださった方も居たようで、わざわざありがとうございます

またお気に入り登録も81件に増えておりまして…嬉しい限りです

それからPVアクセス4万 ユニークアクセス4100を突破いたしました

凄いですね…ランキングに乗ってから一気に増えました  
びっくりです……

評価のほうですが、ストーリー評価は合計30ptなので、評価していた6名の方全員が5ptをつけてくださったようですが  
文章評価は合計26ptと…見る人により、うまく伝わっていない部分があるということでしょうかね……

こうして、反省しつつも、評価してくださる方がいる

感想を送ってくださる方がいる

お気に入り登録してくれた方がいる

読んでくださっている方がいる

それだけで、こう…書いてよかったと思えます

ではこの辺りでしめさせていただきますね

はっぴーめりーくりすます 皆様の今日明日が、楽しい一時でありますように...



K「こんばんは」

ルル「いらつしゃいませ」

K「皆様、昨日クリスマススイブ、本日クリスマス、いかがお過ごしでしょうかね」

ルル「どうだろうねえ」

K「昨日はクリスマス特別版ということで、ルルと美春にラジオ＋ドラマみたいな感じでお届けしましたけど…美春のさ喋り方を長々と書いてると

とあるの白井黒子の口調になってる時があるんだよねー」

ルル「www」

K「ええと、まあそんな感じでガタガタな感じがあったと思いますが、いかがでしたでしょうか？特別番外編の内容に関する感想はいただいたことがないので、不安です…よかったら本編の感想や質問等と一緒に感想いただければと思います」

ルル「お気に入り登録、又、評価も随時お待ちしております」

K「ということで、本編どうぞ！」

第9話、清涼祭一日目：無駄にドラキュラに力を入れてるお化け屋敷

i n t

ついにはじまった清涼祭

翔子からの提供で、全統括責任者はスーツを身に着けている

俺と吉都君だな

吉都君の出番は今日は午前中…俺午後から

眠かった俺は、保健室に侵入し仮眠を取ることにした

くエヴァ Sideく

ルルがない…

一緒に見て回ろうかと思っていたのだが

まあ仕方ない

眠そうにしていたから、どこかで仮眠でもしているのだろう

仕方なく私は1人で回り始めた

おばけ屋敷か…まったく興味はないな

どうせ学生が作るモノだ、面白くもないだろう

スルーしようとしたが、ドラキュラ（吸血鬼）の格好をした奴が入  
口で客案内をしたために、何かの縁だ時間もあることだしな、と思  
い入ることにした

入ってみると、思った以上に雰囲気がある

ドライアイスでも使って、霧と寒気をかもしだしているのだろうか  
空気がひんやりとしていて、白い煙が足元をただよっている

先に進むと、仮装したお化けが飛び出してきたりとするが至って普  
通だ

メイクなども凝っているようだが、人が表現するには限界があるだ  
ろう

暫く歩くと荒れた西洋墓地というのだろうか、そんな場所へ出た

蝙蝠の作り物が羽ばたくように動き、それと共に羽を動かす音が流れてきた

暫く様子を見るが、これと言って何が起こる様子もない

「進むか…」

その墓道を抜けた途端、ぼんやりとした灯だったのがブレーカーが落ちたように真っ暗になった

そして、蝙蝠が羽ばたく音が四方八方から聞こえる

うつすらと青い光りが前から近づいてくる

その光りが近づくスピードは徐々に早くなる

そして目の前にヴァンパイア姿の仮装した男子生徒が、突然現れる

女生徒を1人抱きしめるように掴んでいる

その男は女生徒の首辺りにあった、自分の顔をこちらにむける

その男の口からは血が滴り、女生徒の顔は死んだと思わせる為か目を見開いた状態で一切動かない

男はニヤリと微笑み近づいてくる

「君の血がほしい…血が…ほしい！」

と女生徒をクッションがあったと思われる方へ突き飛ばし、こちらへ駆け出してくる

このお化け屋敷のヴァンパイアへの力の入り方は異常だろう

その男は私の目と鼻の先で止まる

男に太陽の光りを表現したのか、オレンジ系色の光りが当てられ、逃げるようにどこかへ消えていった

それと同時に、周囲が明るくなり、出口を指示した看板が見えた

なるほどな、怖くて逃げ出してくれたならそのまま出口へ行けるだろうし

逃げ出さなかったら、太陽が昇りヴァンパイアは逃げ去ったと思わせられるということか

想像以上に完成度が高かったよ

それが素直な私の感想であった

いくつかの店を見て周り、お茶もしたし早めの昼食も済ませたので、自分の教室に戻ることにした

くエヴァ Side ENDく

目を覚まし、時間を確認するとあと一時間ぐらい、俺のシフトまでに余裕があることを確認する

教室に戻って、ご飯でも食べるかな

「おかえりなさいませ、ご主人様」

2人のメイドのお出迎え



「って、ルルーシュ君か…」

「悪いね、佐藤さん」

「いえ、それより、戻ってくるの早かったですね」

「うん、他のところ行くのもめんどくさいし、ここで昼飯食べようかと思ってね」

「あ、そうですか…席空いてますけど、案内しましょうか？」

「いやいや、このあとすぐここで働くのにそれはないわ…裏でいいよ  
ついでに吉都君呼んで」

「はい」

佐藤さんに吉都君を呼ぶように頼み、キッチンへ回る

「ちょっと厨房借りるよ？」

「ルルーシュか、使うのはいいが、何をするんだ？」

「昼飯作る」

利光が、お客さんのオーダーを至って冷静に、さくさくと作り続けていた

「そうか、って料理できるのか？」

「たぶんね……ここ数年作ってないからわからないけど」

シンプルにチャーハンを作り始める

暫くすると、吉都君が顔を見せた

「どうした？」

「何か変わった事はあったかなーと」

「今のところ特にはないけど、ちよくちよくナンパしようとする人も多いね」

「だろうな」

働いている子カワイイからね

俺は出来上がったチャーハンを食べつつ吉都君との会話を進める

「っていうか、それが目に見えてたから、全統括責任者なんて言うて女の子を保護するために、男を置いたんでしょ？」

「いないとは限らないからな、限度越えて変なことしようとする奴  
こうゆう祭り事とかの気分が浮かれるような時は特に」

「特にこれと言って悪い評判もなさそうだし、いい感じだよ」

「そうか」

清涼祭の出だしは、至って平穩

クラスの出し物も順調な出だしのようだな・・・

K「ご覧いただきありがとうございます」

ルル「エヴァ回だね」

K「って言っても、お化け屋敷に1人で入りましたーってだけの話  
だけだねww」

ルル「まあ頑張つてよ」

K「え・・・ええ・・・そうそうお気に入り85件になって  
ました！ありがとうございます」

ユニークアクセスののびを見ると、どうやらランキングからは  
外れてしまったみたいですけど・・・また返り咲くことを願って！頑張  
つていきたいと思います」

### アンケート募集中

本作品の正式タイトル候補を募集しております  
よろしく願います

第10話 一日目：常夏？否、ハゲカン！Byルルーシュ…ボク襲われちゃった

K「こんばんわん」

ルル「はい、こんばんは」

K「予定が変更となり、色々と予定が詰まっちゃいまして、投稿遅くなりました」

すみません」

ルル「どんまい」

K「ストックが全然ないし、清涼祭編に苦戦しております」

ばっさばっさと原作スルーの可能性がありますが、以後もよろしく願います」

本編どうぞ

第10話 一日目：常夏？否、ハゲカン！Byルルーシュ…ボク襲われちゃった

俺がシフトに入り暫く立つと、変な2人組みが現れた

「2年Fクラスの料理は、ホント食べたもんじゃねーよ！」

真ん中付近で大声で他の店の、悪評を話しだす

ハゲとモヒカンである

最初は翔子が、軽い注意をしたのだが聞く耳持たず

暫くして出て行き、また少しすると戻ってきてそれを繰り返す

「ルルーシュ、あれどうしたらいい？」

翔子が横にきて、相談してきたが・・・

はぁ……ハゲカンめ……

ハゲカンとはハゲとモヒカンの略である

とりあえず、もう一度見逃すように指示  
さすがに次はないな…

ハゲカンが出て行って、少しするとFクラス連中が現れた

その後に続くように今度はハゲカン

めんどくさいことになりそうだ

俺はFクラス連中が座る席に、堂々と座る

「よう、ゴリラ」

「ゴリラじゃねえ！」

坂本に声をかける

「ランペルージ君だっけ？どうしたのそんな格好で？」

吉井がそんな質問をしてくるがスルー

「お兄ちゃんは、バカなお兄ちゃんのお友達なんですか？」

えーっと、美少女・・・島田葉月だったか？

「友達ではないが、島田さんの妹さんか？」

「はい！葉月ですっ」

「アンタよくすぐ気づいたわね？」

島田さんが首を軽くかしげて問う

「だって、結構似てると思うよ

2人とも姉妹そろってカワイイし…

とそんな話はどうでもいい…あのハゲカンはお前らの所で発生し



た、ゴキブリだろう？ちゃんと処理しておけよ」

「ハゲカン？ああ、常夏コンビか…あいつらなんでここに？」

「お前らのクラスの悪評を店内でぎゃーぎゃーとつるさいわけですよ」

「やっぱりあいつらか…」

「うちで処理してもいいけど？」

「何か考えがあるのか？」

俺の一言に坂本が食いつく

「ああ、ただしうちのフライヤーを、Fクラスのテーブルに設置してもらおうか」

「フライヤー？何それ？」

吉井の質問は受け付けない！

「バカ久、お前にはチラシって言った方がわかるか？」

「ああ、なるほど」

「まあFクラスに置いてても、こちらに客が流れてくるかわからない

けどな」

「それぐらいならいいぜ」

交渉成立…

「愛子」

「何かな？」

「あのハゲカンのところに言って、一言一言喋ったあと、悲鳴上げて倒れ

『や、やめてください！』とでもなんとも、言うておけ」

「う？うん？わかった」

トコトコと愛子がハゲカンの元へ行き、少しおしゃべりすると

悲鳴と共にその場に倒れた

すぐさま俺はその場へいく

「ど、どうした？何があった？」

と愛子を心配するふりをしながら、愛子のきるメイド服の胸元を、周りからみえないように破く

愛子が少々驚いた表情をしているが…

許せ

「こ、この人達が、急に体を触りだして、服を引き剥がして…辱めようとしたんです！！」

「ちょ、ちょっと待てよ！俺たちはなんにもしてない！！そいつが勝手に！」

「お客さん、困りますね…  
小さいお子様などもご利用になられているのですよ？」

それだけでなく、非道、鬼畜、外道の極みですね

これは警察に連絡せざる終えません

それに営業妨害ともとれる、大声で汚い言葉を発するなど…  
法廷に立っていただきましようか？

ええ、とりあえず、営業妨害、それと公然猥褻、強姦未遂ということ、大人しく捕まっていただきましようか」

「ふ、ふざけるなよ？俺達は何もしてないんだ！」

「ハゲとモヒカンっていうのもよろしくくないですねえ…」

「いや、髪形関係ねえだろ！」

ツッコミは隙を生む……

居合い拳

ハゲ、カンの二名に居合い拳をお見舞いする

面白いくらいに空中を回転し、床とキス

「ああ、お客様、そんな許して欲しいからといって、床を舐めるような真似は、逆に困ります！」

とオーバーなリアクションを俺はとりつつ、ハゲとカンを縄で拘束していく

「愛子、大丈夫ですか？」

「う、うん…」

「そう、怖かったでしょう？裏に行つて少し休んでください  
優子、彼女に着いていてあげてください」

「は、はあ…」

「吉都君は、学園長もしくわ、西村先生にこの事を伝えて、とりあえずこの2人を引き取ってもらつように言ってください」

「はい」

「全統括責任者、ルルーシュ・T・ランペルージと申します  
まったりと穏やかな、楽しいお客様の一時を、大変お騒がせ致し

ました

お詫びに、お客様全員にお好きなお飲みモノを、一杯サービスさせていただきます。

どうぞ、ごゆっくりとお寛ぎください！」

はぁ・・・長いセリフだった…噛まずに言い切った俺は、一礼して

レジを担当する女生徒と、キッチンに指示をし

愛子の元へ向かう

「さっきは悪かった」

「ううん、大丈夫だよ」

「そうか…優子、温かい紅茶でも入れてあげてくれ」

「はいはい、もうやってるわよ」

愛子が平気そうなのを確認し、Fクラスの元へ戻る

「とりあえずあれでいいだろ、普通に考えてあの二人は停学、もし

くは退学だ」

「…お前、案外酷い事平然とやってのけるな」

「ん？愛子のことか？」

「それもあるが…って工藤は大丈夫だったのか？」

坂本が心配することなんてあるのな

「ハゲカンに服を破かれたわけじゃないからな」

「え？それじゃあ誰がやったの？」

「俺だが？」

「ひどいです！」「酷いわね」

姫路さんと島田さんに、睨みつけられるような目で見られた

「ボクなら平気なんだけどなあ？」

「愛子ちゃん！」

愛子がいつの間にか新しいメイド服に着替えて、ホールに出てきていた

「確かに服は破かれたけど、ルルーシュ君は周りに一切中をみえない程度にしか破いてないし、ルルーシュ君自信もボクの目を見ながらだから見られてないし」

それに驚くのか……

「まあ咄嗟の判断だったからな……愛子を傷つけるわけにはいかないし、細心の注意を払ってあのハゲカンを潰したつもりなんだがまあ、あれだ、お詫びに一つ言う事聞くから、許せ」

「ホント、気にしてないからいいのに……それでも言う事聞いてくれるっていうなら、何か考えとくよ」

とそこへ、吉都君に連れられた西村先生現れる

ハゲカンとともに、俺と愛子は事情聴取の為、連行された……



第10話 一日目：常夏？否、ハゲカン！Byルルーシュ…ボク襲われちゃった

K「何故か、愛子をいじめたくなりました・・・」

ルル「俺、ヒドイ奴って評価されちゃうじゃん！」

K「まあドンマイ…えっと、寝不足で頭回ってないので・・・寝ます」

ルル「え？マジで！？今日雑すぎないか？」

K「一日12時間〜8時間寝ないとダメなんです・・・俺。」

ルル「お子ちゃまwww」

K「うつせーっ！おやすみ！..」

ルル「あ、消えてった・・・ということで、今回も含め清涼祭の荒さはホント簡便していただければと思います

K「が忙しいらしいので……では、ご覧いただきありがとうございます！..」

第11話、幼女カワイイ、うん。カワイイ…BYルルーシュ（前書き）

K「こんにちは」

ルル「こんにちは」

K「えっと、今回は少々短いですが、どうぞよろしくお願いします

…」

早速ですが本編どうぞ

第11話　幼女カワイイ、うん。カワイイ… Byルルシュ

「…こいつらは、しっかりと処分する

工藤、無理せず休ませてもらえ…それからルルシュ、ホントに手を出したわけじゃないんだな？」

「もちろん、手や足が普通に届くような距離にいたわけじゃないんですよ？」

踏み込んで居ないし、それよりも俺が腕や足を伸ばした姿を見てる人なんていないはずですし

あの2人が、慌てて逃げようとして、勝手に転んだだけですから」

「そうか…わかった、二人はもう戻っていいぞ」

嘘で塗り固められる供述

所詮世の中こんなものさ、冤罪が世の中にどれだけあると思う？

表立っていないだけで、多数存在しているだろうな

さて、話を戻そう

俺と愛子が教室に戻ると、先ほどまでよりお客の入りが増えていることに気づいた

「吉都君、どうした？」

「さっきの騒ぎでね、ルルーシュ君の対応を見て女の子達に好評だったらしくね、メイド喫茶なのに、男子目当てで、女性客が少し増えたんだよ」

はあ…そんなもんですかい

「それで、利光にもスーツ着させてホールに出してるのか」

まあ利光は顔立ちは整っているし、紳士な雰囲気が漂っているがな…  
…BL臭もまた事実……

「そうそう」

あれ？っていうか利光、朝からずっと働いているような？

「それで、何か女性向けにできることはないかなって思ったんだけど…」

確かに…メイド喫茶というだけあって、元から客層は男性がターゲット

「そうだね……んー・・・」

「ルルーシュ君の何か得意なこととかないの？」

得意なこと？得意なことねえ

「魔法」

「魔法…？マジック？手品が得意なのかい？」

やっぱりそう解釈しますよねえ

「それをやってみたらどうか？簡単なのでいいんだけど」

「気が向いたらね」

出番は案外早かった

家族で清涼祭に遊びにきてたらしい一つのテーブル

小学生か小学生になるかなーぐらいの女の子とお母さんとお父さん

何か気に入らなかったらしく女の子が泣き始めたのである

「……………」

無言で女の子のそばに立つと、そのお母さんが

「すみません、うるさくしちゃって…」

申し訳なさそうにしている

スッと手を女の子の前に差し出す

何事が気になったのか、女の子はぐずりながらもその手を見つめる

「何がほしいのですか、お姫様？」

俺の顔と手を交互に見る

「…ケーキやあ…しゅーくりーむ…」

ケーキじゃなくてシュークリームが食べたかったのね

「シュークリームですか…確か…この手のひらの上に…」

差し出した手ではなくもう片方の手に、小さなお皿があり二つのシュークリームが並ぶ

「はい、どうぞ。」

女の子は少しそのシュークリームを見つめると、笑顔になりシュークリームを食べ始める

よかった……昨日エヴァが作ってくれたシュークリームを保管して

おいて

保管先は、影の倉庫である

ひっぱりだせばなんでも出てくるに違いない

影の倉庫 影魔法を駆使した基本中の基本。影を倉庫変わりにし様々なものを保管しておける。また身に着けている衣服の袖と腕の間の影などからも出し入れが出来る。

「あの…」

女の子のお母さんが何やらこちらを見る

「ああ、大丈夫ですよ。こちらで扱っているモノではありませんが、うちのキッチンスタッフが作ったものです。娘さんが食べても安心安全なモノです

こちらからのサービスですので、お気になさらず。」

「あ、ありがとうございます。」



「ルルーシュ君、凄いね…いつの間にシュークリームなんて？」

「エヴァが昨日の夜作ってくれたモノだよ」

「いや、どうやって左手にお皿に乗せた状態のモノをもってたか知りたいんだけど？」

「秘密」

吉都君、甘いな、手品は自分でトリックを見抜くのが面白いんだよ？

って魔法だからトリックも何もないけどね

第11話 幼女カワイイ、うん。カワイイ… B Y ル ル シュ (後書き)

ルル「ご覧頂ありがとうございます！」

K「今回はキリがいいと思えるところが見当たらなくてですね…短くなってしまうましたが、次回は長めの予定です！」

ルル「あくまで予定なのね」

K「書ききれてないんだもん」

ルル「なるほど…」

K「それよりもさ、お気に入りが93件にまで増えてて、1話アップすること2人ぐらいはお気に入り登録してくれてるみたいで嬉しいよ」

ルル「ほう…それはあり難いね」

K「年末で急がしいのですが、頑張ります！」

第12話「真の裏社会とは、まあ通常であればこの世界にはいないけど、他世界

K「おはよう」

ルル「おはよう」

K「なんかしっくりこない出来なんだけど…」

ルル「それでもアップするのねw」

K「まあね…がんばるよ…」

本編どうぞ

第12話、真の裏社会とは、まあ通常であればこの世界にはいないけど、他世界

優子、翔子、エヴァ、愛子は休憩で4人でどこかに行ったようだ

どこほつつき歩いてるのかねえ…

暇だからって、主要メンバーを休憩に送り出さなくてもいいじゃん

暇だよぉ

そうだ！

「吉都殿」

「ど、どうしたんだい？ルルーシュ君…？」

「働きたくないでござる！さばるでござる…」

「いや、堂々と言われてもね…んーまあ、そこまで忙しくないし…  
いいよ休んでも」

吉都君は、優しいと思うよ！

「急げ明久！」

「わかってる！」

廊下を走り抜けるバカ2人の姿が目映る

っていうか、声でかいて：営業妨害だぞ？

「じゃあ、吉都君、後よろしくね」

「あいよー」

吉都君が休んでいって言ったでござる！  
休憩でござる！

長瀬楓風のしゃべりかた面白いな

長瀬楓 魔法先生ネギま！に出てくる1人の少女のことである

そう言えば、なんか吉井と坂本が物凄い形相で走ってたけど…

またバカなことしているのか？

いや、ま、待てよ・・・？

清涼祭…教頭…Fクラス…チンピラ…誘拐…

まさか！

俺は走った、かなり全力で…

廊下？否、壁すらも走る

学園から出て行く、吉井と坂本、土屋の姿が見えた

数分後、カラオケ屋に入っていく、吉井達が居た

間違いないな、教頭という子悪党が雇ったチンピラによる誘拐事件だ

俺も後に続けて入店する

『俺このちっちゃい子と、そっちの金髪幼女ね!』

『お前はホント、ロリ好きだな』

『じゃあ俺は、この巨乳ちゃんに相手をしてもらおうかなあ…』

吉井達は、一つの部屋の少し手前で塊になって、何か機会に耳を傾

けている

中の動きを盗聴しているのか…

『や、やめてください！』

『え、エヴァ、起きなさいよ！』

え？エヴァまで攫われてんの？

『ムリムリ、その子は薬で眠ってるから当分何しても起きないよ』

うわ…何この顔みなくてもキモ男ですってわかる声の気持ち悪さ……

『や、やめてください！…！』

もうアウトでしょ、ここで乗り込まずしていつ乗り込む…

『いただきます』



コンコン

「ランペルージ君？」

今頃気づくのか吉井…途中からその盗聴している声を聞いてたんだけどな？

ガチャ

「なんだ？俺達に差し入れか？」

誰が何を差し入れするんだよ？

バカか？

「死の差し入れに参りました」

居合い拳でドアを開けてくれた男を吹っ飛ばす

「な、なんだ！？」

「てめえ……」

「ルルーシュ!?」 「ルルーシュ君？」

やたーぼく、せいぎのみかたのようなとっじょうを、はたしたー

二つ名：正義の味方 をゲットしました ちゃんちゃーん！

「君たち、とりあえず人質返してもらおうよ？」

んとー姫路、島田、木下姉弟、翔子、愛子、エヴァ、チビっ子

これだけの人数攫われてて、学校が気づかないってまずいだろ

「ランペルージ君!?なんで、先に突入しちゃうのさ?」

吉井と坂本が入室してくる

「なんとなく?一番に入った方が、かつこよくないか?」

「そんな事は、どうでもいいんだよ！姫路さんや美波達のほうが大事だろう?。」

「まあ、明久、そんなことより先に、やることがある」

騒いでいる吉井を坂本がなだめている

「あいつらが、吉井と坂本っていう奴か」

「1人知らないやつもいるが、邪魔するなら、大人しくしてもらうしかねえよなあ?。」

「やー怖いです、母さん、このチンピラ達、頭悪そうで怖いです!!」

「俺達裏社会の人間にたてつくとうなるか、わかってもらわないとなあ?。」

チンピラ達の1人がそう言った

優子 Side

代表達と、休憩に入り、Fクラスのお店にお邪魔してたら

誘拐された・・・ってなんでこんなめに…

しかもなんか、絶対エロい事する気まんまんだし…

ありえない…ホント…

エヴァちゃんは寝たままだし

そんな時、ルルーシュとそれに続いて吉井君と坂本君が現れた

＼優子 Side END＼

＼翔子 Side＼

何故誘拐なんてするの？

何が目的？

吉井と雄二を足止めするのが目的だって…

そんな事のために、美波の小さい妹まで連れてくるなんて…許さない

でも、手足は縛られて、どうしようも出来ないし…

そこにルルーシュが来てくれた…雄二と吉井も

その三人の姿を見て、安心して力が抜けてしまった

＼翔子 Side END＼

＼美波 Side＼

アキ…助けて…アキ…

そう思っていると、扉をノックする音が聞こえた

男達の1人が扉を開けて、外に立つ人に何かを言っていた

怖くて…何も言葉に入ってこなかったけど

外から聞こえた一言は、耳に届いた

「死の差し入れに参りました」

ふざけた感じの言葉なのに、どこか真剣で

トーンも低く…Aクラスのランペルジの声！

扉を開けた男は、何故かふつとんで、壁に激突していた

＼美波 Side END＼

＼愛子 Side＼

ルルーシュ君が乗り込んできたあと、吉井君と坂本君も入ってきた

何故かその場で言い争いを…あ、坂本君が止めた

ボク達を誘拐した男達は、ルルーシュ君達をボコボコにする気まんまんらしい

1人の男が、たぶんルルーシュ君達に恐怖感を与えるために言った一言

「俺達裏社会の人間にたてつくとうなるか、わかってもらわないとなあ？」

それをルルーシュ君が聞いた瞬間、表情を変えた

今までに見たことがない…普段の彼を知っている人なら、たぶん今の彼には近づきたくないだろう

「貴様等、裏社会の水深何メートルにいて、裏社会の人間だという

気になっっているんだ？

死線をくぐりぬけたこともないようなガキが……」

ボクは息を呑んだ…ボクだけじゃない

代表や優子達もそうだ…

いつの間にかエヴァちゃんが目をさまして、ルルーシュ君を暫くみて言い放った

「ルル、そこら辺にしておけ、翔子達も殺気に耐えられなくなっている」

「エヴァ、起きたのか？」

「ああ、気を緩めすぎていたな…」

「そうか…お前はそうしていればいい、何かあれば俺が片付ける」

普通に動けるはずなのに、空気が張り詰めているような気がして動けない…



（愛子 Side END）

「坂本、吉井、やれるか？」

「ああ」「もちろん！」

俺は居合い拳を放ち始める

坂本と吉井は、女の子達に近づけさせないように、男達を相手にしている

「ムツツリーニ！女子を先につれて、学校へ走れ！」

坂本が土屋に指示を飛ばす

「「だあああああああああ！！！」」

吉井と坂本のストレートが、最後の1人に直撃

終了だな

放課後、巻き込まれたとして、俺やエヴァ達は坂本の指示である教室にいた

「ねえ、俺帰っていいかな？」

「ダメだ、お前は…巻き込まれたというよりは、突っ込んで行ったというほうが正しいが…」

まあ、聞いておけ」

あれだろ、学園長の長々とした話だろう？

学園長は、この清涼祭中に行われる試召大会の景品に白金の腕輪と

いうものを用意した

景品として用意したというより、新技術としてスポンサー達へ魅せるためという方が正しいか

だが、後になって、バグが発見される

そのバグというのが、一定得点以上を持つ者が使用すると、暴走を引き起こしてしまうというもの

そこで、坂本や吉井に、副賞として渡される遊園地のプレミアムチケットによくない噂を聞くから回収してほしいと、話を持ちかけた  
だが、教頭がこれを暴走させようと、色々と細工をほどこしたり  
チンピラを送ったりとFクラスへ妨害策をこうじた

そして今に至ると

「・・・悪かったね

まさかここまで手段を選ばないとは思ひもしなかったよ…」

学園長がもろもろの説明をし、頭を下げた

「とりあえず今日は念のため、明久、姫路を家まで送ってやれ」

「うん、わかった」

坂本が用心のためにと、巻き込まれた女子を送っていくようにそれぞれ指示を出していく

「ムツツリーニは工藤、秀吉は木下姉、俺が翔子で、ルルーシュはあと頼む」

エヴァはまあ俺と同居しているわけだし、島田姉妹か…小さい妹もいるからな

吉井に姫路さんと島田姉妹を任せるわけにもいかないか

第12話、真の裏社会とは、まあ通常であればこの世界にはいないけど、他世界

K「ご覧いただきありがとうございます！」「

ルル「カラオケ内の描写が物足りないよね」

K「ご想像にオマカセシマス・・・」

ルル「それにしても結構見てくれてる人多いね」

K「うん。最新話アップすると200人前後の人が2時間の間に見てくれてるみたいだね」

ルル「お気に入りに100件突破したしね・・・」

K「ねーっ…まあ清涼祭編はホント元のストーリーの流れが、記憶の中で曖昧すぎてうまく描写できてないのが痛いんだよね・・・」

ルル「なるほどね」

K「そんなことよりも、表現力が足りなさ過ぎてる感じはしてるんだけど、どこにどういった描写をつけくわえればよいのやら・・・」

「

ルル「お前の頭じゃ限界あるよね」

K「酷い！ー！ひどいよ！ー！ー！」

本日はこの辺りで…明日まで頑張って清涼祭編書き続けます！  
あと出来たら特別編も（＊、エ、＊）

第13話 ルルーシュ×美波が発生する確立は？（前書き）

K「おはようございます」

ルル「おはよう」

K「年越しを皆様どうお過ごしでしょうか？」

家族でまったり年越しスペシャル番組を見ながら？

アーティストの年越しライブに参加？

彼氏彼女と姫初め？

仕事終わりに仲間と飲み会？

仕事終わりの電車の中？

自分は、仕事終わりの帰りの電車の中で年越ししたことが一度だけありますね……さて、今日はとても寒いです。」

ルル「寒いね」

K「まったりとコタツで呑みながら小説を書きたいところですが、買い物や料理をしなくてはいけないっていう…」

書けたらもう1話今日中にアップいたします」

では、本編どうぞ

### 第13話　ルルーシュ×美波が発生する確立は？

坂本の指示により、エヴァと島田姉妹と家路につくこととなった

「怖いお兄ちゃんが送ってくれるですか？」

島田妹がそんな呼び方で俺に聞いてくる

何故、怖いお兄ちゃんなんだ？

「クククツ…ルル、怖いって言われるぞ？」

そんなに笑えるのだろうか？

エヴァが少し笑いを堪えるようにしつつ、そんな発言…

「怖いかな？」

「助けてくれたですけど、ちょっと怖かったです…」

「まあいいやなんでも…ところで島田さん顔色が優れないけど？」

いつも元気そうにしている彼女が、口数があまりにも少ない気がするのだが…？

「え、ええ。大丈夫、気にしないで……」

「今日、お父さんもお母さんもお出かけでいないです…だから今日



はお姉ちゃんと一緒に寝るです!」

なるほどね、家に妹と2人だけ……  
誘拐された後にそれか……

「島田姉妹、それならうちに泊まるか?」

「え? そんな、気を使わなくてもいいわよ……」

「美波 Side」

今日は、お父さんもお母さんも帰ってこない……

すごく不安だ……葉月もいる……何かあっても、ウチじゃ葉月を守りきれないし……

自分自身を守るかどうか分からない……

とにかく戸締まりをちゃんとして、葉月と一緒に寝るしかないよね……

全然それでも安心できないけど……

「島田姉妹、それならうちに泊まるか?」

ルルーシュがそんなことを言った

心配してくれてるのかな？

確かにエヴァンジェリンさんもいるし、ただの男子の家に泊まりに行くわけじゃないから、その点でも安心だし  
ルルーシュならたぶんウチや葉月を守るだけの力はあると思う…

「え？ そんな、気を使わなくてもいいわよ…」

何故かこんな時に強がって、そんな言葉が出てしまった  
ウチのバカー…ッ！！

「あつそ…それならエヴァを島田さんの家に泊めるか？」

へ？何？なんで？

「それでも私は構わないが…」

「金髪のお姉ちゃん、お泊まりするですか？」

「あー、どうする島田？こんな日に妹と2人では心もとないであろう？私はどちらでも構わないが…」

ルルーシュやエヴァンジェリンさんとあんまりかかわりなかったけど  
こうやっている結構2人とも優しいじゃないのよ…

「じゃ、じゃあエヴァンジェリンさん泊まってくれる？さすがに葉

月と2人だけだとちょっとね…」

く美波 Side ENDく

くエヴァ Sideく

島田家前

「じゃあルル、着替えとか頼むぞ」

「ああ」

ルルの意向により、島田の家に泊まることになった

「どうぞ」

「お邪魔する」

至って普通の家だな…

「適当に座って、ジュースでも入れてくる」

リビングに通されたのだが…何故、島田妹が私の手を握って離さないんだ？

「金髪のお姉ちゃん、こっちに座るです!」

「ああ…」

島田妹に引つ張られ、ソファーに座る

「金髪のお姉ちゃんは、怖いお兄ちゃんの彼女さんですか?」

「ん? まあ、そうだな…」

彼女じゃなくて妻なのだがな……

その後一時間ほど島田も交えてのおしゃべりが続き、ルルが着替えを届けてくれた

＼エヴァ Side END＼

＼美波 Side＼

夜10時頃

お風呂も夕食も済ませて、エヴァンジェリンさんに勉強を教えるも  
らっていた

葉月はウトウトと本を読みながら寝てしまったみたい

よかった、今日はあんなことがあったけど、怖くて寝れないとかそ  
うならずに済んで…

っていうウチは結構怖いんだけど…エヴァンジェリンさんもいるし…  
でも彼女結構華奢で、何かあっても対処できないわよね…？

まあ誰か居てくれるだけでも全然違うか

「私じゃ頼りなくて不安か？」

ドキッとしてしまった、確かに安心感と言っほどないけど…ウチと  
葉月の2人よりマシだよな

「全然、そばに誰かいてくれるだけでもあり難いわよ」

「まあ、大丈夫だ

安心して寝ていい、ほら…」

エヴァンジェリンさんが少しだけ窓のカーテンを開けて外を見るよ  
うに促がしてきた

なんだろう？と覗いて見ると、目立たない暗闇の中に座った状態で

目を瞑ったルルーシュが居た

「え？何してるの？」

「この家と私達の護衛だよ

一応、必要ないとは思うが…念のためにだろう  
島田姉妹だけじゃなく私もいるからな、守るべき対象が固まってるんだ」

護衛って…外で？寝ないで？

「もしかして、朝までああやってるつもりなの？」

「さあな…一応男が泊まっていくわけにもいかないと思ったんだろ  
う？」

それに私にも安心して寝るように言ってたしな…」

「と、とりあえず外に居させるなんて…」

「いや、あいつなら大丈夫だ

あのぐらいどうとも思ってたないさ、とにかく私だけじゃないから  
安心して寝ろ」

「う、うん……」

なんだか淒く申し訳ないんだけど…

確かに近くに何かあっても守ってくれそうな人がいるのは心強いかな

ありがとっ、  
ルルーシュ

美波  
Side END

### 第13話〽ルルーシュ×美波が発生する確立は？〽（後書き）

K「ご覧いただきありがとうございます」

ルル「意外と短かったね」

K「ええ、清涼祭二日目が始まりますのでどこで区切りの、短くなっていました」

ルル「ついに二日目か」

K「今回は美波と絡ませたのですが、葉月の出番が少ないかも知れませんね…」

ルル「ああ、というか葉月ちゃんって人懐っこいよね」

K「ええ、抱き枕にしたいです」

ルル「そうですかい」

K「ここでお知らせです…1月1日よりこの小説のタイトルが変更となります！

アンケートには全く候補はこなかったんですけどねww

現在 俺と俺の嫁エウァと召喚獣だと？（仮タイトル）  
1月1日 俺と俺の嫁エウァと召喚獣だと？

K「仮タイトルを省いただけですけどねw」



ルル「正式タイトルおめでとーっ」

K「はい、ということでまた次回お会いしましょう」

感想・質問・ちょっとした一言・お気に入り登録・評価・アドバ  
イス・各御指摘

随時受け付けております！

お気軽に感想のコメ送信よりいただければと思います。

新年特別番外編「ただのラジオ風味なだけで物語がないなんて……」(前書き)

娘「<sup>エヴァ</sup>ぱぱー、お年玉ちょうだいっ」

パパ(ルル)「はいよ」

娘「<sup>エヴァ</sup>やったーっありがとうぱぱー！」

パパ(ルル)「何に使うんだい？」

娘「<sup>エヴァ</sup>んとねー、魔法先生ネギまの原作コミックスと、バカとテストと召喚獣の原作ライトノベリティ本を買うのーっ」

パパ(ルル)「そうかそうか……。買ったらパパにも見せてくれるかい？」

娘「<sup>エヴァ</sup>いや、自分の分は自分で買つてよ」

パパ(ルル)「(なんか喋り方が突然普通になった！？)あはっはははっ…そうか…そんなに独り占めしたいほど面白いのかい？」

娘「<sup>エヴァ</sup>いや、独り占めとかじゃなくて、売上げ貢献だろう？そのぐらいわからんとは…貴様今まで何を学んできたんだ？」

パパ(ルル)「(あれ？僕が娘に叱られてる…)そ、そうだね…パパがバカでゴメンネ……」

俺と俺の嫁と召喚獣だと？特別番外編、はじまります！

新年特別番外編」ただのラジオ風味なだけで物語がないなんて……

ルル「はい、ということやってまいりましたラジオ風味の特別回……

Kは相変わらずね、『ぼっちの俺は1人さみしく酒をすすりながら、コタツでまったりしてるんだ!』と言って、出てくる気配がないのですが……まあ進めていきましようか

では、改めまして『俺と俺の嫁と召喚獣だど?』特別番外編!俺と俺の嫁とラジオ風味だど?スタートです!……」

ルル「おはようございます、こんにちは、こんばんは――

そして明けておめでとうございます!

俺と俺の嫁と召喚獣だど?のオリジナル主人公やらせていただいております、ルル・シュ・T・ランペルージです

では、さっそくゲストの方ですが、最初の茶番劇に挑んでくれた俺の嫁!」

エヴァ「エヴァンジェリン・A・K・ランペルージだ

なんでこんなところに呼ばれたかは知らないが……」

ルル「堅苦しいの苦手だもんねえ……」

エヴァ「うん……大人しく寝正月を過ごしたかったのだが……」

ルル「まあ、仕方ないから諦めて、早速最初のコーナー！

視聴者の皆様からお便りが届かなかったので（それ以前に募集していません）、Kからのお便りですね」

『拝啓

愛しの美春……あやにゃんへ』

ルル「えと、根本的にまず今回清水美春さんはゲストじゃありません  
そしてあやにゃんって中の人ですからね！？」

エヴァ「バカという一言に限るな」

『貴方の事を思うと、M心が攪られます』

ルル「ええと、この作者は何を考えているのかわかりかねますね……」

エヴァ「というか、Mだったのか？」

ルル「エヴァ、そこ食いつくところじゃないからww」

『罵ってください、もっとボクを虐めて！』

エヴァ「これ本当に全世界…つまりインターネットに流せるのか？」

ルル「編集でカットしていただきたいですね」

『と言いたいところですが』

ルル「お？」

エヴァ「ん？」

『ボク、ドSなんで、やっぱ無理です』

ルル「この作者何が言いたいんだよ……」

エヴァ「まったくだな……」

『美春の笑顔だけでボクはご飯を一杯食べれます』

ルル「これいつまで続くのかな？」

エヴァ「というか、普通ここでは『ご飯を三杯は食べれます』じゃないのか？」

『そして、ネコミミあずにゃんには仰け反るほどの可愛さあって、いつも腰痛です』

感謝しています！

今後のご活躍も楽しみにしております』

ルル「ネコミミあずにゃんって、完全に中の人にあてた手紙なの？  
ねえ！？」

つか、仰け反るほどの可愛さあって、いつも腰痛って…バカ  
なの？ねえ、バカなの！？」

エヴァ「この手紙…いや、Kの存在が完全な事故だろう…」

ルル「えっと、無駄なお便りのコーナーでした…」

続いてのコーナーは…えっとその前に、もう一通お便りが入  
っているようですね」

エヴァ「次はまともなのであってくれ…」

ルル「東京都23区内在住Kさんから頂きました…」

ってまたこの人なのね」

『下野さん、いつも楽しく出演されている番組を拝見させていただ  
いております』



ルル「……出すとこ間違えてるよね？」

エヴァ「吉井明久のＣＶだったか？」

ルル「そうですね、バカとテストと召喚獣のアニメ版そしてドラマＣＤ版で、吉井明久役を演じていらっしやった下野紘さんですね」

エヴァ「また中の人にあてた手紙か……」

「そういえば下野さん、２０１１年にとあるアーティストさんのカップリング曲で歌っていらっしやいますよね？」

最初ＰＶで見たとき泣いてしまいました

とても、すばらしい楽曲でした……ノリも良く、元氣ももらえる曲で、心が暖まる曲……ボクの中で２０１１年ベストソングＴＯＰ１０入りは確実でした！」

ルル「あーヒヤダインさんの冬にだしたクリスマスソングのカップリング曲ですね

確かにオススメではありますが……その前にちゃんとしたこの企画に送る手紙を書け……」

エヴァ「全くだな…で、ちなみにタイトルは？」

ルル「『あの日のボクへ feat. 下野紘』ですね

是非気になった方、ニコニコ動画さんで検索してみてください  
い…ってただの宣伝じゃねえか…！」

エヴァ「お正月らしいまともな手紙はこないのか…。」

ルル「まったくねえ…では次のコーナーいきましょうか

次はえーっと…ジェスチャーゲーム！の…こーな…。」

エヴァ「物理的に考えて無理だろう？」

ルル「気を取り直して次のコーナー！  
クイズのコーナーです！」

『第1問：ハゲカン（常夏コンビ）は何年何クラスに所属している？』

エヴァ「A・どうでもいい」

ルル「A・全くもって、興味もないし知りたくもない」

『答え：3年Aクラス』

エヴァ「本当にどうでもいい問題だな」

ルル「この問題が出題される価値を見出せない」

『第2問：特別番外編等を除く、本編のみで、ルルーシュが『お嬢様』と言った回数は？』

エヴァ「A・2回？」

ルル「A・1回」

『答え…確認してみてください（たぶん優子との会話で言った1回だけです）』

ルル「まともな問題がきたかと思えば…確認してくださいってねえ・  
・・・」

エヴァ「手抜きだな」

ルル「はあ…ってこのコーナーたった二問で終わりなの？」

エヴァ「手抜きだな」

ルル「ということで…次のコーナーは？  
に当てはまる言葉を入れる！」

ルル「　という空欄になっている部分に相應しいと思う言葉を答えるゲームみたいだね」

エヴァ「ほづ…とりあえずやってみよう」

## 問題1

ルルーシュとエヴァンジェリン…

寒い冬の日に                    で待ち合わせをしていた

ルル「どこで2人は待ち合わせをしていたのか、想像で答えるのね  
…」

エヴァ「ベッドしかないな！」

ルル「あーんーそうゆう待ち合わせですか…それ片方がシャワーから出てくるの待ってただけだよな」

エヴァ「そつだな」

ルル「俺はね普通に駅前だと思うんだ」

エヴァ「ありえなくはないか…校門とかも考えられるな」

ルル「選択肢が在りすぎて、困りますね」

えつと、この                    に当てはまる相応しい言葉に関しては、アンケートを実施いたします！

その中でピンときたモノをKが番外編に用いて話を作るかも知れませんか！どうぞお気軽によろしく願いしますね」

## 問題 2

坂本雄二という男が1人

夜の雨にうたれながら

暗い暗い空を

たった一つの星を見つけるかのように見据えていた

まるで映画の一場面のようにである……

彼が求めるのは

なのか？それとも

なのか？

彼の想いは今だ彼にしかわからない

ルル「彼が求めるのは愛情なのか？それとも翔子なのか？  
でどうだろうか？」

エヴァ「そうだな…結構じっくりするような気もするが…

彼が求めるのは友人からの好意なのか？それとも彼女からの想いなのか？

っていうのはどうだ？」

ルル「あーそれもありかもね…その前後の転開によって入れる言葉が変わるから、どの言葉を選択するかで想像が広がるね」

### 問題3

吉井明久は…

である

ルル「みじかつ！突然問題が短くなったな

んー吉井明久は…巨乳こそ我が人生なり！を掲げる人物である」

エヴァ「痛いな、吉井……………」

ルル「まあ、そうゆう人もいるかも知れないけどね…」

エヴァ「吉井明久は…主食を水・塩・砂糖とする生物である」

ルル「おお、吉井の紹介になっていいと思う！」

エヴァ「そうだろう」

ルル「ええ、エヴァが自分に当てはめて言うならどんな？」

エヴァ「私は、ルルの嫁である」

ルル「ふ、普通すぎた……」

エヴァ「なっ、何故そこで落ち込む！？ルルならどうなんだ？」

ルル「俺は、眠気には勝てないのである」

エヴァ「なるほどな…でも、それも充分普通だぞ？」

ルル「あ、そうだった？」

と、まあこの辺りでね区切っていけないと長々エヴァとの普段の会話になっちゃうから」

エヴァ「ん、ああそうだな」

ルル「ではまずゲストのエヴァでしたー」

エヴァ「またな…」

ルル「そしてルルーシュ・T・ランペルージでしたっ  
ありがとうございました！」





新年特別番外編」ただのラジオ風味なだけで物語がないなんて……（後書き）

お気に入り登録件数が110を越え（31日現在）

PV・ユニーク共にかなり伸びていて感謝しております

皆様新年どうお過ごしでしょうか？

自分は親戚がうちに集まってーgdgdって感じです

先月の半ばに始まったこの作品ですが、今年もよろしく願いいたします

まだまだ頑張っていきますからね！

#### 読者様への募集

に当てはまる言葉を答えなさいという問題が、今回の中にでてきたと思います

読者様もお気軽にお答えを書いて、感想よりお送りください

ピンと来たものがあれば特別番外編で、使用させていただきます！

第14話 悪魔！？え？電波神のジジイより神っぽいよ（前書き）

K「こんばんわん……」

ルル「ちょ、テンションひくい！」

K「親戚が帰って、超特急で書いた……から……」

ルル「ああそうww」

K「頑張ったけど、ストックが完全にないからきつつい……」

ルル「まあ頑張れ！」

本編どうぞ

第14話　悪魔！？え？電波神のジジイより神っぽいよ

さあ、やってまいりました清涼祭二日目

ええ、相変わらずメイド喫茶での勤務の一日です

試召大会？見に行く気はないですね…

昨日の評判がよかったのか、朝から結構な人数が来店してくれていた

「利光！入口二名様、窓側奥から二番目のテーブルへご案内！」

「わかった！」

「エヴァ、ケーキの在庫大丈夫か？」

「ショートケーキがなくなりそうだ  
そろそろ焼いた方がいい」

「わかった、材料とって来る」

忙しいどころの話じゃない

なぜ繁忙期の居酒屋のように大忙しなんだろうか

唯一の救いとするなら、ホールは穏やかな雰囲気を維持できている  
ということだ

吉都君の指示やフロアのおかげで、女の子達もひとつひとつしっ  
かり、仕事をこなせている

「…実に面白い」

「利光、福 雅治さんのモノマネなんかして、この忙しい時に何を

やっている…」

利光が、キッチンの端でそんなことをやっていたので、ツツコンでみた

「あ、いや、僕はそんなつもりはなかったんだけどね…これを見てくれ」

利光がそう言っただけで出したのは、試召大会の映像である

「何が面白いんだ？」

「Fクラスの坂本君と吉井君のペアが勝ち残っているんだよ」

「いや、そんなことより働けよ！」

「ぼ、僕は！吉井君の勇姿がみたいんだ！！」

はあ…利光、お前はもうそっちの世界に完全に逝ってしまったのか……

大丈夫だ元の利光の墓を立ててやろう、安心してその世界へ旅立て

……

黙祷

さて、午前から昼過ぎまで働くと、客足もだいぶ緩やかになってきた

試召大会を見に行くお客さんが増え始めたのだろう

昨日は一般公開はされていなかったが、今日は3回戦からだったか？一般公開するらしくてな

決勝が近づくにつれて、客足も少なくなっているのだろう

午前から働いていたメンバーは、休憩に入る

統括責任者がいないが…まあ大丈夫だろう

「ルル、私はまだ見てないところを回るが一緒に行くか？」

休憩に入るとエヴァがそう声をかけてきたが…

どうしようかな…

「どこに行くんだ？」

「とりあえず、試召大会の決勝でも見ようかと思ったんだが…」

「興味ないからいいや…」

「そうなのか、じゃあ行ってくる」

エヴァは試召大会の会場のほうへ向かって歩いていった



俺は適当に散歩しつつ、学園内を見て歩くことにした

決勝戦を見に行く人が多くてあまり人がいないうちに見ようと思っ  
てね

Fクラスを覗いたが主要メンバーが居ないようだ…

そういえば吉井と坂本ペアが勝ち残ってるって言ってたか

仕方なくブラブラと歩きまわる

一般のお客さんは特に、試召大会を見に行ってるらしくほとんど見  
られないな

ぶらぶらと見て回るものの…これと言ったモノはない

あるとするなら吸血鬼に扮した男が入口に立っている

お化け屋敷か…

お化け屋敷っていう名前じゃなくて、ホラーハウスにしたらよかつ  
たのに

そつえばつつすらとエヴァが言つてたな…このお化け屋敷か？

入ってみよう

ということの入場

数歩進むと、寒気が走る

ドライアイスか？

白い煙とちよつと冷たい空気

いや、これはマズイ…

神のクソジジイ…普通にこれはイレギュラーだろ？

表立ってないだけで、この世界にそんなものがあるのか？

これは悪魔によるものだ

ちゃんとしてっかり専門的に用意された建物なら別だが

ここは学校…ここまでの大量な白い煙を維持し、かつ室温をひんやりとする程度に維持するなんて…  
どうなのだろうか…俺はできない気がする

一日の日程ならまだしも二日だ  
素材費にどれだけ時間がかかるか…

そんなことはどうでもいい

微力ながら魔力を感じる

気が緩んでいたエヴァには気づかれない？

というよりこちらにそんなモノがいるとは思えられないからな・・・

・

「あなたのような、存在がいるとは思いませんでしたよ……」

ふと目の前に吸血鬼に扮した男が現れる

「それはこちらのセリフだ……」

「異世界の人だ……私にはわかる」

警戒度を引き上げる・・・

異世界人だとわかっていて……一体どうゆうことだ？

「あなたの世界で私達はどのような存在ですか？」

そんな質問が飛んできた

異世界人だと完全に確信している空気が漂っている

否定はできないだろう…

「悪魔…人の寿命や魂を糧に召喚され、もらった報酬だけ仕事をこなす…」

「それは人殺しであっても？」

「ああ」

静まり返る空気

「だからそんな殺気に向けているのですか  
大丈夫です。こちらの世界の私達是对価に…そうですね寿命はもらうことが稀にあります…」

殺しの依頼は受けませんし

今回はこの生徒の1人が、この出し物を成功させたいと心から願ったことでそれに協力しているだけです

いただいた報酬は…僅かな魔力

この世界の住人全ては微々たる魔力を持つが、全く持たない人間です」

なるほど…その使われない微々たる魔力をもらって、願いを叶えるのか

確かにこの世界じゃないよな、魔力なんて…

そんな微々たる魔力だからこそ、大きな仕事も請け負わないか…

そして、俺の魔力量から異世界人と判断せざる終えなかったと……

「まあいい、それなら倒す必要はないな…

あんまり余計なことしかすなよ」

「ええ、本物の吸血鬼さんが昨日いらっしやったときはビックリしましたけどね…あなたのご友人で？」

「あー、俺の嫁だ」

この言葉に目を見開く男

「操られている様子もない・・・吸血鬼化している様子もない・・・吸血鬼が嫁なんて、おもしろいですね。余程、あなたに信頼を置いているんですね

あれほどの真祖化している吸血鬼なら、あなたのように部屋に入った途端にこちらに気づきますが…彼女は普通の女の子として居た気づいていなかったところを見ると、何かあってもあなたがいることでの安心感があるから気が緩んでいた・・・もしくは、気づいたがあなたが対処してくれると判断し、気づかない振りをしていた

か…」

んーどうなのかな？

単純に気が緩んでいた気も…

まあいいか

「とりあえず、人に害をなさないならいいよ」

「そうですか・・・受ける依頼は今後気をつけますね  
またどこかでお会いしましょう」

そついい残して、吸血鬼に扮した悪魔が消えた途端、出口が前に見えた

とても不思議な出来事だ

悪魔を見逃す日が来るとは…いや、悪魔というより、神頼みした少年少女の願いを叶えるために協力しているだけか…

となると、どちらかと言うと

あの電波神のワシより、神っばいと思っよう。  
うん。



第14話「悪魔！？え？電波神のジジイより神っぽいよ」（後書き）

K「ご覧いただきありがとうございます！」

ルル「ありがとうございます！」

K「ええと、皆様改めまして

アケマシテオメデトウゴザイマス…

今後もよろしくお願い致します」

ルル「お願いします」

K「さて、清涼祭はサクツとあと1〜3話程度で終わらせる予定です」

ルル「ほー」

K「とりあえず書き出してみないとわからないのですが…

それとですねーあの元旦にアップした特別番外編の後、お気に入り登録件数が伸びまして、132件かな？になりました！！

ありがとうございます！」

ルル「今後もよろしくネッ！」

K「ではまた次回」

第15話 Fクラスに属していなければ、文月学園でも結構平穩に過ごせるモ、

K「こんにちは」

ルル「こんにちは」

K「昨日はオンラインパチスロゲームでエヴァンゲリオンの真実の翼を打ってました……演出見るの楽しいですねえ……。だからストックなくて困ることになるんですけどねww」

ルル「笑い事か？」

K「まあまあ、今回は少々短いです……というか今回で清涼祭編終了です」

ルル「早くないか!？」

K「まあまあ、そして今回はですね感想で、エヴァの影が薄いと言われたのもあり、エヴァ×ルルの本当にちよつとした絡みを書きました」

本編どうぞ

第15話 Fクラスに属していなければ、文月学園でも結構平穩に過ごせるも、

清涼祭…… Fクラスじゃないだけで、だいぶ落ち着いて過ごせた気がするよ

でも何故かさつきから騒がしい

ほんの数秒前からだ…

あ、なんかとてつもなく、とても嫌な音を聞いた

爆発音である

俺は現在、清涼祭終了後

中庭に呆然と立っている

目の前には、爆発音と共に  
校舎から咲いた花火と煙りが見える

これもまた一興とな・・・

「エヴァ、お茶ない？お茶…」

「ん？珍しいなルルがお茶なんて…残念だが、そんなもの持ち合わせてはいないな」

ああ、そうだ…

俺はエヴァを肩車した状態で、今現在

夜空に咲く花火ではなく

校舎に咲く花火を楽しんでいる最中である

何故肩車をしているか？今の現状よりそちらが気になるか？

ならば時を遡ろう

数十分前

清涼祭終了！Aクラスの片づけをさっさと終わらせて

何やら花火があがるとのこと、エヴァが見たいと言っていた

麻帆良学園の時、茶道部に属していたためか、和を感じるもの好きなのね

「とりあえず、何発あがるかわからないけど……どこでみる？」

「適当に学園内の校舎外を歩いていれば見えるんじゃないか？」

まあ、確かにエヴァの言うとおりでござえます

「じゃあ屋上？」

「屋上は…閉まっているか、人でいっぱいだと思う……」

「散歩しながら花火があがるの待つか」

っていうか、何の花火だっけ？

清涼祭終了&試召大会終了のお知らせ？

まああがるモノはあがるっていうことで、よしとしようか

エヴァと並んで歩くコト、5分

「ルル…その、なんだ…こうゆう時は手を繋いでやってもいいぞ…」

普段、エヴァとは手を繋いで歩くことは、まずない…

エヴァがそれこそ妹に間違われる上に、離れたら迷子にでもなってしまうような子供扱いされているようで、『I・Y A・D A』

とのこと

「仕方ないな……」

スツとエヴァに右手を差し出すと、エヴァは当たり前だと言っかの  
ように、その手をガシツと掴んだ  
まあ確かに、夫（俺）、妻エヴァですから、そうなのですが…

ちょっとしたイタズラ心が作動し

そのままエヴァを軽く引き寄せ  
左脇を左手で掴み、右手を右脇へ…

そしてヒョイと肩車してしまったのである

「なっ・・・ノノる、ルルっ、お、降ろせ！恥ずかしいだろう！？  
子供扱いするなっ！！」

そうジタバタと肩に乗りながら文句を言うエヴァは、

カワイイ！！！！！！

の一言に尽きる

「まあエヴァ、たまにはいいじゃん？

小さいエヴァだからこその特権だよ？肩車なんて…それこそ体育祭かなんかの競技でこんな態勢でなきゃいけない、ってことでもない限りね」

「それでもだな…ホント、不意打ちで強引なコトをするのが好きな奴だよルルは……」

「あえてそうしてるわけじゃなくて、自由気ままに生きてるから、そうなるっていう事なんだけどね」

何分か肩車の状態で歩き、冒頭に繋がるわけだが…

もう一度確認しよう



なにやら騒がしいなあ……って思ってたら爆発音と共に、花火と煙り

それはそれは珍しい

校舎に咲く花火だった

こんな珍しいモノが見れるなんて…

うむ、よきかなよきかな

あーお茶飲みたい！

という感じですね

「ルル、この世界での花火は、空に向けて放つものではないのか？」

「いや、他と同じで空に向けて放つものだよ…」

エヴァにこの世界の常識が、異常な形で伝わってしまうじゃないか！  
と若干の怒りを感じつつも、エヴァと2人花火が打ち込まれた校舎  
を見つめていた……

その後、肩車したまま散歩をしていると、携帯が鳴り打ち上げの誘  
いがきたが……  
断って帰宅することにした

帰宅すると、ご飯を食べ、お風呂に入り、いつものようにエヴァを  
抱いて寝る……

特別な出来事があることより、そんな何事も変わった様子がない日  
常に

嫁がそばに居て、嫁の温もりを感じれる

それが俺にとっては幸せなのだ……何故か、そう改めて感じるこ  
とが出来た一日であった

第15話 Fクラスに属していなければ、文月学園でも結構平穩に過ごせるも、

K「ご覧頂ありがとうございます」

ルル「平穩っていいと思うよ、うん。」

K「平穩すぎるとバカテス特有のコメディー感が失われている気がするけどねww」

ルル「そうだけど、何気ない幸せにたまにふと気づいて、実感できるって大切だよ」

K「うんうん…ってルルの意見はまあ放っておいて…」

お気に入り件数が141件で評価してくださった方が1人増えました

さらにPVアクセスは8万を越え、ユニークアクセスは9200越えですかね…ええ、あり難いですね

更に数日前から、バカテスの週間ユニークアクセス順で表示すると1ページ目に来ており、大変嬉しく思いますよ」

ルル「それだけたくさんの人に見てもらってるって実感できるのは、嬉しい以外のなものでもないよね」

K「うんうん

では、本日はこの辺で…」

また次回も是非ご覧くださいっ

第16話　ルルとエヴァのバカ？バカカップル？な日常（前書き）

K「えーお待たせしました！」

ルル「お待たせされました」

K「ちょっと時間がとれなくて…遅くなりました。すみません」

ルル「それで、今回のお話は？」

K「今回は強化合宿編前の閑話といったところですかね」

ルル「ほー」

本編どうぞ

## 第16話　ルルとエヴァのバカ？バカップル？な日常

清涼祭終了から学力強化合宿までの間のくだらない話である…

「エヴァ　ああああああああああああああああああああ

「ルル　~~~~~

互いに名前を叫びあう、ルルとエヴァがいる

何故このような状況になっているかというと、時は少し前に遡る

「ルル、面白い動画を見つけたぞ」

休日、ルルとエヴァは家でまったりと過ごしていた

ルルはソファに横になり、まったりDVD鑑賞をしていた  
エヴァはテーブルの上にノートパソコンを起動し、二二動画を  
こちらにもまったりと見ていた

そんなエヴァが面白いものを発見したらしくルルに声をかけた

「んー？どんなー？」

そう言つてルルはエヴァのパソコンの画面を覗き込む

そこには、ハイパーボイス世界選手権とかいうよくわからない大会  
の映像が映し出されていた

専用の機械に繋いだマイクに向かって大声で好きな言葉を叫ぶモノ・  
・・・

大きい声を出せた者が勝ちという至ってシンプルなモノである

「これ、やってみたいぞ、ルルっ」

エヴァが目を輝かせているのである

どうやら、面白そうだと思ったものはやりたくなる性質らしい

「機械取り寄せると？」

「いや、実は用意してあるんだ……」

どうやら彼女は、数日前に機材をネット注文し、既に準備万端であったようだ

ルルに話しを振るために、その動画を見せたと……

というわけで、さっそくやってみることにした2人

「あ————っ」





「ねえ、エヴァ

ルールじゃなくて、ルールに聞こえるよ?」

ルルううううううならともかく、るううるうううでは、ルールとも聞こえるのは間違いない

「そうか…」

「というより何故、名前を呼ぶ?

近所に俺の名前が響き渡ってしまうだろうが…」

苦笑いしつつルルがそう言うが…

その前に、近所迷惑だと言う事に気づくべきだ……

「愛する者の名を呼んだ方が、力が入る気がしたんだから、仕方ないだろう?」

「ああ、そう…まあ確かにそうかもね」

そうなのだろうか…まあ人それぞれだろうが…

「ルルもやってみたらどうだ?」



いい雰囲気の時など、甘い言葉を言い合うようなコトもあるだろうが  
大声で言うのは、恥ずかしいものだと思う

「そばにいるうっうっうっうっ！

って、どっちかと言うと、セリフが男女逆だろうが！！」

エヴァの言葉に返しつつも、ツッコミを入れる

ああ、いつの間にかマイクが2本になって、もう既に声の大きさの  
数値など見ていないことは、そっとしておこうと思う

「エヴァ、大好きだあああああああああああああああああ  
あっっ！……」

愛を表現する為のひとつ

言葉

そんな言葉を言うのはいいが  
もう一度言う

近所迷惑だ

数十分後、お隣さんからの苦情により、止めざるを終えなくなった  
お2人

「ところで、エヴァ……」

「な、なんだ？」

お隣さんからの軽い説教を喰らった2人は、一息ついて紅茶を飲んでいた  
そんな時、ルルからエヴァに言葉が投げられる

「何が狙いで、これをやり始めた？」

「えーっと……」

実は、ハイパーボイス世界選手権で、愛の告白の言葉を叫んでいた男がおり

何を思ったか、ルルにやらせてみよう、思い立ったエヴァなのである

「ああ、そう……やっぱりそうゆうことか」

たまに変なことをルルにやらせるエヴァである

だが、ルルもそんなエヴァの要望にんだかんだ言いながらも、答えてしまうのである

「エヴァと過ごせる日々が幸せなんだあああああああああああああああ  
あああああっ……」

突然叫ぶルルであるが……本当に騒音として近所迷惑だからやめていただきたいものである

「ま、まあその、なんだ…突然大声で言われると、ちょっとその…で、照れるというか、う、嬉しいというか…／＼う…わ、私もルルと一緒に居れるのが幸せだよ…／＼／」

「エヴァ、おいで…」

ルルはエヴァが焦っているような感じが可愛すぎてたまらないらしい、そんな言葉を放ちつつ両手を広げる

ルルの言葉にすんなりと従い、エヴァはソファの上のルルに抱きつく

この2人の日常は、砂糖まみれである

そんな砂糖まみれな日常を、糖分少なめで提供していきたいと思う  
今日この頃である

そして…些細な事で、コトを最後までしてしまうのは、まだまだ2人が若いのが原因だろうか…

この先は糖分控えめ&自主規制により、どうなったかは皆様で想像いただきたい

第16話　ルルとエヴァのバカ？バカップル？な日常（後書き）

K「ご覧いただきありがとうございます！」

ルル「ありがとう！！」

それにしても、新話あげなくても、1日辺りのユニークアクセス3桁はあるみたいだね」

K「ええ、そうなんですよ…なんと1万ユニークアクセス突破いたしました！」

PVアクセスももうすぐ10万というところまできてまして」

ルル「かなりの人がこの小説を見てくれたってことなのか」

K「そうそう」

それにお気に入りも145件になってるし、感想を定期的に送ってくれる七夜様とゼロ様もいらっしゃるし…

続きを書いてアップしてさ、それに対する感想とかもらえるって、凄く続き書きたいって気持ちになるわ…あり難い話です。」

ルル「うんうん」

K「では、この辺りで…また次回も是非ご覧ください！」

第17話、17話としてカウントすべきか、16・5話とすべきかマジ悩んだ

K「こんばんは」

ルル「こんばんは」

K「何故か、明け方アップした第16話がうまく検索の新着順に反映されていないようで……ユニークが伸びなかったよおおお!!」

ルル「どんまい」

K「ちよとシヨック……でもしっかりと見てくれた方も何十人かいるようでよかったです」

本編どうぞ



第17話、17話としてカウントすべきか、16・5話とすべきかマジ悩んだ

ある休日の午後……とある豪邸のとある部屋……

ティーセットをテーブルに並べ

優雅にティータイムを楽しんでいたとある女性

彼女は100人見れば、99人はカワイイ、綺麗、などと褒め称えるだろう美少女である

綺麗にお手入れされた長いまつすぐな黒髪  
小顔であるうえに大人しそうな雰囲気

座る姿勢は、それだけで美しく…

そんな少女の名前は霧島翔子

現在文月学園に通う高校2年生である

所属クラスはA

しかも学力は学年主席

容姿端麗成績優秀

大和撫子とは彼女のような人を指す言葉であろう

そんな彼女には、小学校からの幼馴染である坂本雄二という人物がいる

雄二は翔子と同じく文月学園に通う高校2年生である  
所属クラスはF

そして、翔子は幼馴染の雄二に恋心を抱く

それはつい最近まで、まったくブレることのない  
一途な想いであった

だが、高校2年の春  
とある少年が転入してくる

ルルーシュ・T・ランペルージ

彼はアイドルにいてもおかしくないほどの美形であり、モデル並と思われるスラッとした体型であった

そして頭脳明晰、運動神経抜群と……惹かれる女性はいだらう

だが、彼は自由人である  
悪くいえば自己中心的思考の持ち主である

そんな彼には、妻が居て  
その妻は西洋人形のように整った顔立ちをしており、体は小さく華奢である

彼と接しているなかで、彼のコトが気になることに気づいた翔子は彼の妻、エヴァンジェリンと接触し、彼の情報を得る

そして翔子はふとティーカップを片手に考えるのであった

ルルーシュ……複数のお嫁さん……浮気？  
でもエヴァは許してみたいだし……

…一夫多妻制の国から来た？  
…18歳未満で結婚しているから、考えられる？

彼の何が知りたい？  
彼の秘密？

彼を知ったら、『気になる』という感情が、友人としてか異性としてかわかる？

それは、わからない…ただ、今は彼を知るコトが、自分の心を知る近道かもしれないから……

翔子は、考えるひたすら、ルルーシュとその周囲の人物のコト  
そして、雄二のコト  
自身の気持ち

いつまでこの不安定な状態が続くのか……

近い未来、翔子の目に映る人物は誰なのか……

それを知るにはもう少し時間がかかりそうである

翔子は思考するのを止め、自室に行き勉強をする

その日の夜

夕食を済ませ、入浴も済ませて  
髪を整えていた

そんな時、携帯にメールが届く

送信者はエヴァであった

『ルルの寝顔を特別にわけてやろう

いらなかったら消せ』

たった二行の文章と、添付された画像ファイル

保存する前に確認するためファイルを開く

そこには、大きい猫のぬいぐるみを抱き枕にして寝る、ルルーシュの姿があつた

意外である

ルルーシュとネコぬいぐるみ……

ふふつと軽く翔子は笑い

画像を保存する

『ありがとう

保存させてもらった

またルルーシュの学校では見られない姿を撮って送ってくれると嬉しい』

ピッ

エヴァ宛にメールが送られた

数分後

『気が向いたらな』

短い返答ではあったが、ルルーシュが言うに…エヴァはツンデレという奴らしいので、これは訳すと…『わかった、また送るね』という感じになると思う

そう翔子は理解し、ベッドに倒れこむ

そして部屋は静まり返っていき静寂に包まれる  
明け方の鳥の鳴き声が聞こえるまでこの静寂の中に響くは、翔子の微かな寝息と、たまに寝返りをうつときの音だけである……………





第17話→17話としてカウントすべきか、16・5話とすべきかマジ悩んだ

K「ご覧いただきありがとうございます」

ルル「ありがとうーっ」

K「ええと、今回は何故かこんな話しになりました  
誰も」を使ってコメントしていないっていう」

ルル「ウケタ…w」

K「打ち込んでいたら勝手にこんな流れになったけど…よかたのか  
なあ？」

ルル「たまにはいいんじゃない？」

大半がコメントで埋め尽くされている回もあるんだから」

K「確かに…」

こんな回だったけど、いかがでしたでしょうか？

また次回も是非ご覧くださいねっ  
」

第18話 強化合宿編スタート！…まだ前日じゃん！…（前書き）

K「こんばんは！すみません少々遅くなりました  
睡魔に勝てず、書きながら寝落ちしてました」

ルル「おはよう」

K「はい、ということで、強化合宿編まったり開始です！」

本編どうぞ

第18話　強化合宿編スタート！…まだ前日じゃん！…

「事前に報告していた通り、明日から学力強化合宿です  
Aクラスは学校からリムジンバスにて向かいます  
遅刻しないようにきてくださいね

では、朝のホームルームは以上です」

高橋女史はそう告げて教室をあとにする

「なあ、利光」

「なんだい？」

「学力強化合宿って全員強制参加？」

「そうだよ、授業の一環だからね」

めんどくさいなあ……  
どうにかサボりたい  
いや、欠席を希望する

男女別室なのは当たり前っていうことはだよ  
エヴァと別室…行く必要なんてないっ

「…ルルーシュ」

「ん？どうした翔子」

いつの間にか翔子が目の前にたっている  
よくある光景である  
もうこの隠密性にはなれたよ……

「…サボっちゃダメ」

こ、心の中を読まれただと？  
読心術まで覚えたのか・・・恐ろしい娘め！

「嫌だ、サボる！」

「…ルルーシュわがまま…子供っぽい…」

翔子の発言に思わずきょとんとしてしまった  
子供っぽいって…そんなことない！

クスクスと横でエヴァが笑っているが…まあ今は気にしてられない

「翔子さん、それでどんな御用があつて？」

「…ただサボリそんな雰囲気を感じたから忠告」

それだけ言い残し自分の席へと戻っていく翔子

そんなにサボりたいオーラが出ているのかね……？

「ルル、だいぶ翔子に気に入られてるな

よくお前の癖や表情を観察しているから気づいたんだよ翔子は」

「そうなのですか…気に入られてるのね  
ところでエヴァよ……」

「なんだ？」

「学力強化合宿も楽しみなのか？」

エヴァは若干そわそわしているというか、テンションが高いというか

「そ、そんなことは少しぐらいしか思っていないぞ！」

少し思ってるのね…

何が楽しみなんだか知らんが……

「……そういえば次の満月は強化合宿中じゃないか？」

「…ッ！ど、どうしたらいい！？ま、まずいよな？」

知らぬ人に補足しておこう

エヴァは真祖の吸血鬼である

満月の晩には普段よりも、魔力が高まる

「いや、まあ魔力が高まるだけだろ？」

「う？うーん…そういえばそうだな

その魔力が周囲に影響を及ぼさなければいいってところか…  
ルル、魔力を抑えるアイテムないか？」

「あるよ、帰ったら渡すわ」

帰宅後しつかりそのアイテムは渡しました

「ルルーシュ、ちょっといい？」

何故か真剣な眼差しで優子が声をかけてくる

「ほい？今回はどのようなご用件でございますか？お嬢様」

「お、お嬢様じゃないっ／＼

まあいいわ、とりあえずこっちきなさい！」

腕を引つ張られ、人気の少ない場所へ連れて行かれる

「なんでしょう？」

「秀吉と私、どっちが可愛く見える…？」

ほわい？

何故そのような質問に…？

「えっと？」

「んーどっちのほうが、女性としての魅力があるかってこと！」

女性としての魅力ねえ

「根本的に、秀吉は男なわけで…」

「あーじゃあ、秀吉がもし女だったら？」

「どうだろうね、秀吉が女性であれば、おしとやかそうでカワイイかもしれないけどね

優子は優子でカワイイところはあるし

顔や体格は似ていても、まったく中身の違う双子だからな…」

「…………私のカワイイところって？」

それ聞いちゃうの!？」

「ツンデレ属性」

「私、ツンデレなの?っていうか、ツンでもない…ツンはあるかもしれないけど

デレたことはないと思うんだけど、なんでルルーシュの中で私はツンデレ属性になってるのよ?」

「安心しろ、お前がツンデレじゃなかったら、ただの性悪女だ」

「…………言ってくれるわね」

「暴力的、猫かぶり、上から目線

それだけなら誰も魅力を感じないだろう、すぐよこには外見は瓜二つの秀吉がいるんだから」

「はぁ…………それで私の魅力は他にないの?」

あれ?カワイイところを聞いてたのに魅力に変化してる…?

「バカなところ?」

「はてな付いている意味もわからないし  
それ以前に、私がバカだっていうの?」



「学力的バカって意味じゃなくてさ  
まあなんでもいいけど…とりあえず俺が言いたいのは

秀吉の方が男子に告白される回数多いのは、単純に見た目カワイイし、親しみ易い雰囲気があることがあげられる  
中には、顔だけで告白するから、秀吉に振られたあと優子に告白する奴もいるだろう

そんなことは気にするな、お前の魅力や良さをわかっていない奴にすぎない

そんな奴はサクッと切り捨てる  
優子なりの魅力がわかってる奴だけ相手にしてりゃーいい」

「そうね…なんかもっと不真面目な答えを出されるかと思ったけど意外と真面目な回答してくれてありがと」

「ひとつアドバイスするなら、別に猫かぶりやめていいと思うよ」

「ま、まあ、考慮しておくわ…じゃあね、ありがとっ」

走りさつていく優子であるが…なんで俺に相談してきたんだ？  
男子の意見を聞きたかった？

それなら利光とか…ってあいつは無理か世界が少し違う  
吉都君…そこまで親しくないか  
他は…無理だな

で俺か…って言っても、優子とそんなに深い関わり持っていたっ

け？

学校外で遭遇したことないしな・・・

ようわからん

第18話 強化合宿編スタート! …まだ前日じゃん! (後書き)

K「ご覧いただきありがとうございます!」

ルル「いやー、はじまるかと思いきや、まだ前日なのね」

K「あはははは……まあちょっと、優子とかAクラス面々と絡ませたくてね

愛子は絡ませられなかったけど……」

ルル「頑張れ!」

K「では、次回更新も頑張りますので、どうぞよろしく願いします!」

第19話　だから、まだ合宿始まってないのよ？前日なの前日…（Fクラス側）

K「こんばんは」

ルル「こんばんは」

K「いやー、なんかさ今日お腹痛くて調子悪いわ…」

ルル「さつさと薬飲んで寝ろ」

K「昼頃起きたばかりなんですけど…」

ルル「頑張って寝ろ」

K「……………」

本編どろぞ

第19話だから、まだ合宿始まってないのよ？前日なの前日…（Fクラス側）

吉井明久はいつものように登校してきて、いつものように下駄箱をあけた

すると上履きの上に一通の封筒を発見した

手に取ってみるが、差出人は不明

これを誰かに見られたら、ラブレターだと勘違いされてFFF団に追われるはめになってしまう！

と明久は考え、すぐさま鞆の中へ放り込んだ

明久は屋上に逃げ込み、そこでゆっくりと封筒をあける

その手紙にはこう記されていた

『あなたの秘密を握っています』

明久の悲鳴が、一瞬青く澄んだ空へ響いたのは言うまでもない

一方、坂本雄二氏

友人で幼馴染の霧島翔子と共にお話中である

「翔子…その手に持っているMP3プレイヤーはなんだ？」

「…音楽」

雄二が不信がつて聞いたのは理由がある

翔子は極度の機械音痴である

よって、そんなMP3プレイヤーなんて持ち合わせているはずがない

何やら危険を察知した雄二は翔子の手から、MP3プレイヤーを奪い取り

再生ボタンを押した

『翔子、愛してる。俺と結婚しよう!』

間違いなく坂本雄二の声だ

そしてそんな言葉一言も言った記憶はない

合成か…瞬時に雄二の脳裏にその言葉が浮かぶ

『翔子、俺の嫁になって生涯共に過ごそう』

続けてルルーシュの声で聞こえてくる言葉

「…2人の男性から求愛される…ちょっとした夢」

「ちょっとした夢じゃねえ!

これはとりあえず消去しておく…」

「…待つて、まだお父様に聞かせてない」

「聞かすな、アホ！」

まるで俺とルルーシュで翔子をとりあってるみたいじゃねえか……  
って何故、ルルーシュ？

翔子が気になる奴ってルルーシュなのか？

いや、待てよ、その前に、俺がそんなこと気にする必要があるのか？

雄二の頭は素直になれず、ぐるぐると混乱していく一方である

「……消しちゃダメ、ルルーシュのほうは高いから」

高いつてなんだ？誰かから買ったのか……まあ翔子にこんな器用なコトができるとも思えないしな

「翔子……ところでなんでこんなモノを聞いていたんだ？」

「……妄想用道具」

「わかった、翔子に妄想癖があるのは理解できたが、これでどんな妄想をする気だ？」

「……雄二とルルーシュが……裸で私を奪い合う」



「・・・ま、まあ何故裸かは置いておこう  
こんな危険なモノがあつてたまるか！消去して明日返す」

こんなものは、コピーにすぎない  
オリジナルを消さなければ……

今は翔子の気がたぶんルルーシユの方に向いていはいるが  
もしこちらに戻ってきたらどうなるか、わかったもんじゃない

危険すぎる

その一言に尽きる！

教室へ雄二が出向くと、何やら問題があつたようで明久が嘆いていた

「助けてムツツリーニ！僕の名誉の危機なんだ！」

「後にしろ、俺が先だ……」

明久とちよつとした言い争いにもなつたが

雄二と明久はそれぞれ事情説明を終わらせる

「……とにかく調べておく」

2人はムツツリー二に調査を依頼したようである

果たして、この事件にルルーシュは絡む気があるのか？  
それとも巻き込まれてしまうのか？

そして、翔子はいったいどんな妄想劇を繰り広げながら、2人の言葉  
葉を聞いていたのか？

全てが明らかになる日は来るのか？

行く末は、作者も想像がつかなかったりする……

第19話　だから、まだ合宿始まってないのよ？前日なの前日…（Fクラス側）

K「ご覧いただきありがとうございます」

ルル「ありがとうございます」

K「合宿の前日…第18話の雄二や明久の話をちょこっただけ書いてみました

まあ雄二と翔子の関係が少々変わっただけで、ほぼ原作と変わらないですけどね」

ルル「まあ仕方ないさー

ところでお気に入り件数が160を超えたみたいだね」

K「ええ、1話アップすることに数人ずつお気に入り登録が増えていつてます

あり難いですねえ…数日前にPVは10万を越え、ユニークは1万を越え…ホントはユニーク1万突破で番外編書こうかと思ったけど

俺笑いのセンスないじゃん？だから止めておいたんだ（・  
、\*）」

ルル「そうですかい、笑いのセンスないやつが、コメディー系の二次小説書いてるなよ……」

K「言えてるww」

ルル「まあいいや、今日はこの辺で？」

K「はい、ということで、また次回もよろしく願います」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4598z/>

---

俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？

2012年1月13日18時56分発行